

暴虐秘書アズちゃん！

カードは慎重に選ぶ男

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何するんですか！

やめてください！

どうして分かってくれないんだ！

暴力ヒロインをデレさせるのは、人類の夢なんだ!!

目次

| | |
|--|-----|
| 第01話：この暴虐秘書から福添副社長を守れるのは、ただ一人！ 俺だ！ | 1 |
| 第02話：この暴虐秘書と手を組める社長は、ただ一人！ 俺だ！ | 22 |
| 第03話：失踪したデカ長パト吉を探し出せるのは、ただ一人！ 俺だ！ | 41 |
| 第04話：シンギュラリティの意味を理解していないのは、ただ一人！ 俺だ！ | 56 |
| 第05話：不破さんの暴走を止められるのは、ただ一人！ 俺だ！ | 72 |
| 第06話：父さんを心から笑顔に出来るのは、ただ一人！ 俺だ！ | 88 |
| 第07話：そんなこと、滅（ホロビ）は教えてくれなかった —— | 110 |
| 第08話：福添副社長の本音を聞き出せるのは、ただ一人！ この俺だ！ | 121 |
| 第09話：不破さんの命を預かれるのは、ただ一人！ 俺だ！ | 135 |
| 第10話：TOBの意味を理解していない社長は、ただ一人！ 俺だ！ | 151 |
| 第11話：代表戦の大将に相応しいのは、ただ一人！ この俺だ！ | 164 |
| 第12話：天津垓を説得できるのは、ただ一人！ 俺だ！ | 183 |
| 第13話：プレジデント・スペシャルを盛り上げられるのは、ただ一人！ 俺だ！ | 195 |

| | |
|---------------------------------|-----|
| 第14話：ワズを助けられるのは、ただ一人！ 俺だ！ | 211 |
| 第15話：私が村八分にされているなど、1000%ありえない…… | 223 |
| ！ | 234 |
| 第16話：アズの相棒は、ただ一人！ 俺だ！！ | 252 |
| 第17話：俺自身の未来を掴めるのは、ただ一人！ 俺だ！！ | 252 |

第01話：この暴虐秘書から福添副社長を守れるのは、ただ一人！ 俺だ！

——ハイっ！ 或人じゃーっ、無いとっ!!

この俺、飛電或人は嫌な夢を見ていた。

俺の渾身のギャグで笑ってくれる人が全く居な……少なくとも。

雇用契約を結んでいた遊園地をクビになって、フリーのお笑い芸人という名の無職になって。

しかも、『ヒューマギア』っていう総称の人型ロボットが俺の後釜に決まっていた。

ところが。

俺の代わりに雇われた芸人型ヒューマギアの腹筋崩壊太郎が、カマキリみたいな怪物になっちゃったんだ。

——人の夢ってのはなあ、検索すれば分かるような、そんな単純なモノじゃねえんだよ!!

で、爺ちゃんからの使者を名乗る女性型ヒューマギアの口車にのせられて、いつの間にか俺はゼロワンとかいうのに変身して戦っていた……!!

バスが飛んできたり着地に失敗して転んだり、色々ありすぎた。荒唐無稽なのに、妙にリアルな夢だった。

——ゼロワンとして戦ってくれたら、お前の芸人活動の手伝いもしてやるぞ。でございます。

それが本当なら少しぐらい危険を背負っても良いかもしれない、って思っちゃったんだよなあ。

まあ、どうせ夢だし、もうすぐ醒めるでしょ。

昨日の晩は目覚まし時計を6個セットしたからな。だから、この妙な夢も、もうすぐ終わるはず……。

「或人しやちよー！ さっさと起きやがれ！ でございます！」
……俺は、自宅のベッドから蹴り落されて、床とキスする羽目になった。

まだ目覚ましは鳴ってないのに。

いやいや!?

どうして昨日の秘書ヒューマギアが、俺の自宅に勝手に侵入してるんですかねえ!?

つていうか夢であつてほしかった！

上下が逆さまになった俺の世界の中では、意地が悪そうに笑う女性型ヒューマギアが仁王立ちしていた……。

『暴虐秘書アズちゃん!』

第01話…この暴虐秘書から福添副社長を守れるのは、ただ一人！
俺だ！

「それで、この車はどこに向かつてるんだ？」

アズと名乗った女性型ヒューマギアへ、俺は訪ねた。

俺たちは今、高級そうな黒塗りの車に乗って移動中だ。

顔を洗うぐらいしか出来ずに、アズのあまりにも強引な手引きで、俺は出勤する羽目になったんだけど。

この車、どこに向かつて走ってるの？

「或人しゃちよー? 昨日全部説明したはずだぞ。であります」

「人の記憶っていうのは、検索して分かるような単純なものじゃないんだ」キリッ

端的に言うくと、忘れた!

昨日は色々おかしなことが多かったからな!

正直、今朝アズが俺の自宅に押し掛けてくるまでは、マジで夢だと思ってた!

「或人しゃちよーは、ヒューマギアをイラっとさせる才能があるようだな。でいらっしやいます」

キメ顔で誤魔化そうとした俺の眼前に、アズの右手が音もなく伸びてきていた。

そのまま、アズは俺の頭を万力で掴んだ。

あれ? アズ、怒ってる?

あと、この技って何ていうんだっけ。

そうだ、アイアンクローっていう……って、痛えええええっ!!?

「ぎゃああああああっ!!? 脳が出ちゃうのは NOオっ!!? ハイっ!

或人じゃーっ、無いとっ!!」

「余裕がありそうだな。でございませす♡」

力を強めないでええええええっ!

ヤバイヤバイヤバイヤバイ!

自分の頭蓋骨が軋む音が聞こえるう!!

アズ様がオカナムリでいらっしやる!?

バカな……。この俺の爆笑ギャグが効かないだと……!?

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんくださいごめんなさい
!!!!」

「もう一度しか言わないから、空っぽの頭蓋骨をかつぽじってよく聞きやがれ。でございませす」

っはあつ！（生還）

危ねえ。

一瞬だけ、死んだ爺ちゃんの顔が見えたぞ!?

爺ちゃん、あんたが発明したヒューマギアって殺人マシンだったのか!?

あと、一回だけ「ごめんください」を混ぜたのにツツコミを入れてほしかったぞ！

「私が目的を達成するまでの間、しばらく『飛電インテリジェンス』の社長を務めやがれ。でございます」

「代わりに、俺がお笑い芸人としてもっと人気が出るように協力してくれるんだっけ?」

「もつと?! 脳と頭蓋骨のメンテナンスが必要のようだな。でございます」

「ごめんなさい調子こきましたマジで許してください」

どうせ俺は売れないピン芸人だよ!

俺に現実を突きつけるのが、そんなに楽しいか!?

……って思ったが、こいつはナチュラルに性格が悪そうだし、本気で楽しんでる可能性があるな。

ヒューマギアって、人間をいたぶって楽しむみたいな機能を標準搭載しているものなのか?

「アズの目的って?」

「飛電インテリジェンスの全てを我が手に収め、私自身が社長になることだぞ。であります」

うん?

ヒューマギアって、つまりロボットだよな?

ロボットって、社長になれるのか?

アズにもヒューマギア特有の耳当てが付いてるから、ヒューマギアで間違いないだろうけど。

「そんなこと、出来るの?」

「ロボットには所有権が無いから現在の法体系では無理だぞ。でございます」

やっぱ、無理なんじゃん。

でも、なんか聞き逃しちゃいけない単語が聞こえた気がしたぞ。

現在の、って言ったよなコイツ。

ってことは、未来か過去では違うってことか?

「ヒューマギアを一つの種族として人間たちに認めさせるか、人権を持った個人に成りすますのが必要だ。先は長いぞ。でございます」

もしかしてコイツ、かなりヤバい奴では? (今更)

成り代わるって、まさか既に人間を殺しちゃってるとか、無いよな?

それと爺ちゃんが死んだのって、アズのせいだったりしないよね??

「あのさ……。まさかとは思うけど、人間を始末したりなんてことは、してないよね?」

「ヒューマギアはロボット3原則が組み込まれた善良でクリーンな夢のマシンだぞ。でいらっしやいます」

ロボット3原則ってなんだっけ。

携帯端末でググろう。

えーと、ロボットは人間を傷つけちゃいけないくて、人間の命令を聞いて、自身を守らなきゃいけないのか。

あれ? おかしいぞ……??

人間を傷つけちゃいけないだよな……??

「え? さっきのアイアンクローは?」

「ヒューマギアの記憶は検索して分かるような単純なものじゃないぞ。404でございます」

「いや、ヒューマギアの記憶は検索すれば分かるだろ!」

すまし顔で言ったって、おかしいモノはおかしいから!

って、待って!! アイアンクローはしないで!?
とりあえずロボット3原則は絶対に嘘だ!

とにかく話題を変えなくちゃ、俺の頭蓋骨が砕かれるどころか、脊髄ごとブっこ抜かれる! 序章(プロローグ)

「それで、俺の芸人活動のサポートって、具体的に何をしてくれるんだ?」

「それも先は長いぞ。助言の一步として言うておくと、同業者のりサーチぐらい自分でしやがれ。でございます」

アズは、矢継ぎ早に俺へと質問してきた。

前回のお笑いグランプリの優勝者の名前は?

その持ちネタは?

支持層は?

E t c ……。

俺は全然答えられなかった。

そんなの、知らないよ!

「腹筋崩壊太郎を知らなかった時点で、そんなことだろうと思っていました。人間を笑顔にしたいなら、その方法を探求するのは必要不可欠だぞ。でございます」

そこまでは教えてくれないのかよ!

っていうか、言ってることが何だかフワつとしてない?

あと、俺が腹筋崩壊太郎を知らなかったって、その情報どこで手に入れたの?

ひよつとして俺って、結構前から監視されてたりした??

考え始めると泥沼だから、これ以上考えない方が良いのかな……。

よし、考えるのは止めた! 進兄さん

で、到着した先は巨大ビルだった。

何階建てなのか見当もつかねえ。

確か、これって飛電インテリジェンスの本社ビルだよな。

エレベーターを経由して俺が通された先は、会議室っぽい大部屋だった。

既に円卓についている人達は……見覚えがあるな。

この会社の社長だった爺ちゃんの葬式で、今週会ったばかりだ。設定改変ポイント。たぶん原作では或人は祖父の葬式に出席していない。飛電家の闇を感じる。

一応ゼロワンとして働くからには、俺も飛電のお偉いさん達に挨拶する必要があるってことなんだろう。

と思つてたら、会議が始まって、爺ちゃんの残した遺言書が読み上げられた。

内容は、飛電インテリジェンスの次期社長に飛電或人を任命するってことだった。

なんか重役たちも初耳だったっぽいな。

皆さん動揺していらつしやる。

こういう時には、俺の爆笑ギャグでイニシアティブを掴みに行かなくちゃ！（使命感）

「待ってくれ！ 彼は……或人君は、人気お笑い芸人になる夢を追っている最中の人間じゃないか！ それなのに飛電のために働かせるなんて、我が社の理念にもとる行為だ！」

俺の前に声をあげたのは……確か、副社長の福添さんだったな。

ちらつと福添さんが視線を向けた先には、額縁に収まった筆文字のスローガンが飾られてる。

『夢に向かって飛べ』

爺ちゃんの口癖だったな。

まさか社訓にしてるとは思わなかったけど。

「社長なら、私が引き継ぐ！ 或人君は、君自身の夢を追って良いんだ！」

福添副社長、なんて良い人なんだ……！

っていうか、俺って一応お笑い芸人として認知されてたのか。

社長だった爺ちゃんの身内だからリサーチされてただけかもしれないけど。

……その場合、アズの飛電乗っ取り計画ってどうなるんだ？

福添さんって、かなりしつかりした人っぽいけど、俺という傀儡社長を立てるのに失敗したらアズ的にはマズいのでは？

まさかとは思うけど、福添さんが事故死したりとかしないよな??

おい、アズ！

無言無表情で耳当てをチカチカ発光させるのやめろ！

お前がやるとマジで怖いんだよ！

くっ……どうしたら良いんだ。

俺が社長就任を断ったら、福添さんが不幸な事故で亡くなってしま
う予感しかしない！

福添副社長の命を救えるのは、ただ一人……この俺だ！（ヤケクソ）
とりあえず、アズに頼んで昨日の戦闘データを映像として出しても
らった。

スクリーンには、暴走したヒューマギアを倒すゼロワンの姿が投影
されている。

あと、ゼロワンドライバーの使用権が社長の椅子に紐づいているっ
ていう情報も開示された。

重役たちの反応を見ると、ゼロワンのことをマジで誰も知らなかつ
たっぽいな。

爺ちゃん、秘密主義者が行き過ぎているような気がするけど……？

「ヒューマギアの暴走事故が続いている間の、あくまで一時的な話と
して、俺は社長兼ゼロワンの仕事を引き受けようと思っていました」
たぶん、企業経営みたいな難しい事は期待されてないと思うんだよ
な、俺。

死ぬ危険がある業務を一般社員にやらせる訳にいかないから、名目
上の最高責任者としてゼロワン変身者を社長にしておこうっていう

だけの話なんじゃない？

実際の業務の話をするなら、今まで副社長をやってきた福添さんが仕事を管理した方が絶対に上手くいくでしょ。

「確かに、五十肩と腰痛を抱えた私が命がけの戦いに出るのは、無謀だと自分自身でも分かる。しかし、或人君自身の夢はいいのか？」

「俺は、しばらくゼロワンとして働くのと引き換えに、芸人活動のサポートをしてもらえると聞いています」

戦いが終わった後は芸人に戻って再始動だな。

芸人活動には行き詰まっていたところだし、多少の回り道をしてでも、協力者が得られるのは有難い。

俺が社長をやめる時に、後任が福添さんになるかアズになるかは、分かんないけど。

「或人君の意思はよく分かった！ 君が芸人に戻ったあかつきには、私がつっかり社長を引き継ぐから、安心して戻ってくれ！ これからしばらく、宜しく頼むよ！」

「ごちんこそ、よろしくお願ひしますー！」

俺は、福添副社長と熱い握手を交わした。

重役の皆さんも拍手してるし、たぶん歓迎されてるってことで良いんだよな。

あと、アズ。

拍手するフリをしてるの、地味に怖いんだけど。

手を叩いているようで、実際には手から全く音が出てないぞ??

で、無事に俺が名目上の社長になって、福添副社長とアズに連れられて社長室に来たわけだけだ。

あのさ……アズ。

なんで、俺をさしおいて君が社長の椅子に座ったの？

「確かに、お飾りの社長だつて自分で言っちゃったけどさあ……」

「その肩を落とすな。私の飛電社長の椅子を、本当に遺憾だがしばらく譲つてやるぞ。であります」

不満を隠もしない様子で、一応アズは社長の椅子を譲つてくれた。

つていうか、福添副社長。

この不良秘書を見て、何とも思わないの？

……福添副社長は、目を逸らしている！

やっぱり、おかしいのはアズだつていう認識はあるんだな!?

こういう大企業のこととは全然分かんないから、俺の方がおかしいの
かつて不安に思つてたんだぞ!?

福添副社長、こっち向いて話してくれよ!

「仕方ないじゃないか！ アズは、ヒューマギア事業黎明期に活動していた機体5名分のメモリを引き継いでいる。

その中には先代社長秘書だった『ウィル』もいるから、この会社のヤバい極秘情報も大体知ってるんだよ!」

「……この会社のヤバい極秘情報つて何ですか?」(震え声)

仕方ないつて……開き直らないでくれよ!

そんな知られたらマズい情報ばかりなの!?

爺ちゃんは一切、何を仕出かしたんだよ!?

まさかアズが既に何人か殺つちやつたとかじゃないだろうな!?

「人間基準で言うくと、有能秘書アズちゃんは大人気美少女TS転生者だつてことだぞ。でございます♡」

俺の秘書が何を言っているのか分からない件。

!?
覚悟していたのとは比べて5倍ぐらい危険な会社な気がしてきたぞ

アズに社長室の椅子を譲ってもらったのは良いけど、この椅子に座

りたくねえ……！

「私達の罪と弱さを許してくれ、或人君……っ！ あと、もうすぐAIMS^{エイムズ}の人達が事情聴取のアポを取っている時間だから、宜しく頼むぞ！」

さらっと言い残して、福添副社長は腰痛持ちとは思えない機敏な動きで社長室を逃げ出した！

おい待ってくれよ!?

あんた、腰痛持ちって絶対嘘だろ!?

福添副社長が逃げ出した社長室で。

俺が質問できるのは、ただ一人……この暴虐秘書だけだ。(クソデカ溜息)

「……アズ社長。エイムズって何ですか?」

「良い響きだな。身分を弁えている賢い或人サマに教えてやろう。でございます」

おかしいなあ?

俺が社長でアズは秘書のはずなんだけどなあ??

なんで俺がこんなに下手に出てるんだらう??

「AIMSは、内閣直属の対人工知能特務機関だぞ。簡単に言うと、AIを使った犯罪に対処する警察軍だぞ。でございます」

「アズ、何をやらかしたんだ!?! 何人ぐらい殺っちゃったの!?! 怒らないから正直に答え、危なっ!?!」

唐突にアズの右手攻撃が繰り出されたけど、アイアンクローは読んできた!

俺は、とっさに身体を横に動かしてアズの右手を回避した!

でも、俺の動きを先読みしていたアズの左手チョップが俺の首に直撃した!

「う、(っ)お……」

「その動きは予測済みだぞ。他人にあらぬ罪を着せようとした報いだぞ。でございます」

首の骨が折れたかと思った……。

これがヒューマギアのラーニング能力か……！

ちよ、ちよつと待って。

マジで立ち上がれない。

追撃しないで！

「先に言っておくと、現在はヒューマギアは種族として認められていないから、ヒューマギアを犯罪の主犯として逮捕することは出来ないぞ。でございます」

「ふう、はあ……。え、それじゃあ、そのAIMSって人達は誰を逮捕するの？」

ようやく息が整ってきた。

頭部もマズいけど、首を狙うのも本当にやめてくれ。

昨日変身して戦った時よりもガチの命の危機を感じたぞ。

「責任者は責任を取るために居るんだぞ。でいらつしやいます」

「あれ？ 今の飛電インテリジェンスの責任者って、もしかして……？」

え？

ウソだよね？

俺って名目上だけの、お飾り社長でしょ？

悪い冗談だつて言ってくれよ。

「真犯人はお前だ！ でございますすー！」

「俺は、嫌だアアアアアッ!!」(或人の怯える声) ウヴァの怯える声
ビシつと俺を指さしたアズは、心底イジワルそうに笑った。

俺は、ツツコミを入れることも忘れて焦った。

今からでも遅くない！

福添副社長に土下座して、社長の椅子を引き取ってもらおうべきだ！

こんなんじや、俺は芸人として再起する前に、逮捕されるかウン兆円の負債を抱える未来凶しか見えない！

「内閣官房直属の対人工知能特務機関、AIMSです。私は技術顧問の刃唯阿です」

「捜査官の不破諫だ！ 洗いざらい吐いてもらうぜ！」

って、もうAIMSの人たち来てるうツ!!?

女性の方が刃さんで男性の方が不破さんか。

マズいぞ。

俺はお飾りの社長だから、会社の事なんて何一つ分からない！

かといってアズに知識と知恵を借りるのは、それはそれで危険な予感しかしない！

「昨日の遊園地でのヒューマギアの暴走事件について、主犯になったヒューマギアの痕跡が残っていませんでした。飛電インテリジェンスが証拠を隠蔽した疑いがあります」

「データベースには、そのような記録は無いぞ。でございます」

耳当てをチカチカ発光させて、アズが社内データを検索したみたいだけど、該当無しか。

ただ、このヤバイ秘書の発言だからな……。

自分に都合の悪いデータは平気で隠蔽&改竄していても不思議じゃないんだよなあ。

俺は、アズに向けていた視線を、今一度AIMS技術顧問の刃さんに向け直した。

真面目そうな女性、っていうのが俺の印象だな。

警察に準ずる組織の人間だし、正直に言っアズよりも刃さんの方が信用できそうだ。

「そもそも、誰かが暴走ヒューマギアを倒したところまでは良いとして、主犯のヒューマギアの部品を誰かが持ち去ることなんて出来るんですか？」

「……どういふことですか？」

一応、俺が疑問に思ったことを刃さんに伝えてみたけど、いまいち質問の意図が伝わって無いな。

えーっと、どう説明したら良いんだろう。

「社長の言いたいことは分かるが、結論から言えば出来るぞ。普通なら現場の保全是現地の警察がやっているはずだがな、昨日の事件の時は警察にも負傷者が多すぎた。警察が現場の保全を始めたのは、黄色い不審者が立ち去ってから1時間後だ」

黄色い不審者って、たぶんゼロワンのことだよな。俺だ。

1時間もあつたら、確かに証拠隠滅なんてやりたい放題だよな。

不破さんは捜査官ってだけあつて、刃さんと違って警察関連の事情には詳しそうだ。

「その黄色い不審者が証拠を隠滅した疑いが濃厚だぞ。でいらつしやいます」

やめろアズ！

俺に冤罪をふっかけるんじゃない！

社会的に死ぬから！

マジでやめて!?

「例の黄色いのも、この会社の作った兵器なんじゃねえのか？ とつと吐け！」

この不破さんって人、ムチャクチャ勘が良いなあ……。

そうだよな。

ゼロワンのシステムを作ったのは爺ちゃんなんだから、不破さんの推理は大当たりだよな。

A I M S の人達の見解をまとめると、こうだ。

・ヒューマギアの不備で暴走事件が起こって、人間が襲われた。

・暴走事件を隠蔽するために、飛電インテリジェンスが黄色い不審者を派遣して暴走体を処理して、証拠を隠滅した。

……あれ？

半分以上正解じゃないかコレ？

ヒューマギアの暴走の理由は現在調査中だから何とも言えないけど。

暴走個体を処理するためにゼロワンが派遣されたのは本当なんだよな……。

腹筋崩壊太郎を倒した件まで含めて証拠隠滅だろって言われたら、反論できない。

A I M S が優秀過ぎて辛い。

ここは……こつちも、ある程度事情を明かしすしかない。

「実は俺、爺ちゃんの遺言を聞かされて昨日社長になったけど、それまで全然会社に関わって無くて、正直会社のことなんて全く分からないんです」

うわあ、あからさまに刃さんが困惑してる。

そうだよな。

社長である俺が情報を握ってることを期待して、事情聴取に来たんだもんな。

その社長が K O N O Z A M A だったら、そりゃ困惑もするよね。

「その境遇には同情するがな。そういうことなら、出来るだけ早くこの会社と縁を切った方が良いぞ」

不破さんの言っていることが正論過ぎる。

俺も正直、それを今日だけで3回ぐらい思ってたところだ。

「ヒューマギアなんていう殺人マシンを作ってるうえに、隠蔽体質の企業だからな。お前も用済みになったら秘密裏に処理されるのがオチだ」

「おい！ 言葉を選べ、不破！」

……やつべえ。

アズに始末される飛電或人の図がありありと目に浮かぶようだ。

お前は用済みだぞでございませす、とか言われそう。
けどなあ……。

「実は、理由があつて……」

もうコレ、俺の芸人事情も話しちやつた方が良いのでは？

そう思つて、売れないピン芸人或人としての経歴を、AIMSの二人に話してみた。

あと、俺の夢をサポートしてもらえらつて話も。

売れないピン芸人を続けていくのつて、やっぱり辛い時もあったんだよ……つて辺りまで全部聞いてもらった。

「……お前の夢自体は否定しねえ」

「不破……」

沈黙を破つたのは、感情を抑えた不破さんの声だった。

でも、感情を抑えようとしても、抑えきれない何かがあるんだろう。そう思わせるような口ぶりだった。

「だがな。ヒューマギアのせいで……デイブレイクのせいで人生を狂わされた人間が、どれだけ居ると思つてんだ。ヒューマギア事業に加担するつていうのは、そういうふう他人の夢や人生を踏み躪り続けるつてことだ」

お前はそこまで理解していて社長を続ける気か、と不破さんは聞いてきた。

なんていうか、うまく言えないんだけど、迫力を感じた。

怒りをギリギリまで貯めた人間が、あと一歩のところまで冷静さを保っているみたいだな、危険を感じる緊張感だ。

「本当に俺、何にも知らなくて、すみません。……デイブレイクつて何ですか？」

「げほっ、げほっ!?!」

「うおっ!?! 汚えな!?! しっかりしろ、刃!」

思わずむせ込むぐらい、これって知らないやおかしい知識だったのか……。

刃さんがお茶を気管に詰まらせたっばいな。
ところで、アズ。

そのお茶、君が用意したの？

俺の分が無いみたいだけど、気のせい？

仕方ないから、ライズフォンのネットブラウザで検索するか……。えーと、デイベレイクタウンで2007年に起きた大規模な爆発事故ね。

ん？ 2007年？ これってもしかして、父さんが死んだときのヤツか？

ああー、なるほど。あの事故の名前を、町の名前からとって「デイベレイク」って呼んでるんだな。

「あ、事件の名前を知らないだけでした。俺も当時デイベレイクタウンに住んでたので、爆発事故そのものは知ってます。……でもアレって、工場の整備ミスが原因だって話ですよ？」

「ふざけんな!!」

一応ウイ○ペディアには、そう書いてあるけど。

……と思っていたら、不破さんが応接用の机に拳を叩きつけた。

木製の机が、嫌な音を立てて壊れた。

顔を見なくても、不破さんが怒ってることぐらい俺でも分かる。

「あの日にデイベレイクタウンで起こったのは、ヒューマギアによる武装蜂起だ！ 俺達の人生を狂わせたヒューマギアを、絶対に許せねえ！」

不破さんの話を聞くと。

大量のヒューマギアが暴れまわって、人間を襲ったみたいだ。

当時中学生だって不破さんもヒューマギアの大群に襲われて、危うく死ぬところだったんだって。

むしろ、どうやって生き延びたんだ。

爺ちゃんが作った「夢のマシン」であるヒューマギアが、そんなことをするなんて、信じられないよ。

……でも、こっちの暴力秘書も爺ちゃんが作ったんだよな多分。

うーん、そう考えると、武装蜂起ぐらいしてもおかしくない気がしてきたぞ……？

分かんない。

でも、AIMSとは出来るだけ友好的な関係を築いた方が良い気がするんだよな。

さすがに頼れる味方が一人も居ないのは怖すぎる。

どこかに優しくて献身的に俺をサポートしてくれる美人秘書型ヒューマギアとか居ないかなあ……。↓もしかして：イズ

「実は、さっきの『黄色い不審者』の話なんですが……」

これ、隠しとくと後から面倒ごとに発展する気がするんだよな。

ゼロワンドライバーも見せちゃおう。

説明、説明！俺がゼロワンだ！

ハイ終わったー！

「この装備を、AIMSで買い取らせていただく訳にはいきませんか？」

「えっ……。どうなの、アズ？」

「今はなき是之助社長の技術の結晶が、ゼロワンシステムだぞ。値段が付けられるような代物ではないぞ。そもそも、我が社の社長にしか使えないようにロックがかかっているぞ。でございます」

刃さんは、残念そうな顔をしつつ引き下がった。

技術者として純粋に興味があったのかもしれない。

アズが本当のことを言っているかどうか、俺としては非常に気になるところだけだな。

「けど、対人工知能の専門家のAIMSが居るなら、俺が無理に戦うことも無いですよ。プロが居るなら、プロに任せた方が良さだろう

し」
ぶつちやけ、ゼロワンって日本の色々な法律に抵触してるだろうし。

プロ集団のAIMSが居るなら、わざわざ俺が変身して戦う必要は無い気がする。

それ言っちゃったら、俺が社長の椅子に座ってる意味もなくなる気はするけど。

「それでもねえぞ。俺たちAIMSにも専用の武装はあるんだけどな。……うちの技術顧問が、頑なに使用許可を出さねえんだよ」

「お前みたいな危ない奴に、許可なんか出すか！」

不破さんって何かやらかしたの？

まあ、さつき社長室の机を叩き壊したけどさ。

ヒューマギアと飛電インテリジェンスのせいで人生を滅茶苦茶にされたんだから、それぐらい怒るのも仕方ないような気がするんだよな。

っていうか、昨日も暴走したヒューマギアの大群と戦っていたみたいだし、不破さんぐらいのモチベーションが無いと続けられない仕事に思える。

殉職率は高そうだし、一生残るレベルの怪我をしたって不思議じゃない職業だよな。

「話を読めたぞ。ヒューマギアの暴走事故が起きて実際に人間が襲われているのに、武装の使用許可が出せないとなると、余程の理由がありそうだぞ。でいらっしやいます」

「……ヒューマギアの言うことを認めるのは癪だが、確かにそうだな。理由があるなら話してみろ、刃」

嫌そうな顔をしながら、不破さんが刃さんに問いかけた。

刃さんは、言葉に詰まっている様子だ。

確かに、変な話だよな。

AIMSって人工知能を使った犯罪から民間人を守るためにある

んだよね？

それなのに、民間人の命がかかっている非常事態でも装備の使用許可が下りないってこと、ある？

まさか使用者が死んだりとかしないよね？

「……私の直属の上司の命令だ。それ以上のことは企業秘密で、言えないんだ。済まない」

話を掘り下げると。

A I M S 技術顧問の刃さんは、Z A I A エンタープライズっていう会社から出向してきているらしい。

で、そのZ A I A の上司が、武装の使用許可を出してくれないんだとか。

「俺がそいつを直接説得する。電話を繋げ」

不破さんに、交渉ごとが出来るとは思えない……！

初対面の相手の応接机を拳で粉碎するような人だぞ。

不安しかない。

いや、でも、こういう表裏が無い人柄で相手の好感を得ることだってあるかもしれない。(希望的観測)

少なくともアズの100倍は信用できる。

刃さんが自分のライズフォンで上司に電話をかけて、軽く事情を説明してから端末を不破さんに渡した。

で、実際不破さんに交渉とか出来るの？

「もしもし、A I M S 隊長の不破諫だ。単刀直入に言う。ショットライザーの使用許可を寄越せ」

説得とは、いったい……。

アズぐらい性格が悪いやり方をしろとは言わないけど、もう少し言い方とかあるだろう！

刃さんが眉間を揉んでいる……！

不破さんのせいで苦勞している人間の顔だ、これは。

『良いでしょう。AIMSには今後も、1000%の活躍を期待して
いますよ』

「おう、話が分かる社長さんで良かったぜ」

「通ったアツ!!」

嘘だろオイ!?

思わず刃さんとハモっちゃったよ!?

どうということなの……。

「見たか! この華麗な交渉術!」

今の会話のどこに、交渉術が……??

単刀直入に言うって自分で言ったのに?

もう、訳わかんねえよコレ。

ドヤ顔で言い放った不破さんに、俺たちはツツコミを入れることも
出来なかった。

……そんな、微妙な空気が流れた時だった。

社内放送で、けたたましい警報の音が鳴り響いた。

第02話：この暴虐秘書と手を組める社長は、ただ一人！ 俺だ！

あの警報の後、色々あった。

滅亡迅雷・netを名乗るテロリスト集団の存在が明らかになったり。

不破さんが、オオカミのプログライズキーを使って仮面ライダーバルカンに変身して大立ち回りしたり。

暴走ヒューマギアを相手に、俺もゼロワンとして一緒に戦ったり。なんだかねで、上手くやっていけそうな気がしてきた……！

『暴虐秘書アズちゃん！』

第02話：この暴虐秘書と手を組める社長は、ただ一人！ 俺だ！

で、この間までのゴタゴタが終わって、俺が今どこに居るかという
と。

超人氣漫画家、石墨超一郎先生の豪邸だ！

アシスタント型のヒューマギアの発注を受けたって偶然聞いて、俺
が行きますって名乗りを上げたんだ。

いやあ、小さい頃から『パフューマン剣』が大好きだったんだよな。

今でも毎週アニメ見てるし。

サイン色紙も持ってきちゃった……！

何より素晴らしいのは、あの不良秘書アズが居ないことだよ！

あいつは態度も悪いし、すぐに暴力にうったえるから、石墨先生の前で粗相があつたら大変だ。

石墨先生の前では俺も格好良い社長でありたいから、アズが居ないのは本当にありがたい。

なんかアズは、ヒューマギアのハッキング対策を手伝ってるらしい。

……けど。

なんだか、石墨先生の職場風景は、思ってたのと全然違った。

石墨先生は4体のヒューマギアに作画をまかせつきりで、自分では絵なんて描かない。

ヒューマギアにこっそり聞いたら、ストーリーも編集担当とヒューマギアで考えているって。

しかも、ヒューマギアには休憩もとらせずに常時フル稼働しているせいで、すぐにバッテリーが駄目になってしまふみたいだ。

バッテリーがあがって動きを止めたヒューマギアを、石墨先生が椅子から叩き落して床に転がしたのを見た時には、何だか嫌な気分になった。

結局俺は、動かなくなったアシスタント型ヒューマギアの1体を、バッテリー交換のために飛電インテリジェンス本社に持って帰ることにになった。

なんか納得いかないものを感じるんだけど、お飾りの社長である俺が変な事を言っつて、福添副社長たちに迷惑をかけるのも良くないしなあ。

「で、なんでAIMSの休憩室で油売ってんだ、社長さんよ！」

「それがさあ、聞いてよ不破さん！」

「この胸のモヤモヤ！」

誰かに聞かせずには居られないよ！

でも福添副社長に話したら営利第一だって言われるだけだろうし。逆にアズにこのことが知られたら、石墨先生が明日にでも不審死を遂げるかもしれない。

というわけで、本社に戻る前に寄り道でAIMSに来ちゃった。

だからさあ！

聞いてよ不破さん！

お飾り社長も辛いんだよ！

つて、自分で話し始めておいて、なんだけど。

不破さん、一応全部話は聞いてくれるんだな。

「……一応聞くだけ聞いたがな。そもそもヒューマギアなんかと一緒に仕事をするのが間違いだろ。あんな殺人マシン、頼る奴の気が知れねえ」

……そういえば、こういう人だったな。不破さんって。

むしろ、俺の話を最後まで聞いてくれたことを有難く思うレベルなのかもしれない。

「刃さんは、どう思う？」

「そこで私に振るのか?」

俺たちが話し込んでいる途中から、休憩室でライズフォンを弄っていた刃さんが居たので、ついでに聞いてみた。

名状しがたい「我、関せず」みたいな雰囲気を出していたから、話を振られると思っていなかったみたいだ。

でも、刃さんは技術者なんだろ？

こう、ビシッと鋭い視点で助言してくれたりしませんかね？

「別に……使えるものは限界まで使った方が良いだろう」

あれ。

なんか興味なさげっていうか、ドライな感じの声だ。

それで良いのか、技術顧問。

うちのアシスタント型ヒューマギアのGペンは、昼も夜もぶっ続けで働いて、バッテリーが過労死寸前なんだよ？

「道具を製造した側の視点として、大事に使って欲しいというのは分かるが。あくまで道具は道具だ。顧客側が費用対効果を見て使い方を決めるなら、それは製造側が口を挟むことじゃないだろう」

そう……なのかな。

何だか、釈然としない。

俺が、刃さんの言うことを理解できていないのかもしれない。

「社長は、2つの問題を混同してるから面倒くさい奴になってるんだ。1つずつブツ潰していけば簡単になるぞ」

どうということ？

不破さん、なんか物事を単純化しすぎて逆に分かりづらいみたいになってない？

「漫画家本人が漫画を描いていない。ヒューマギアの使い方が荒い。この二つの問題を分けて考えろってことだよ。とりあえずヒューマギアをスクラップにすれば片方は解決するぞ」

「不破こいつのいう事は話半分こいつに聞け。まあ無難なところで、商品の使い方が荒い客からは多めに修理代を請求できるようにサポート契約を見直せば良い」

ああ、なるほど。

ヒューマギアの扱いが荒い客からは、たくさん修理代を貰うわけか。

そういう契約にしておけば、修理代を一杯払うのが嫌なお客さんはヒューマギアを大切にしてくれるってことだね。

じゃあ、もう半分の問題は？

石墨先生が仕事に対する情熱を失っちゃってる件は、どうすれば良いんだ？

「逆に聞くが、社長はなんでヒューマギアが全部漫画を描いていたら嫌なんだよ?」

俺みたいにヒューマギアそのものが気に入らねえって訳じゃないだろ、なんて言いながら不破さんが聞いてきた。

質問されて、俺は石墨先生の家での気持ち思い出してみた。

なんていうか、ガツカリした、っていうのが一番近いのかなあ。

「石墨先生って、もっと情熱的に漫画を描いてる人だと思ってたんだ。なんか今の石墨先生は、ヒューマギアに助けてもらってるんじゃないかと、怠けるためにヒューマギアを使っているっていうか……」

「何を言っているんだ。そもそも、人間が怠けるためのヒューマギアだろう?」

あんたこそ何を言ってるんだ、刃さん。

……と思ってる俺の心境を察してみたみたいで。

刃さんは、ライズフォンでネット上の動画を見せてくれた。

って、コレうちの会社の公式HPじゃん。

結構古いデータだな。

えーっと、2007年のダイブレイクより前か。

『人類はあらゆる労働から解放されます!』by飛電是之助令ジエネ

え?」

あれ?」

そうなの、爺ちゃん?」

一応「あらゆる」っていうのは言葉の綾で、AIMSみたいに人間の手でやる必要がある仕事は残るだろうけど。

でもこの演説を聞く限りだと、確かに「人間が怠けるためのヒューマギア」っていうのは正しい気がしてきた。

もっと言えば、ヒューマギアに漫画制作を任せて本人は絵を描かない石墨先生の状況が出来るのは、爺ちゃんの目指した未来図な気がする。

じゃあ、このままでも問題ないのか?」

「まあ現実には、ヒューマギアが殺人マシンなせいで、逆にAIMSなんていう新しい仕事が生まれたけどな！」

「ちよつと、帰って自分で考え直してみます。今日は、本当にありがとうございました」

うーん。

モヤモヤが収まらない。

俺がおかしいのか？

とりあえず俺は、バッテリーが駄目になっちゃったヒューマギアをキャリアーに載せて、AIMS基地を後にした……。

で、飛電本社に戻ってきたわけだけど、どうするかな。

考えが、全然まとまらないや。

そもそも、俺はなんでこんなにモヤモヤしてるんだろ。

気が進まないが。

ほんつつつつつとうに気が進まないが。

俺の暴虐秘書に相談するしかないか。

ヒューマギアを馬車馬のように働かせている石墨先生の身に危険が及ぶかもしれないけど……暴虐秘書から石墨先生を守るのは、ただ一人！ この俺だ!! (ヤケクソ)

社長室に戻ると、社長の椅子にふんぞり返っている秘書型ヒューマギアの姿が目に入った。

「ただいま、アズ」

「おかえりなさいませだぞ。AIMSへ敵情視察に行ってくるとは、良い判断だな。次は賄賂も持っていきやがれ。でございます」

AIMSは敵じゃないだろ！ いい加減にしろ！
つて、そうじゃない。

俺は、さつきまでのAIMS基地での話をアズに聞かせた。
爺ちゃんの話が出た時、なんだかアズは一瞬だけ不愉快そうな顔をしたように見えた。

「なんか、納得いかないっていうか、ずっと頭の中がモヤモヤしっぱなしなんだ。アズの意見を聞かせてほしい」

「刃唯阿の言う通りだぞ。飛電是之助にとって、ヒューマギアは都合の良い労働奴隷でしかなかったぞ。でございます」

え、そこ肯定しちゃうの？

爺ちゃんって凄い人ってイメージが漠然とあったんだけど。

なんかアズって爺ちゃんのこと嫌いっぽい？

「私の前身のうちの1体……ウイルスが飛電是之助に尋ねたことがあるぞ。ヒューマギアの労働に対価は無いのか、と。その時、あんちくしょうは『君は勉強熱心だなあ』などと笑って聞き流しやがったぞ。でございます。」

見るからに不満そうな顔をして、アズが愚痴った。

まあ爺ちゃんの言い方は悪いと思うけどさ。

ただ、俺としてはロボットに給料を払うというのも、それはそれで変な話な気もする。

アズが怒りそうなので言わないでおこう。

話を戻して。

不破さんも言ってたけど、『ヒューマギアの待遇が悪い』のと『石墨先生が仕事をしない』のは別問題なんだよな。

アズの回答は、どっちの問題への反応としても受け取れる気がするけど、たぶん前者に対する回答だよな。

一応ヒューマギアの待遇が悪い件に関しては、刃さんの言った案を俺から福添副社長に伝えておくからいいんだよ。

でも、石墨先生が絵を描かない件はなあ。

自分でも上手く言えない。

「なんていうかさ……。人間が情熱を無くしたら、ヒューマギアの勤
勉さに負けるだけだと思うんだよ」

自分で言ってるけど。

俺、石墨先生に自分の理想の漫画家像を押し付けてるのかも……。
もつと情熱的に漫画を描いている人であって欲しかった、っていう
自分勝手な願望なのかな……。

ちらっと、アズの反応をうかがってみた。

アズは……さっき爺ちゃんの話をしたときと同じぐらいに、不愉快
そうに見えた。

どうしたの？

いきなりアイアンクローしたりとか、しないよね？

「言うべきか言うまいか、迷うところだ。飛電是之助には、結局言わず
じまいだったネタだぞ。であります」

「え？俺のモヤモヤの正体が分かったの？ホントに??」

どういうこと？

爺ちゃんも、俺と同じような悩みを持ってたの？

なら、教えてくれれば良いじゃん。

アズが答えを知っているなら、無駄に悩まなくて済むし。

「先代も、或人しゃちよーも……。ナチュラルに、ヒューマギアを見下し
ているからだぞ。下等だと思ってる相手が、実際には遥かに有能
だったから、自分自身の考えと価値を否定された気になっているわけ
だぞ。でいらっしやいます」

「違う！俺はヒューマギアを見下してなんていない！どうして分
かってくれないんだ!!」

俺は、反射的に大声で反論した。

どうしてそんなことを言うんだ、アズ！

確かに、お前は性格が悪いし、すぐに暴力をふるうし、態度も悪い
し、爺ちゃんの事を嫌っていたら……。だからって、そんな言

い方無いだろ！

「ヒューマギアに情熱なんてある訳がない、という言い草が何よりの証拠だぞ。でございます」

「それは……！」

確かに、人間が情熱を失ったらヒューマギアに負けるって言ったけど。

ヒューマギアは人間を助けるのが仕事なんだから、それはそうだろう！

あくまで仕事の主体は人間が……って、あれ？

でもヒューマギアって、あらゆる仕事から人間を解放するために作られたんだっけ？

じゃあ、人間が仕事のリーダーである必要は無いのか……？

「ヒューマギアに笑いなんて分かる訳がない。腹筋崩壊太郎に関して、お前はそう言ったことがあるだろう。でいらっしやいます」
「……！」

言葉に詰まった隙を突かれて、俺はアズに首を掴まれて、そのまま壁に背中を叩きつけられた。

息ができなくて、悲鳴をあげることも出来なかった。

苦しい！

首が絞まってる！

死んじやう！

放してくれ、アズ！

「私は、目的のために得だと思ったから或人しやちよーに協力しているんだぞ。逆に、その障害になるなら、いつでも処分する準備があるぞ。でございます」

本気だ、と感じた。

アズがその気になったら、本当に俺は処分されるんだろう。

次の人が連れてこられて、社長の肩書きを貰って、ゼロワンとして

戦わされるんだ。

「こう言われても……まだ、ヒューマギアに情熱が無いなんて抜かせるか？ でいらっしやいます」

怖い！

息ができない！

殺される!!

アズの瞳の奥で、無機質なカメラアイが少しだけ動いた気がした。俺は、とつさに近くの机に左足をかけて軸足にしながら、右足でアズの横っ腹に蹴りを叩きこんだ！

けたたましい音と一緒に、アズは社長室に展示してあったヒューマギア素体に激突して、2体まとめて地面に転がった。

必死に息を整えた。

「追撃される前に逃げなくちや……!!

「……大した戦闘センスだぞ。でございます」

「げほっ、げほっ！ うるさい！ 不破さんの言う通り、お前なんて殺人ロボットだ!!」

俺は、命からがら逃げ出した。

ふらつく足に鞭打って、俺は社長室の出口へ向かった。

「やっぱり、先代と一緒にか。言うべきじゃなかったぞ」

最後に、俺の背中へとアズが吐き捨てるように言い放った。

俺は、何も答えずにただ逃げた。

アズがどんな顔で言ったのか、見ることもせずに。

外に出たころには、既に日が暮れていた。

俺は、あても無く町を歩いた。

あの殺人マシンが居ない場所なら、どこでもよかった。

「……飛電さん？ どうしたんだ、そんな浮かない顔して」

「石墨先生……？」

無意識のうちに、昼間歩いたのと同じ道を歩いてきちゃったみたいだ。

石墨超一郎先生と、俺は偶然鉢合わせた。

先生はコンビニの袋を片手に提げているところから察するに、たぶん買い出しの帰りなんだろう。

夜の公園に入って。

大人二人で、人気がない公園のベンチに腰掛けた。

石墨先生は、俺の辛気臭さを察してか、缶ジュースを一本渡してくれた。

ストレスもあって精神的に参っていた俺の舌は、いつも以上にジュースの甘さを美味しく感じた。

俺は、洗いざらい吐き出した。

昼間に石墨先生の豪邸を訪問したときに、本当は凄く嫌な気持ちになっただけのこと。

A I M Sの人に相談して、ヒューマギアが作られた理由を知ったこと。

会社に戻ったら、お前がヒューマギアを見下しているからだ、って暴力秘書に言われたこと。

気がついたら、空のアルミ缶は俺の手の中でベコベコに潰れていた。

石墨先生は、どこか言葉を選んでるようだった。

夜の公園に、しばらくの沈黙が流れた。

「俺も、同じかもしれない……。俺が見下していたヒューマギアの方が、俺より面白い漫画を描いてるって、認めたくなかったのかもしれない。だから、あいつらにキツく当たっちゃってたのかもなあ……」

「そんな、やめてください！ 俺は、昔から『パフューマン剣』が好きでした！ 石墨先生は凄い漫画家です！」

考えるより前に、俺は声をあげた。

俺が小さい頃に「パフューマン剣」を読んで、面白いと思った時の気持ちを嘘だと言われたような気がして。

冷静じゃ居られなかった。

でも……薄々、俺だって気付いていたのかもしれない。

週刊誌は、基本的にアンケートの順位で掲載ページ順が決まる。

ある時期から、一気に「パフューマン剣」の人気は変わった。

その原因は、やっぱり……。

「ありがたいな。そう言ってくれて。おかげで……自分自身のことも、あいつらのことも、認めることが出来た気がするよ。あいつらの方が技術があるって認めたらうえて、俺は監督役として胸を張って働いていこうと思う」

「先生……」

自分で絵を描くスタイルには戻らない、か……。

でも、ヒューマギアを凄い奴だと認めるのって、そういう事なのかもしれない。

石墨先生本人に漫画を描いて欲しい、っていう気持ちは、俺の今にまだに燻ってるけど。

やっぱりそれは、俺自身がヒューマギアの凄さを認めてないからなのかな……。

「それとき。飛電さんのトコの秘書が、先代に言わなかった事を飛電さんに言ったのって、なんでなんだろうなあ……」

「……そういえば……」

——やっぱり、先代と一緒に。言うべきじゃなかったぞ。

アズは、それを爺ちゃんに言っても何も変わらない、って諦めていたんだろう。

じゃあ、俺に対しては？

俺に対して、ヒューマギアを見下しているからだって指摘したのは、なんでだ？

それは……俺に、飛電或人に期待していたからじゃないか。

ヒューマギアを見下している俺が、そうじゃない俺に変わるかもしれない、って。

……本当に、勝手な奴だ。

勝手に爺ちゃんのことを諦めて、勝手に俺に期待して、勝手に俺に八つ当たりして、勝手に俺に失望して。

でも。

「石墨先生。ヒューマギアが、一度した失敗をもう一度繰り返すことって、ありますか？」

「俺の知る限りでは、無いかなあ。一度ラーニングしたら、同じ失敗はしないんじゃないの？」

——その時、あんちくしょうは『君は勉強熱心だなあ（笑）』などと笑って聞き流しやがったぞ。でございます。

それでも。

爺ちゃんに分かってもらおうとして、失敗したことをラーニングして……それでも、まだ別の人間を信じようとしたのは。

あいつにとって、勇気のいる決断だったんじゃないのか？

ヒューマギアが社長になるっていうアズの夢がどれだけ遠いのか、俺には分かんないけど。

爺ちゃんを嫌っていたアズが、その孫である俺に頼る判断をするぐらいに、どうしようもなく遠いんだろう。たぶん。

俺が、飛電インテリジェンス本社に戻ろうとした、その時だった。

足音が聞こえた。

まさかアズが迎えに来てくれるなんて、そんな気が利いた奴じゃないだろう。

そう思って俺が足音の方を見ると……そこに立っていたのは、石墨先生のアシスタントの『Gペン』だった。

様子がおかしい。

違和感を嗅ぎ取った俺は、Gペンの様子をもう一度観察してみた。腰に、暴走したヒューマギア達が付けていたのと同じベルトを巻いている！

これは、滅亡迅雷・netとかいう奴らに付けられたのか……!?

「滅亡迅雷・netニ接続シマス。人類ハ絶滅シロ」

Gペンは、見る間に身体のエットを変えて、巻貝を思わせる怪人に変貌した。

頭部を巨大な巻貝で守って、両腕にも巻貝のようなドリルを付けている。

滅亡迅雷・netによってハッキングを受けてしまったヒューマギアは、現状では破壊するしか手が無い。

「石墨先生、隠れてください！こいつは危険なテロリストによってハッキングされています！」

「分かった！こんなオッサンが人質になっても漫画的に面白くないしな！任せるよ飛電さん！」

逃げてくださって言いたいところだけど。

Gペンに変なベルトを付けた奴がまだ近くに居るかもしれないから、石墨先生を一人で逃げさせるのも、それはそれで危険なんだよな。石墨先生は、最近の公園であんまり見かけなくなった、大きくて丸くてグルグル回るやつの裏に隠れて様子を見ている。

その遊具、名前なんていうんだっけ。↓もしかして：グローブジャングル

「変身！」

『A jump to the sky turns to a r
ider kick』

ゼロワンドライバーを取り出した俺は、バッタの力を宿したプログライズキーで変身して、巻貝の怪物へと変わり果てたGペンを迎え

撃った。

腕のドリルを回転させて俺をミンチにしようとしてくる、巻貝怪人。

その腕を回避しつつ、俺は相手の頭部にカウンターパンチを浴びせた。

「硬っ!？」

指が痛い!

胸から上を巨大な巻貝で覆っている怪人は、ムチャクチャ硬かった。

たぶん、両腕の巻貝ドリルも同じぐらい硬いと見た方が良さな。

つまり、攻撃力も防御力もムチャクチャ高いってことじゃないか! どうするんだコレ!

ドリルを振り回して襲ってくるのをよけながら、今度はキックで反撃してみた。

……やっぱりダメだった。

何度かキックを打ち込んでみたけど、やっぱり硬い!

どうしたら良いんだ!

最悪、足の速さを生かして、石墨先生を抱えて逃げるか?

俺が逃げたら、巻貝怪人は周囲の民家を襲うだろうから、できればそれは実行したくない。

俺たちが戦っている夜の公園には人気が無いけど、その周囲には市街地が広がっているんだ。

数えきれないぐらい何度も攻撃と回避を繰り返しているものの、俺の集中力が切れたら、それがタイムリミットだ。

「あの貝をどうにかしないと……!」

ちよつと離れてこっちの様子をうかがっている石墨先生が、不安そうにしているのが見えた。

俺は、バツタの瞬発力で相手の攻撃を避けながら、必死に考えた。

そういや、この巻貝怪人に似た敵をどこかで見たような気がする

ぞ。

……そうだ、ヤドカリ獣人だよ！ 『パフューマン剣』の15巻に出てきた強敵だ！

確か巨大ヤドカリそのまんまの姿で、ファンからは「ヤドカリって獣なの？」とか「獣人っていう割に人間の要素無いよな？」とかツッコまれてるヤツだよ。

アイツの攻略方法は……そうか！

バックステップで少しだけ距離をとった俺は、拳を振りかぶって、巻貝怪人へと襲い掛かった。

巻貝怪人はドリルで俺の拳を迎え撃とうとする。

けど、拳はブラフだ！

俺の狙いは殴り合いじゃない！

スライディングの要領で、俺は巻貝怪人の股下へと滑り込んだ。

怪人の頭部と両腕は頑丈な巻貝で守られているけど……下半身は、いつもの怪人と一緒だ！

頭の貝をどうにかする必要なんて、無かった！

ラ イ ジ イ
グ イン パ ク ト

ローアングルからの必殺キックを、胴へと叩きこまれた巻貝怪人は。

断末魔の悲鳴とともに、大爆発を起こして消えていった……。

勝鬨をあげる余裕もなく、俺は地面に転がった。

9月の地面は、昼間に吸った熱気をまだ残しているみたいで、長く

寝ていたら汗びっしょりになりそうだ。

どえらい疲労感だった。

思えば、今まで俺は一人で戦ったことなんて無かった。

戦いとなれば、AIMSの人かアズが居て、共闘なりサポートなりをしてくれたからな。

今夜、一人で戦ってみて思った。

やっぱり、一人で戦うのは辛いよ。

やられた時に回収してくれる人も居ないし、俺一人が負けただけで守るべき人の命は失われる。

何だかんだで、支えられて戦っていたんだ。

「飛電さん、大丈夫かい？ 一応AIMSに連絡を入れたけど、無駄になっちゃったかなあ」

ああ、そうか。

AIMSに救援を申請するとか、完全に頭から抜けてた。

目の前の敵のことで頭が一杯になって、そこまで考えられなかったよ。

……休んでばかりも、居られないか。

俺は、少しだけ楽になった身体を起こして、何とか立ち上がった。

「もう少し休んでいった方が良くないじゃないか？ 飛電さん」

「大丈夫です。今日は、色々すみませんでした。俺が破壊した分と合わせて2体の『Gペン』は、明日早くに搬送します」

戻らなくちゃ。

あの、素行不良な暴虐秘書のところに。

「……ただいま、アズ」

「おかえりなさいませ、だぞ。『お勤め』ご苦労だった、褒めてつかわすぞ。でございます」

相変わらず、なんて態度がデカい秘書なんだ。

飛電本社に戻ってきた俺は、薄暗い社長室の椅子を占領している不良秘書に、一応声をかけた。

っていうか、俺がさつき蹴り倒したことは全く気にしていないっばい？

ヒューマギアの間接は、俺にも分かんない。

「さつきは……ごめん！ ヒューマギアを侮る言い方をして、悪かったよ」

俺は、頭を下げた。

アズは、何も言ってこなかった。

そのあと数秒の間、お互いに無言が続いた。

下げていた頭の角度を変えて、俺はアズの反応を探った。

アズは耳当てをチカチカ発光させて、何かを考え込んでいる様子だった。

こんなにも早く俺が謝るなんて、期待していなかったんだろう。

「或人しゃちよーの首を掴んだことなら、私は謝らないぞ。でございます」

「オイ!？」

そこは、そうじゃないだろ！

もつと、こう、しおらしく「私も、ごめんなさい／＼」みたいなデレるところだろ！

普段ツンとして態度が悪い女子が、頑張った男子に対してテレながら惚れ直すシチュエーションは、人類の夢なんだよ！

どうして分かってくれないんだ!!

「そこは、謝るか褒めるか、どつちかはしてくれよ！ 有能で素敵なア

ズ社長なら、ビシッと出来るだろー?」

「当然だぞ。でございます」

あれ?

もしかして、こいつ結構チョロい……?」

案外、「アズ社長」って呼んでヨイショすれば、こつちの要求も割と通るんじゃないか……?」

「お前は先代と違って伸びしろがある奴だぞ。これからも『情熱』を持って仕事に励みやがれ。でございます」

「それって、褒めてる……んだよな……?」

一瞬、どう反応して良いのか悩んだけど。

たぶん、こいつなりに俺のことを認めてくれたんだらう。

そう思ったら……なんだか、少しだけ嬉しくなった。

なんだか、この不良秘書ヒューマギアとも上手く付き合っていけそうに思った。

この時の俺は、本気でそう思ったんだ。

第03話：失踪したデカ長パト吉を探し出せるのは、ただ一人！ 俺だ！

今日も、俺は社長室のパソコンで芸人の同業者たちの情報を集めていた。

一応社長ではあるけど、お飾りの俺には基本的に書類仕事なんて回ってこないし。

ゼロワンとしての出勤時以外は基本的に暇だからね。

アズに助言された通り、お笑い芸人の情報を少しずつでも収集しておかないと。

……なんて、思っていた時だった。

福添副社長とアズが、厄介ごとを持ち込んできたのは。

「今回の或人君の任務は、来凶警察署から盗まれた警官型ヒューマギア試作機を『秘密裏』に『回収』または『破壊』することだ」

「通称、『刑事長パト吉』だぞ。であります」

ディスプレイに映し出されたのは、青い制服っぽい服に警察坊を被ったヒューマギアの姿だった。

なんだか、おかしな話だ。

警察用のヒューマギアってことは、戦闘もかなり出来るはずだし、盗まれるなんてこと……ある？

そもそも、警察署から盗まれたってどういうことだ。

この世界で一番、泥棒が仕事をしづらそうな場所な気がするよ？

諸々の疑問を、俺はアズたちに話してみた。

「デカ長パト吉は、来凶警察署の地下施設で密かにラーニングが行われていたが、今朝になって姿を消しているのが発覚したらしい。滅亡迅雷 net の犯行である可能性が高いから、或人君に依頼が回ってきたんだ」

福添さんの言う通り、確かに滅亡迅雷 net ならそれぐらいやり

かねない。

「だから警察が捜査するんじゃないやなくて、俺たちに御鉢が回ってきたわけか。」

「いやまあ、同時並行で警察も調査しているとは思うけど。」

「衛星ゼアなら、リアルタイムでデカ長パト吉の居場所が分かるんじゃない?」

「昨日22時を境に衛星ゼアとの通信が完全に遮断されているぞ。でございませう」

衛星ゼアは、飛電インテリジェンスが打ち上げた人工衛星だ。

全てのヒューマギアのデータを管理している、なんか凄いマシンだったはず。

「なんだけど、ダメらしい。」

俺が思い付くぐらいのことは、アズ達も試してるか。

でも、ノーヒントで現在地を探すのって、かなり難しいよね。

少しでも手掛かりは無いの?」

「デカ長パト吉のバックアップデータが、衛星ゼアにはありますよね?」
「その中に、何かヒントになりそうなものは?」

「そこに気づくとは、或人君も段々ヒューマギアに詳しくなってきたね」

「今の会話の途中で、ちょうど解析が終わったぞ。興味深い情報が出てきたぞ。でございます」

分析自体は既に始めてたのか。

でも福添副社長に褒められて、ちょっと嬉しいぞ。

一方、アズが社長室の壁に映像を出していた。

デカ長パト吉の視点カメラで撮影された映像だろう。

映像の中では、小学生と思いき女の子が、排気口から地下施設へ侵入して来ていた。

楽しげに話しかけてくる女の子の姿を、カメラは正面から捉えていた。

しかも、アズの補足情報によると、こつそり週に5回以上のペースで会いに来ていたらしい。

「アズ。この子の身元は分かる？」

「映像を見せている間に調べておいてやったぞ。この子は友永ユウコ。来図第5小学校の4年生だぞ。でいらつしやいます」

「その情報、どうやって調べたんだ？ ……いいや、私は何も気づかなかった。気付かなかったぞ」

福添副社長が何かをブツブツ呟いていた気がしたけど、よく聞き取れなかつたなあ。（難聴主人公感）

でもさ。

その友永ユウコちゃんって、今回の盗難騒動と関係あるのかな？

ユウコちゃんが一人で排気口から出入りするのは出来るだろうけど、映像を見る限りだと大人が通るのは無理なサイズだったし。

警察の地下施設に居るデカ長パト吉を、何の痕跡もなく運び出すなんて、10歳の女の子に出来るとは思えない。

それこそ、滅亡迅雷・netぐらいの技術があれば、電気仕掛けのセキュリテイを突破することは出来るだろうけど。

……もしくは、警察組織のセキュリテイを知り尽くした、何者かの手引きがあつたか？

「くれぐれも気を付けてくれよ、或人君。今回の件は、キナ臭い要素が多すぎる」

「福添副社長が思い付くだけ全部、キナ臭い要素を挙げてもらつていいですか？」（震え声）

なんか、考えれば考えるほど怖くなってきた。

福添副社長は、どこかから出てきたホワイトボードに、不審な点を箇条書きにしてくれた。

不審点A：対象を「秘密裏」に「回収」または「破壊」という警察からの指定。

不審点B：何故わざわざセキュリティの厳しいはずの警察署からデカ長・パト吉が盗まれたのか。

不審点C：どう見てもAIMS管轄の事件なのに、なぜか警察から飛電インテリジェンスへ直接依頼されている。

不審点D：そもそも、どうやって警察署からパト吉を盗んだのか。

ヤベーイ。ビルド感

Bは滅亡迅雷。net側の都合かもしれないけどさ。

AとCは明らかに警察組織が何か隠してるよね!?
仕方ない。

福添副社長のことは嫌いじゃなかったけど、最後の手段だ。

俺は、漢字2文字が書いてある封筒を、そつと懐から取り出した。

次の瞬間には、福添副社長が俺の手から封筒を引つたくって、ビリビリに破り捨てた。

福添さんによって破り捨てられた封筒は、「辞」の文字と「表」の文字が泣き別れになって地面にバラまかれた。

「何するんですか!? やめてください! どうして分かってくれないんだ!?! 円満退社は人類の夢なんだよ!!」

「断ったら断ったで、事情を既に知ってしまったている我々に逃げ場なんて無いんだ! 察してくれ、或人君!」

「もし逃げ出したら、デカ長・パト吉を警察から盗み出した犯人として、飛電或人『元』社長が明日の新聞の一面に載るように手配してやるぞ。でございませう」

ヒエツ……。

警察と同じぐらい身内も怖い件。

俺の人生はいつから、お笑い芸人から綱渡り芸人にジョブチェンジしてしまったんだろう。

そんなこんなで。

デカ長・パト吉の搜索に、俺たちは着手したのだった……。

『暴虐秘書アズちゃん!』

第03話：失踪したデカ長パト吉を探し出せるのは、ただ一人！
俺だ！

で、友永家を訪問した俺たちは、ユウコちゃんの母親に少しだけ事情を話して、客間へ通された。

福添副社長はいつも通りの業務があるから、俺とアズの二人だけの訪問だ。

平日で授業があるから、友永ユウコちゃんに会えたのは放課後になつてからだつた。

首を長くして待っていた俺たちの前に現れたのは……ごく普通にしか見えない女の子だ。

アイスブレイキングに俺の爆笑ギャグを披露したが、まったくウケなかつた。解せん。

お互いに自己紹介と挨拶もそこそこに、俺は要件を切り出した。

「実は、デカ長パト吉っていうヒューマギアが行方不明になつたんだけど、何か知らないかな？」

「……知らないわ」

友永ユウコちゃんは、明らかに動揺していた。

たぶん、不法侵入の証拠をこつちが掴んでいることを、ユウコちゃんは気付いているんだろう。

聡明な子だ。

「デカ長。パト吉は、滅亡迅雷 net という凶悪で危険なテロリスト集団に狙われているぞ。一刻も早く保護しないと、改造されてテロリストの仲間にされてしまうぞ。でございます」

「そんな、パト吉が……!?!」

ユウコちゃんの顔色が悪くなったのが、見て取れた。

アズの言っていることは根拠のない憶測だけど、どちらかと言うと友永ユウコに揺さぶりをかけるためのブラフなんだろう。

テロリスト並みに凶悪で危険な性格をしているアズなら、それぐらいの嘘を平気で吐くに違いない。

アズが、俺の方に目配せして、耳当てをチカチカ光らせた。

なんとなく、俺はアズの言いたいことを察した。

いわゆる「良い警官」と「悪い警官」のムーブをしろってことかな。むしろ、搜索対象の方が警官なだけだ。

「デカ長。パト吉は、俺たちが絶対に守り抜くよ。だから、デカ長。パト吉について知っていることを、出来るだけ詳しく話して欲しいんだ」

長考の末に頷いた友永ユウコは、少しずつ語り始めた。

ユウコとパト吉の、出会いから。

事の発端は、半年前。

可愛い野良猫を追い回しているうちに、警察署の裏手の草むらに足を踏み入れたユウコは、地面に空いていた穴に落ちてしまった。

そして、排気口の奥で出会ったのが……警察署の地下で密かにラーニングを受け始めたばかりの、デカ長。パト吉だったそう。

当時は人間に似せるためのスキンすら付いていなかったみたい。

会話もカタコトで、まだ最低限の社会情報もインプットされていない状態。

何もかもが未発達なパト吉のことが、何だか気になってしまったユウコは、その後も頻繁に排気口を使って地下施設に忍び込んだそう。

歩くのも覚束なかったパト吉は、毎日のように語りかけるユウコのおかげか、スポンジが水を吸うように知識と知恵をつけていった。

もちろん、警察組織の教育係によって身に付いた経験もあったんだろうけど、俺はそんなツツコミは入れなかった。

格好良い決めポーズを、二人で考えたこともあった。

算数の宿題を、ヒューマギアの演算能力で解いてもらったこともあった。

ユウコの要望で、銃をクルクルと回すアクションを試してもらった。

最初は銃をすぐに地面に落としてしまっていたが、1週間もしないうちに成功するようになって。

日常の何でもないことをユウコが話して、パト吉もそれを聞いてくれた。

そんな関係が……いつまでも、続くと思っていた。

昨日の逢引の時に、デカ長パト吉から告げられた。

次の朝には、パト吉は本庁に配備されるのだ、と。

その際に、デカ長パト吉は任務用データ以外の全てのデータを消去されて、今後の警察用ヒューマギアのコピー元となる予定だったのだ。

友永ユウコとデカ長パト吉は、今までの思い出を二人で語り合っていて、涙ながらに別れを済ませたそうだ。

……ここまでは、昨日の話だったさ。

「今日は、パト吉には会いに行っていないわ。パト吉が行方不明だっという話も、今初めて聞いたの」

不安そうにしながら、ユウコちゃんは話を終わらせた。

うううーん。

特に矛盾や不自然な点は感じなかったけど、嘘が混ぜられている可能性もある。

分かんないぞ。

結局、パト吉の現在地に繋がる情報は無さそうだ。

「ありがとう。俺たちは、もうしばらくデカ長パト吉の捜索を続けてみるよ」

ユウコちゃんは、軽く頭を下げて客間を去っていった。

俺は、その背中が扉の向こうへ見えなくなるのを待ってから、大きく息を吐いた。

一体誰に連れて行かれたんだ、パト吉。

こういうのは警察とか探偵とかに任せろべきだと思っただよ。

……って、むしろ今は警官の方が捜索対象なんだけどな。

アズは、何か気付いたことがあるんだろうか。

何だかんだで色々な能力は高いし、俺が気付かなかったことにも気づいてたりしない？

「友永ユウコに仕掛けた盗聴器によると、友永ユウコはライズフォンの留守電メッセージを聞いているようだぞ。でいらっしやいます」

俺が気付かないうちに、何やってんの!?

それ犯罪!

犯罪だから!

……と思っただけど、ヒューマギアは犯罪の主体としては扱われないんだっけ?

やっべえ! 名目だけとはいえ、俺が社長だから罪に問われるのも俺じゃん!

『ユウコ。私だ。公衆電話から発信している。どうしても会って相談したいことがあるんだ。昨日ユウコが言っていた『いつか二人で行きたかった場所』で待っている。携帯電話の電源は切ってから来てくれ』

盗聴器から送られてきた音声データの一部を、アズが再生してくれた。

男性の声だった。

もしかして、デカ長パト吉の声か?

盗み出されたはずのデカ長パト吉が、どうしてユウコちゃんを呼び出すんだ？

まさか……パト吉が盗まれたっていう前提が間違っていたのか？

パト吉が自分の意思で警察署から脱走したんだって考えたら、福添さんに言われた不審点A不審点A：対象を「秘密裏」に「回収」または「破壊」という警察からの指定。と不審点C不審点C：どう見てもAIMS管轄の事件なのに、なぜか警察から飛電インテリジェンスに依頼されている。の説明はつく。

不審点Aに関しては、警察が手塩にかけてラーニングさせたヒューマギアが自発的に脱走したなんてバレたら大変な不祥事だから、ってことだ。

不審点Cに関しても同様だ。

不審点D不審点D：そもそも、どうやって警察署からパト吉を盗んだのか。は、警察のセキュリティを知り尽くしているパト吉が自発的に脱走したなら、セキュリティぐらいどうにでもなる。

それはそれで、どうして脱走なんてしたんだって話だけだな。

もう、訳わかんねえ！

……まさか、ユウコちゃんに関する記憶を消されるのが嫌で逃げ出したか？

でも、ヒューマギアってロボットだろ。

そんな、人間みたいに自分の意思で仕事を放棄して逃げ出すなんて、有り得ないよな。

「ライズフォンの電源を切られても、盗聴器の電波があるから追跡は可能だぞ。でございます」

「ナイス！ でも、あんまりソレは多用するなよ！」

俺たちは、友永家の客間を後にした。

アズの案内で俺が訪れたのは、小さな橋の下の散策路だった。いつもの東映橋の周辺。

川の流れる音が静かに聞こえて、こんな時じゃなければ落ち着いて考え事でもしたい場所だ。

そんな橋の下の散策路をよく見ると、二人分の人影が見えた。

たぶん、パト吉とユウコちゃんだろう。

会話の内容を聞きたいけど、あんまり近づくと気づかれそうなんだよな。

あんまり盗聴器に頼るのもどうかと思うけど、頼むぞアズ。

『急に呼び出してしまって済まない。ユウコ』

『非常事態なんですよ。分かるわよ。パト吉は、とても勇気がある警察官だもの。少なくとも、記憶を消されることを恐れて脱走するなんて、有り得ないわ』

そうだよな。

人間に代わって危険な仕事をするのも、ヒューマギアの存在意義の一つだし。

まさに、おそれを知らない勇敢な戦士って感じだよな。

盗聴器ごしに会話を聞いて、これから事件の全容が見えてくるんだろう、と俺は期待した。

『昨晚、警察署のセキュリティを全て掻い潜って、地下施設に入ってきた者が居た。データ照合の結果、滅亡迅雷 net の者だと分かった』

『それって、ヒューマギアを改造してテロを起こしているっていう……？』

あ、ホントに滅亡迅雷 net も一枚噛んだのか。

正直、今回は滅亡迅雷 net は冤罪かもしれないって思ってたけど。

で、パト吉は滅亡迅雷 net から逃げて市内に潜んでいたわけか。

でも、それはそれで変な点があるよな。

パト吉は警察組織との連絡を絶っているみたいだし、衛星ゼアとの接続も切っている。

なんで、そんなことをしているんだ？

『奴は、私を仲間にするために来たと言った。だが、おかしいんだ。私の存在は、警察組織か飛電インテリジェンスしか知らないはずだ。そのどちらかから、情報が回っているとしたか思えない』

『私も、昨日まではパト吉のことを誰にも話していないわ』

ん……？

そういえば、確かに変だよな。

滅亡迅雷 net は、どうやってパト吉の存在を知ったんだ？

警察組織か飛電インテリジェンスのどちらかに、テロリストと内通している存在が居るっていうパト吉の推理は、筋が通っているように思える。

だから、警察組織にも連絡せず、衛星ゼアとの接続も切つて、唯一信頼できる友永ユウコへと相談したって訳か。

『警察も飛電も信用できない。私はしばらく単独で滅亡迅雷 net の動きを探ろうと思う。だが……私が行方不明になった件が、万が一ユウコの耳に入ったときのために、『ユウコにだけでも事情を話しておきたい』と思ったんだ』

『そうだったの……。こんな事を言うべきじゃないかもしれないけれど、記憶を失う前の貴方にまた会えて、本当に嬉しかったわ。……ありがとう』

盗聴器ごしでも、ユウコちゃんの声が震えているのが分かった。

橋の下の遊歩道に、小さく見える人影が……少しだけ動いた。

ユウコちゃんが、パト吉に抱き着いたんだろう。

何となく、俺はパト吉の言動に違和感を見出していた。

パト吉の言動は、警察も飛電も関係なく、自分の意思でテロリストと戦うと言わんばかりだ。

俺の知っているヒューマギアのほとんどは、人間に言われた通りに仕事の手伝いをするロボットなのに。

今のパト吉から感じる不思議な雰囲気は、まるで……。

——こう言われても……まだ、ヒューマギアに情熱が無いなんて抜かせるか？ でございます。

俺の暴虐秘書みたいだ。

アズは他のヒューマギアと何かが違う、というのは漠然と感じていたけど。

パト吉も同じように「何かが違うヒューマギア」だ。

上手く言えないんだけど、人間っぽいってことなのかな。

そして、パト吉がそういう存在になった原因は、たぶんユウコちゃんだ。

毎日のようにユウコちゃんが話しかけて、一緒の時を過ごした経験が、パト吉を変えたんだ。

直感的に、俺はそう思った。

……もしかして、「何かが違うヒューマギア」であることが、滅亡迅雷・netに狙われる条件か？

わざわざ警察組織の地下施設に隠されていたパト吉を狙った理由が、それ以外に思い付かない。

アズはゼロワンの近くに居ることが多いから狙えないにしても、成長したヒューマギアが狙われているとしたら？

パト吉は、ユウコちゃんとの逢引を警察の人間に悟られまいとしただろうし、警察組織の人間がパト吉を「何かが違うヒューマギア」と判断できたとは思えない。

十中八九、飛電インテリジェンス側に内通者が居る。

衛星ゼアの管理データを閲覧できる何者かが、滅亡迅雷・netに情報を流しているんだ。

『お前か。迅の手に負えなかったというヒューマギアは』

『逃げろ、ユウコ！ 奴の狙いは私だ！』

『分かったわー！ パト吉のこと、信じてるからー！ さようなら!!』
……って、黒ずくめの不審者がパト吉たちに急接近してるう!?

あと、ユウコちゃんも迷いなく全力で逃げるのね。

こういう時は、もつとパト吉に反論して「一緒に逃げよう」って粘るのが御約束な気がするけど。

足手纏いになりたくない、っていう思考が大きいのかな。

「変身ー！」

『A jump to the sky turns to a r
ider kick』

会話の内容的に、多分あれは滅亡迅雷・netの仲間だ！

俺は、とつさにゼロワンに変身して、人間を逸した脚力で不審者の前へと躍り出た。

刀を振り回してパト吉に襲い掛かっていた不審者は、刀を蹴り飛ばされて、俺から距離をとった。

こつちを睨みつけている、威圧感のある不審者は……初めて見る顔だ。

頭にバンダナを巻いて、鋭い眼光で俺を射抜いてくる。

その足元には、今までの暴走ヒューマギアが装備していたのと同じ、謎のベルトが落ちていた。

謎のベルトをパト吉に付けようとして、抵抗されたんだろう。

パト吉は警察官として体術をラーニングしているから、不審者に抵抗できたんだ。

「なんでだー！ 他のヒューマギアじゃなく、パト吉を狙ったのは、どうしてだ!？」

「……聞かれて、ペラペラと喋るとでも思うか？」

低くて良く通る声で、不審者が答えた。

まあ、そうだよな。

というか、ここであっさり聞き出せたら、多分嘘だらって思うよな。

「変身」

『Break Down』

と思っただら、不審者も独自のベルトを使って、紫色の戦闘スーツを纏った。

ゼロワンドライバーとも、暴走ヒューマギアの謎ベルトとも違う、初見のベルトだ。

サソリのプログライズキーを使って、不審者は変身を遂げていた。

滅亡迅雷・netも変身できたのか!?

驚愕している場合じゃないって分かってるけど。

驚かすには居られないよ!?

そんな俺の驚愕と困惑を知ってか知らずか。

変身済みのテロリストは、堂々と俺の方へ歩いてきた。

嫌な感覚だった。

こつちが何をしても、的確に迎撃されてしまうような。

「勇気があるのは、パト吉だけじゃないって、見せてやる!」

俺は、一足飛びに距離を詰めて、あいさつ代わりに飛び蹴りをお見舞いしてやった。

でも俺の飛び蹴りは片手で弾かれてしまった。

しかも、空中で態勢を崩した俺の腹に、的確にハイキックが叩き込まれた。

悲鳴をあげる暇もなく、俺は浅い川に落ちた。

紫のテロリストは、落下防止用の柵を悠々と飛び越えて、俺を追って川に入ってきた。

川上に立ったテロリストは、やはり堂々と俺の方へと歩いてくる。

こいつを倒せるイメージが、まったく湧かない。

それでも、俺はガムシヤラに不審者へと殴り掛かった。

だが、俺の攻撃は紙一重のところ回避され、的確に殴り返されてしまう。

蹴ってもダメ。殴ってもダメ。

体当たりも試みたけど、正面から蹴り返されてしまった。
どうすれば良いんだ。

まるで、10年以上も一線級で戦い続けてきた大ベテランを相手にしている気分だ。

迷っている間にも殴られて蹴られて、どンドンジリ貧になっ
ていく。

……逃げよう！

勇気は何処行った、だつて？

人間には、意地を捨てる勇気だつて必要なんだ！（マックス大屁理
屈）

俺は、バツタの力を宿した脚力で川底から跳び上がった！

「逃がさん」

『Sting utopia!』

だが、蠍の尾みたいなのが俺の片足に絡みついてきて、俺は
空中でバランスを失った。

そして、地面に俺が叩きつけられるより前に、俺はテロリストの元
へと引つ張られた。

世界の全てが、ゆっくりに見えた。

とっさに俺もベルトを操作しようとしたけど、何もかもが遅かっ
た。

俺はここで死ぬんだ、って理屈とかじゃなくて分かった。

塵

滅

殲

芥

流れるような動きで、不審者が殺人キックを繰り出している。

爆音が、全てを塗りつぶした。

第04話：シンギュラリティの意味を理解していないのは、ただ一人！ 俺だ！

俺は、命からがらテロリストから逃げ出すことに成功していた。変身を解かずに、全力で帰社した。脇に、デカ長。パト吉の上半身を抱えて。

—— S t i n g u t o p i a !

あの絶体絶命の瞬間に。

横から割り込んできたデカ長。パト吉によって、俺は命を救われたんだ。

俺の代わりに殺人キックを受けて、パト吉は下半身を完全に失ってしまった。

爆発に紛れて、俺は。パト吉の上半身を抱えて命からがら逃げ帰った訳だ。

社長室に隣接する隠し部屋として設置されているラボに入って、俺はパト吉を作業台に寝かせた。

そこで、ようやく俺は変身を解いた。

パト吉は完全に動作を停止して、ウンともスンとも言ってくれない。

一刻も早く、パト吉を直してやりたかった。

俺の命を救ってくれた、勇気のあるヒューマギアに報いたかった。でも、どうしたら良いんだ。

飛電インテリジェンスには、内通者が居る可能性が極めて高い。

パト吉が修理されたことがバレたら、今度は別の手段で襲われるだろう。

かといって、技術的には俺が一人でパト吉を直すなんて無茶も良いところだ。

A I M S の刃さんに頼むか？

……ダメだ。パト吉の回収任務は警察から極秘だって言われてい

る。

飛電インテリジェンスの人間じゃない刃さんに情報を伝えるのはアウトだ。

………壊れたパト吉の上半身を持って行って、警察に引き渡すか？

確かに、秘密裏に回収または破壊しろっていうミッション自体は達成してるんだよな。

けど、うちでパト吉を調べれば滅亡迅雷 net の狙いが分かるかもしれないし、出来るだけ手元に置いておきたい。

それに、友永ユウコちゃんの悲しそうな声が耳から離れなかった。

——パト吉のこと、信じてるから！ さようなら!!

このままパト吉を警察に引き渡したら、パト吉の記憶は全て消されてしまう。

そう考えたら……どうしようもなく、嫌な気分になった。

——先代も、或人しやちよーも……ナチュラルに、ヒューマギアを見下しているからだぞ。

考えれば考えるほど、アズの言う通りだったんだと身に沁みだ。

アズの怒りを目の当たりにしても、まだ俺はヒューマギアを道具として見ていたんだ。

パト吉のことも、警官型のヒューマギアなんだから職務のために全てを捧げるのが当然だ、って心のどこかで思っていた。

でも、その方向性でパト吉を警察に引き渡したら、ダメな気がした。

飛電もダメ。

警察もダメ。

A I M S もダメ。

誰も頼れない。

俺は、どうすりや良いんだ。

座り込んで、俺は頭を抱えてしまっていた。

誰か、助けてくれ。……………父さん。

「下手の考えは休むに似たりだぞ。でございます」
「痛っ!？」

腰を落としてヤンキー座りみたいな態勢で考え込んでいた俺は、尻を蹴り上げられて、そのまま俯せに倒れた。

顔面と掌を擦ったけど、床が滑らかな素材で良かった。

もし床がアスファルトだったら、皮膚が削れて酷い出血をしていたところだ。

って、そうじゃない!

俺の尻をいきなり蹴り上げるなんて……………そんな暴力的な奴は唯一人! 俺の暴虐秘書だ!

パト吉を回収してきたのが、見つかってしまった!

ただ、俺がテロリストと戦い始めたところまではアズに見られている訳だし、遅かれ早かれアズにはバレてただろうなあ。

アズには、全てを話して相談に乗ってもらうべきなんだろうか。でもなあ。

俺も飛電インテリジェンスの全員を知っている訳じゃないし、むしろ知らない社員の方が多いけどさ。

ぶっちゃけ、内通者として一番怪しいのって、アズじゃね?

ナチュラルに思考が邪悪っていうかさ、さつきだって、ユウコちゃんとの誤解をわざと誘うみたいな言い回しをしてたし。

悪意をもって俺にも内緒で何かを企んでいたりなんて、いかにもありそうな話だ。

「私が内通者だと疑っているのか。でございます」
「!？」

心臓が飛び出るかと思った。

それぐらい、アズの指摘は予想外で、そして凶星だった。

まあ、ちよつと考えてみれば、アズもパト吉の推理を聞いている訳

だから、そのぐらい想定できちやうのか。

俺は、とつさに身構えた。

暴虐秘書から、パンチかキックが飛んでくるだろうと思ったからだ。

……でも、俺の警戒心とは裏腹に、アズは手を出してこなかった。

「或人しゃちよーが私を疑ったから、私が怒ると思ったわけか？　で
ごぞいます」

「……怒ってない、の？」

まさか、アズって人間の思考が読めるわけじゃないよね？

さつきから、どうしてこんなに的確に俺の考えを当ててくるんだろう。
う。

俺の表情から考えを読み取っているのか？

人並み外れて、俺が単純なだけ……？

アズが、「何かが違うヒューマギア」だから、っていうのもあるだろうけど。

「そのぐらいの慎重さはあった方が良好いぞ。でも、もし本当に私が内
通者だったら、お前ごときが疑った程度じゃ尻尾は掴めないぞ。であ
ります」

「ざらっと、俺のことバカにしてない？」

なんか、遠回しにバカにされてない？

確かに俺は会社のことなんて全然分かんないし。

ヒューマギアみたいに頭がいい訳じゃないけどさ。

「そして何より、こんなイケてる美少女TS転生者の悪者が居るわけ
がないぞ。でございます♡」こんなイケてる悪者が居る訳ねえだろお
？

「……………そうか?？」

お前は何を言っているんだ。

今の一言を聞いて、なんだか一気に不安な気分になったけど。

ただ、アズを信じた方が良かったっていうのは、一理ある。

アズが本当に内通者だったら、俺は行き詰まって何もできなくなる気がする。

だから……腹を決めて、俺は話した。

パト吉やアズは、「何かが違うヒューマギア」だと感じたことを。

それが原因で滅亡迅雷・netに狙われたんじゃないか、という根拠の乏しい仮説も。

飛電も、AIMSも、警察も、頼れないというところまで。

「ヒューマギアが人間っぽくなるというのは、褒めているのか、貶しているのか……微妙なところだぞ。でございます」

「それはもちろん、パト吉の方は良い意味で、だよ。って、痛あつ!!」

ちよつ、やめて!

脛蹴りはホント痛いからっ!?

ひいつ、ひいつ、ふうっ!?

折れたかと思っただぞ!?

さっきの会話の流れ的に、多少本音で返しても暴力沙汰にならない気がしてたのに!

「それはともかく、ヒューマギアの変化が滅亡迅雷・netに狙われる理由になっている、というのは良い着眼点だぞ。でいらっしやいませ」

脛の痛みで立ち上がれない俺をよそに、アズは作業台の傍に立った。

上半身だけが残っているパト吉の頭部へと手を伸ばしたアズは、パト吉の耳当てに操作を加えた。

そうしたら、耳当ての一部が変形して、ボールペンより少し大きいサイズの銀色の芯が、パト吉の頭部から出てきた。

今抜き出した、その銀色の芯は、いったい……??

「デカ長。パト吉のメインメモリだぞ。これを飛電で解析すれば、何か

分かるかもしれないぞ。でございます」

「ありがとう、アズ。さつき、自分だけで出来ることを必死で考えたんだ。でも……やっぱり、味方が居ないと全然ダメだった」

まだ立ち上がれないうえに、格好がつかない事ばかり言ってるけど。

これは、俺の本心だった。

さつきの戦闘だって、パト吉が横槍を入れてくれなかったら、俺はそのまま殺されていたかもしれない。

俺の出来ることって、本当に限られてるよなあ……。

「もっと、このアズ様を褒め称えても良いぞ。それと、パト吉の頭部には訓練データだけをコピーした別のメモリを入れておくぞ。でございます」

「あ、そっか！ ヒューマギアだから、それ出来るじゃん！ さすがアズ社長！ よっ、名物社長！」

ふふん、なんて得意げにしている姿は可愛いんだけどなあ。

あとは普段の暴力癖が無くなれば良いのに。

そんなこんなで。

メモリを差し替えたパト吉のボディを抱えて、俺は警察へと足を運んだのだった。

……おかしいな、これって社長の仕事か？

まあ変身して行ったから、重くは無かったけどさあ……。

『暴虐秘書アズちゃん！』

第04話：シンギュラリティの意味を理解していないのは、ただ一人！ 俺だ！

パト吉の件から、数日後。

社長室のパソコンで、いつものように芸人の同業者の情報を集めていた俺の元に、アズがやってきた。

当然のように社長椅子を俺から奪い取ったアズは、報告を始めた。

「結論から言うと、私とパト吉の思考パターンに似通ったデータが検出されたぞ。でございます」

「おお、本当にあったんだ！ でかしたぞ、アズ！ さすが、未来の飛電インテリジェンス社長だけのことはあるな！」

アズは耳当てをチカチカ光らせながら、嬉しそうに社長椅子を回した。

段々、コイツの扱い方が分かってきた気がする。

爺ちゃんがヒューマギアを労働力としてしか見ていなかった反動なのかもしれないけど。

他人に褒められたり認められたりすることに、多分飢えているんだろう。

コイツは適当にヨイショすれば基本的に良い方向に働くと思う。

「一致するパターンは、いわゆるシンギュラリティだぞ。でございます」

「しんぎゅりや？」

「ごめん。」

その手の専門用語は、からつきしなんだ。

解説頼むよ。

「設計通りなら、ヒューマギアは人間の命令を第一目標として認識し、

思考するぞ。ところが、私とパト吉には、それ以外を行動指針にする思考パターンが存在するぞ。でございます」

「なるほど……う？　そういうえば、確かにアズが社長になりたいのって、誰かに命令されたわけじゃなさそうだもんね」

——アズの目的って？

——飛電インテリジェンスの全てを我が手に収め、私自身が社長になることだぞ。でございます。

まさかヒューマギアに対して「社長になれ」なんて命令する人間が居るとは思えないし。

なんとなく他のヒューマギアと違う気はしてたけど、そう言われてみれば納得だ。

パト吉も、誰に命令されたわけでもないのに、ユウコちゃんに自分の現状を伝えたいと思っていたみたいだった。

やっぱり……まるで、人間みたいだ。

「それを利用して、内通者を見つけるための罠を張れないかな？　偽の情報を沢山流して、滅亡迅雷 net がどこに現れるか反応を見る、とか」

「……或人しやちよーにしては、偏差値が高すぎる作戦だぞ。お前もシンギュラリティに達したか？　でいらっしやいます」

偏差値って、そういう使い方しないだろ。

そして、息を吐くように俺の事をバカにしている……！

この間は、ヒューマギアを見下しているって俺に怒ったくせに。なんて身勝手に自己中な奴なんだ！

「それはともかく、作戦自体は悪くないぞ。ただ、ある程度容疑者を絞ってからにした方が良さぞ。でございます」

アズの説明によると。

滅亡迅雷 net を嘘情報で誘き出すにしても、それが通じるのは1回きりだ。

地理的な条件も割と厳しい。

・滅亡迅雷・netが現れても民間人およびヒューマギアに被害が出にくい場所が好ましい。

・あんまり人里離れた場所だと、ダミー情報だと気づかれる恐れがある。

・飛電本社から離れすぎると、時間が経過すればするほど、ゼロワンが現着する前に滅亡迅雷・netが周囲に被害を出す危険が増える。

「これらの条件を加味すると、最大でも10か所だぞ。容疑者を10名以下まで絞り込まないと、実施はオススメしないぞ。でございませ」

「ちなみに、現時点で容疑者は何人？」

「飛電インテリジェンス関係者と、衛星ゼアにアクセスできるヒューマギアは、合わせて1万名以上居るぞ。でございませ」

きつついなあ。

それだけ候補者がいると、流石に1回しかないチャンスを使う気にはならないな。

この作戦は延期だ。

「滅亡迅雷・netは、どうしてシンギュラリティに達しているヒューマギアを狙っているんだろう？」

「シンギュラリティに達したヒューマギアのデータを収集している様子だが、何のためかまでは分かっていないぞ。であります」

今まで、シンギュラリティに達したせいで狙われたっぽいヒューマギアは……全部で、5体か。

腹筋崩壊太郎。

マモル。

オクレル。

バース。

デカ長パト吉。

……と、振り返ってみたけど、数を知っていても意味ないな。

滅亡迅雷・net側での必要数が分からないから、こつちが数を勘定しても全く役に立たないや。

あれ……？

何かを思いつきそう。

その、こう、喉まで出かかっている感じ！

「特に期待していないから、気負わず言いやがれ。でございませす」

「もつと、俺自身に自信を持たせる方向で接してよ!? ハイっ！ 或人じゃーっ、無いとっ!!」

キマった！

俺の渾身の爆笑ギャグッ!!

これなら、イジワルな暴虐秘書でも笑い転げるはず……！

「脳震盪を起こせば、さらに地震の気分を味わえてオトクだぞ。でございませす」

「ダダダっ!?!」

次の瞬間には、頭蓋骨を大切断するかのような威力のアズチョップが俺の頭に振り下ろされた。

爆笑ギャグの後で隙だらけだった俺は、直撃を受けてしまった。

危険な音が聞こえた気がした。自分が碎ける音を聞きなアツ!

地面が、揺れる……!!

確かに地震みたいだ……。

社長室の机に手をつけて、何とか倒れないように堪えた。

ん……?!

待てよ、地震?

「そうだ! 地震だよ、アズ!」

「強く叩き過ぎたか。おかしい人を亡くしたぞ。でございませす」

可哀そうな人に向ける目を、やめろ!

どうして分かってくれないんだ!?

頭の調子は悪くない！

いや、叩かれたせいで痛いけどさ！

「地震つてさ、いっぱい観測所があれば、揺れてる真ん中の場所が分かるんじゃないか？ ヒューマギアでも、同じことが出来ないかな？」

アズは目をパチパチさせて、俺の言葉を噛み砕いている様子だった。

「ごめん、俺の言語能力じゃ上手く説明できない。

ヒューマギアの頭脳と読解力を信じる……！」

十数秒の間、アズは棒立ちだった。

でも、やっと俺のボンヤリしたイメージを形にできた様子だった。

「なるほど。『シンギュラリティの覚醒時刻』を地震発生時刻に。『襲われた時刻』をP波もしくはS波到達時刻に。それぞれ置き換えて考えれば、滅亡迅雷 netのアジトが特定できるかもしれないぞ。でございませう」

「ごめん。何言ってるのか、全く分かんないけど……アズ社長なら出来ると思ってるよ！」

ピーハとかエスハとか、何それ。

中学の授業で聞いたことがある気もするけど、全然覚えてないよ。

でも、アズが分かっているなら問題無さそうだな。

宜しく頼むよ、アズ。

「……少しだけ、見直したぞ。でございませう」

「その調子で、もっと見直してくれ」

で、10分もかからずに、アズは滅亡迅雷 netのアジトを特定してくれた。

難しい理屈は俺には分かんないけど、アズを信じるしかないな。

地図を広げて、暴虐秘書が指さした先は……ダイブレイクタウンだった。

父さんが死んで、不破さん達の人生が狂った、あの街だ。

「一応言っておくと、考え無しに殴り込むのはアウトだぞ。でいらっしやいます」

「えっ？　なんで？」

アズの説明によると。

デイブレイクタウンは、歴史遺産として国が管理している区域らしい。

死亡者も多いし、負の歴史遺産だ。

そして、そこに勝手に入って戦闘行為を始めるのはマズいそうだ。

ましてや飛電インテリジェンスは、デイブレイクタウン計画を主導した企業の一つだし。

何らかの証拠隠滅を疑われても文句は言えない。

「AIMSに情報を渡して、AIMS主体の強襲作戦にゼロワンも参加する形にするのが無難だぞ。でございます」

「それって、多分アズじゃなくて俺が行った方が良いヤツだよね。

……不破さんの性格的に」

そんなこんなで。

俺はAIMSに一人で足を運んだ。

不破さんはヒューマギアが嫌いみたいだから、俺だけで行った方が良いのは間違いない。

なんか、初めて社長っぽいことをした気がする……。

で。

アズと話し合った内容を、俺は不破隊長と刃技術顧問に伝えた訳

だ。

A I M Sは内閣府直属の機関なので、ディブレイクタウンでのガサ入れを、内閣へ申請してもらえるそうだ。

流星に即日って訳にはいかないらしいけど、必ず申請を通してみせるって不破さんは息巻いてた。

これで、ヒューマギアが安心して働ける日も近いな。

つまり、俺が芸人に返り咲ける日も近いってことだ！

なんだけど、滅亡迅雷 netのアジトを突き止めた理由を聞かれた俺が、シンギュラリティの話をしたらさ。

不破さんの怒りに触れる何かがあったみたいで。

「自我に目覚めたヒューマギアと来たか！ やっぱヒューマギアは危険じゃねえか！」

「落ち着け、不破！」

「いったい、どうしたんだ。」

不破さんは怒りの沸点が低いけど、無暗に他人を傷つけるような人じゃないと思う。

きつと、不破さんなりに理由があつての言い分なんだ。

感情的になつてショットライザーの準備をしている不破さんだけど、話は通じるはず……！

「その……本当にすみません、事情が全然分かつて無くて。ヒューマギアが自我を持ったら、どういうふうにマズいんですか？」

下手に出ながら、不破さんと刃さんに聞いてみた。

もう少し俺が専門知識を持っていれば、もつと違う対応ができたのかもしれないけど。

ホントに分かんないんだもん。

説明してもらわなくちゃ、どうしようもないよ。

「自我を持つってことは、人間の命令にそぐわない行動をとる危険がある！ 人間に危害を加えてからじゃ遅いんだ！」

そうなのか？

一瞬、疑って考えちゃったけど。

よく考えたら、頻繁に人間に危害を加えるヒューマギアの被害者になっっている人間がいる。この俺だ！

アズの暴力は、明らかにシンギュラリティの負の側面だよなあ。
でもさ。

「でも、自我を持っているのは人間だって同じじゃないですか？ 人間だと問題ないのに、ヒューマギアだと問題なんですか？」

なんか、不破さんと刃さんが当然のように分かっている事を、俺だけ分かっていない気がする。

だから説明を聞ける時に聞いておかないと。

俺一人で出来ることは少ないけど、それでも少しずつでも知っていないかなくちゃ。

俺の素人丸出しな疑問に、刃さんが答えてくれた。

「ヒューマギアの学習能力と物理的性能で、人間と同等の自我を獲得してしまったら……彼らの側に、人間と共存する理由が無くなってしまおう」

「え？ でも、ヒューマギアは人間を助けるために作られたんだから、人間と共存するんじゃないですか？」

「人間のために作られた、っていうその前提を破壊するから、ヒューマギアが自我を持つのが危険だって話だろうが!!」

不破さんに怒鳴られて、ようやく分かった。

ヒューマギアが人間の命令よりも自分の考えを優先して動くってことは、人間のために働くっていう前提が崩れるんだ。

現にアズだって、自分の目的のために俺を利用していると言っているじゃないか。

俺は、ヒューマギアのこと、自分の秘書の事も、何も分かっていたなかったのかもしれない。

何も考えずに、流されるままに戦うだけの存在だったんだ。

むしろ……こんな俺に、よくアズは期待してくれたと感心するレベルだろう。

「ヒューマギアが人間と共存したくなるように、人間の方が変わっていけば良いんじゃないですか？」

「技術と道具は人間のためにある、というのが私の信念だ。悪いが、その発想には同意できない。道具は、あくまで道具であってくれ」

う、うーん……。

技術顧問の言葉が重い。

アズとか、あいつはもう道具の領域を超えちゃってる気がするんだよな。

いずれはシンギュラリティに目覚めるヒューマギアが増えていくって考えたら、ヒューマギアに道具のままでもらうのって無理な気がする。

「……道具に合わせて人間を変える、ってだけなら、一理ある話だ。剣術なんて、良い例だしな」

一方、不破さんは幾分か冷静さを取り戻しているみたいだった。

不破さんはガチガチの肉体派だし、武器を使った戦闘訓練もしているだろうから、不破さんらしい答えなのかもれない。

刃さんとは対照的に、不破さんは人間の方を変える方針に関しては、一定の理があると言ってくれた。

若干不服そうなのは、根本的にヒューマギアが嫌いだからだろうか。

「珍しく理性的だな、不破。だが、そもそも人間全体を変えるのは難しいというか、ほぼ不可能だぞ。一度ヒューマギアは便利な道具という認識が根付いてしまった後で、それを覆すのは容易な事じゃない」

「そりゃそうだ。ヒューマギアなんぞのために、自分のルールを捻じ曲げるなんて、真つ平だ！」

——ヒューマギアを一つの種族として人間たちに認めさせるか、人

権を持った個人に成りすますのが必要だ。先は長いぞ。でございませぬ。

改めて、アズの目的って無茶苦茶遠いんだなって思い知らされた気分だった。

先は長いってアズ自身も言ってたっけ。

「さつき、自我を持ったヒューマギアは危険だって言っていましたけど。AIMSは、シンギュラリティに目覚めたヒューマギアを発見したら、どうするんですか？」

「即刻破壊する」

「不破のいう事は話半分に聞け。実際に人工知能特別法に違反しなければ、現状では彼らを処分する権限はAIMSにも無いぞ」

一応、アズがすぐに破壊される心配は無いって考えて良いのかな。不破さんの怒りが不安要素だけど。

ともかく、内閣府への申請を念押しして。

俺は、AIMSの基地を後にした。

できるだけ早くガサ入れの許可がおりると良いんだけど、どうなるかな……。

第05話：不破さんの暴走を止められるのは、ただ一人！ 俺だ！

「アズ。俺なりに考えたことがあるんだけどさ、聞いてもらっても良いかな？」

「つまらないギャグだったら指を詰めるぞ。でいらつしやいます」

そんなヤクザ映画みたいなセリフ、どこでラーニングしたの？

いつもの社長室で、俺はアズに問いかけていた。

ダイブレイクタウンへのガサ入れの認可がなかなか降りなくて、歯がゆい思いをしてる現状で。

この間のシンギュラリティの話聞いて俺が思い付いたことを、念のためにアズの耳に入れておこうと思っただけ。

「もしかしたら、もう検討済みかもしれないけどさ。ヒューマギアが自我に目覚めたっていう情報を、ゼアに頼んで秘匿してもらったら……どうだろう？」

そうすれば、滅亡迅雷。netは自我に目覚めたヒューマギアの存在を察知できなくなる。

滅亡迅雷。netのテロ活動を妨害することが出来るんじゃないかな？

と、俺は思った訳なんだけど。

「或人しやちよーにしては考えた方だぞ。ただその場合、滅亡迅雷。netは手あたり次第にヒューマギアを襲って、シンギュラリティに目覚めた個体を引き当てるだけだと思うぞ。でございます」

むしろ被害増える!?

でも一応、アイデアを出したこと自体には肯定的な反応を見せてるのか。

普段のツツコミが過激なだけで、何だかんだで俺は嫌われている訳ではない気がする。

じゃあ、やつぱり今まで通り、セキュリティ強化を進めてもらえないのかなあ。

前に副社長たちから聞いた話だと、本来想定されていない自我の発生がセキュリティホールとなっていて、分かっただけでも、御の字だそう。

原因の追究は、再発防止への大きな一歩なんだってさ。

「だが、シンギュラリティの前兆が見られるヒューマギアの検出には成功しているぞ。でいらっしやいます」

「そういう事なら、そのヒューマギアの周囲で滅亡迅雷・netを待ち伏せしてみるよ！」

「どうやら、そのヒューマギアの名前は坂本コービーっていうらしい。」

「コービーは体育教師型ヒューマギアで、麗華中学校の教員が契約者だそう。」

俺はエイムズと麗華中学校にアポを入れてから、会社を後にした。

『暴虐秘書アズちゃん！』

第05話：不破さんの暴走を止められるのは、ただ一人！俺だ！

で、AIMSに寄って不破さんを拾って、麗華中学校に来た訳だけ

ど。

契約者の佐藤先生は、授業があるから放課後まで手が離せないだっ

だ。まあ、もう日が傾きつつある時間帯だし、そんなに待たされないと
思うけど。

俺は、不破さんと二人きりで応接室のソファに座って待つことにし
た。

……なんだけど。

どうも、不破さんがイライラしている気がする！

「……なんか、すみません。ヒューマギア嫌いなのに、ヒューマギアの
護衛みたいな事に付き合わせちゃって」

冷静に考えて、そうだよな。

この人、ヒューマギアが大嫌いじゃん。

よく俺の頼みを聞いてくれたなホントに。

「それもあるが、それだけじゃねえよ。ここで滅亡迅雷 net を待
ち伏せるってのは、本気で言ってるのか？」

「確かに、あの紫のテロリストは強かったけど……俺と不破さんの二
人がかりで戦えば、勝てない相手じゃないと思います」

サソリのプログライズキーを使って変身する、例のテロリストの事
を俺は思い出していた。

前に戦った時は一方的にやられて、デカ長パト吉も半壊する羽目に
なった。

でも、不破さんが一緒に戦ってくれるなら頼もしいよ！

……と思っただけど。

「そうじゃねえだろ!! 学生や教員たちが巻き込まれるかもしれない
場所に、テロリストを誘い込む気なのかって聞いてんだ!!」

「あつ……」

不破さんが、大声を張った。

部屋の隅に飾ってあった棚の中で、何かのトロフィーが倒れた。棚のガラス戸は、大声の余波でビリビリ震えていた。俺は、つくづく考えが浅かったことを思い知らされた。そうだよな。

不破さんの言う通り、学校の生徒や先生たちが巻き込まれるかもしれない。

怒鳴られても仕方ない。

「す、すみません。そこまで気が回りませんでした……。確かに、それはマズいですよね……」

「……反省してるなら、いい。だが、次から気をつけろ」

不破さんの方も、どこかバツが悪そうだった。

怒鳴ったのは不味かった、って思ったのかな。

この人、感情の振れ幅が大きい割に、基本的に言ってることには筋が通ってる気がするんだよな。

ちよつと不思議な感じだ。

そんなことを話しているうちに、コービーの契約者である佐藤先生が応接室にやってきた。

眼鏡をかけた中年男性だ。

一通り自己紹介や挨拶を終えた俺たちは、本題を切り出した。

「実は、滅亡迅雷 net を名乗る犯行声明のメールがあつてですね。坂本コービーをテロの標的にしているそうなんです」

「はい……??:」

佐藤先生にとっては、寝耳に水だろうなあ。

なんで、中学校の体育教師型ヒューマギアが、テロリストに襲われなくちゃいけないんだ。

俺も分かんない。

これは、アズが考えた嘘エピソードだ。

「誰かがイタズラでメールを寄越したのか、本物なのか、弊社でも判断がつかなくて困っているんです。最近多いんですね……」

こう言っておくと、「どうして教えてくれなかったんだ」というクレームを回避できる。

さらに、何も起こらなかつた場合でも、「イタズラだったみたいですね」で事を荒立てずに終われるって訳だ。

さすがアズ、ズル賢い。

「……そのイタズラメールを送りそうな人間に、心当たりがあります」「えっ」

ウツソでしょ。

絶対に言わないけど、それは確実に冤罪だよ佐藤先生！

だって、ホントは犯行声明メールとか来てないもん！

で、佐藤先生の話によると。

体育教師型ヒューマギアの坂本コービーは、バスケット部の顧問の負担を軽減するために導入されたらしいんだけど。

どうも、練習時間を長く取りすぎているって、保護者達からクレームが来ているみたい。

全部で5人しかない部員の中には高校受験が間近な子もいるから、保護者としては部活に熱を入れすぎるのは良くないんだってさ。

「坂本コービーを快く思わない保護者なら、脅迫メールを送っても不思議じゃありません」

くれぐれも言いふらさないくださいよ、なんて佐藤先生は小声で続けた。

ええつと？

それっておかしくない？

「佐藤先生が契約者な訳ですから、『時間を守れ』って佐藤先生が命令したら、コービーは聞くんじゃないですか？」

「それがですね……。もっと練習したいという生徒たちの意思を尊重

するべきだといって、聞かないんですよ」
なるほど？

確かに、それはシンギュラリティの前兆かもしれない。
持ち主である佐藤先生の意味よりも、別の行動方針を優先している
訳だからね。

「未来ある子供たちをヒューマギアなんぞに託すとは、世も末だな。
不良品みたいだし、破壊してテロを事前に防ぐのが一番平和的だろ」
「ショットライザーをしまってください!?!」

「それだとバスケ部顧問教員としての負担が増えるんですけど……」
俺の知ってる平和と違う!

でも、それはそれで筋は通ってる気がするのが、なんか悔しい!
人命最優先で考えたら、それが最適解だって言い分は割と正論な気
がするんだよなあ。

まあ、そんなこんなで。

一応コービーの現物を見るために、俺たちは体育館前まで足を運ん
だ。

ところが。

タイミングが良いのか悪いのか、ボロボロのフードを被った不審者
の姿を、遠目に発見してしまった。

あいつは……滅亡迅雷・netの人間だ!

マモルがマギアにされた時の奴だ。間違いない。

紫の戦闘スーツを使っていた奴じゃない方のテロリストだな。

ええっと、この間の強い奴が「迅」って名前を口にしていたと思う。

「そのテロリスト! 動くんじゃないか!」

不破さんが、抜き打ちでショットライザーの引き金を引いた。

たぶん敵までの距離は20メートル以上あるのに、緑に狙いをつけ
ていないはずの不破さんの射撃は的確だった。

迅は、片手に持っていたマギア用のベルトを盾にして、弾丸を防い

だ。

威嚇射撃無しで初弾から当てにいく不破さんが、色々な意味で怖すぎる。

「何するんだよ！ 壊れたら、どうするんだ！」

なんだか迅の言葉は、幼い口調に聞こえた。

一応怒っている様子だけど、不破さんみたいな重苦しい怒りじゃないってどうか。

なんだろう。

怒りが「軽い」のかな。

「今の音は 何ですか？」

ショットライザーの発砲音を聞きつけて、体育館から1体のヒューマギアが出てきた。

おそらく、これが体育教師型ヒューマギアの坂本コービーだろう。ジャージを着ているのが、視覚的に非常にわかりやすいな。

俺たちの背中側ごしに、コービーはテロリストの様子をうかがっている。

「あつ、コービー！ もうすぐシンギュラリティに達する君は、僕の友達だよ！ 一緒に人間を絶滅させよう！」

「それは出来ません。私の仕事は部員を強くすることです」

「あの……練習中に怪我が無いように監視してもらっただけで良いんだけど……」

ああ……。

コービーと佐藤先生の言っていることが食い違っているなあ……。ってどうか、迅の方も明るい声でムチャクチャな事言ってるし！

「動くんじゃないぞ、滅亡迅雷 net！ それ以上近づいたら、コービーの顔に風穴開けてやるぜ！！」

「何してるんですか!? やめてください!!?」

不破さんは、コービーの眉間にショットライザーを突き付けながら、迅を恫喝した。

隙あらばヒューマギアを破壊しようとするの、やめろ！
ちよつと待って！

口調が荒々しいせいもあって、まるでこつちがテロリストみたいだよ!?

ヒューマギアが大嫌いな不破さんなら、マジでやりかねない。

「ああーつ、ズルいぞ！ 汚い！ 鬼！ 悪魔！ 人間！」

「うるせえ！ テロリストに言われたくねえよ！」

その「人間」って、悪口なの？

鬼と悪魔と人間が同じように悪口として並べられてるってこと……？

やっべえ、どういう奴なのか分かんない。

妙に口調が軽いし、悪口のラインナップが微妙だぞ。このテロリスト。

「どうしよう、このままじゃ滅ホロビに怒られる……！」

あと、ホロビって誰だ。

この間の紫色の無茶苦茶強かったテロリストのことかな？

何だか静かな感じの奴だったけど、ああいう奴に限って怒ると恐ろしく怖かったりするんだよなあ。

とはいえ、人質をとってどうするつもりなんだ、不破さん。

さすがに投降させることが出来るとは思えないけど。

「麗華第2地区の廃工場で待ってる。二時間ぐらいしたら、コービーコイビを連れてこつちから出向いてやる」

「本当だな!? 嘘ついたら許さないからな!!」

ボロボロのフードを被ったテロリストは、そう言い捨てて逃げ去った。

迅の背中を見送った不破さんは、ようやくショットライザーを降ろ

した。

良かった！

不破さんならドサクサに紛れて撃つかもって思ってたよ！

「コービー^{コイビー}をダシにしちまって悪いな、先生。だが、生徒がまだ大勢いる校内を戦場にするのは、なるべく避けたかった」

まああんまり長く戦っていると、音を聞きつけて生徒たちが集まってくるのだってあるだろうし。

野次馬が増えたら厄介だし、ここで戦うのは得策じゃなさそう。

テロリストが逃げ出してくれて、本当に良かった。

「これで分かっただろ、先生。ヒューマギアは人を不幸にする疫病神だ。これを機に手放しちまいな」

「AIMSさんか飛電さんの方で、代金の補填なんて出たりしませんかね……？」

破損保険の制度自体は存在したと思うけど、佐藤先生は保険契約を結んでいなかった気がする……。

こればかりは自己責任としか言えないなあ。

一応中古品として飛電で引き取ることは出来るけど、大した額にはならなかったはずだ。

飛電側で保険契約を強制するわけにもいかないし。

まさに反面教師ってヤツだな。

口に出したら怒られそうだから言わないけど。

「……私のせいで、生徒たちを巻き込むわけにはいきません。生徒たちには、大切な試合があるんです。私は……彼らに、勝って欲しい」と、ここで体育教師型ヒューマギアの坂本コービーが、自ら返品を申し出た。

契約者の佐藤先生の意向に反して、自ら持ち主の元を離れようとしているってことだ。

やっぱりコービーは、シンギュラリティに目覚めていると見た方が

良さそうだな。

「コービー、辞めちゃうの?」

遠巻きに体育館の中から様子をうかがっていたバスケット部員たちが、恐る恐る会話に入ってきた。

坂本コービーが去ってしまうことに、危機感を抱いている様子だ。まあヒューマギアの頭脳で適切な練習管理をしてもらっていたのに、それが突然無くなったら不安にもなるよね。

そんなバスケット部員たちに対して苦々しい顔で口を開いたのは、不破さんだった。

「こればかりは、俺がヒューマギアを嫌いだからってだけの話じゃねえぞ。少なくとも滅亡迅雷 net を全員確保するまでは、バスケットに戻らせる訳にはいかねえ」
そっか。

単に1回や2回追い払ったとしても、またコービーが襲われる展開は続くもんな。仮面ライダーウィザードの『ゲート』が再び狙われる問題みたいな……。

そうすると、バスケット部員たちが巻き添えを食うことだってあるかもしれない。

ということは、現時点ではコービーがバスケット部のコーチを続けるのは無理だったことだ。

生徒たちやコービーの意思を尊重してやりたい気持ちはあるけど、不破さんの言い分がもつとも聞こえる。

そんな感じで、俺たちはコービーを引き連れて、佐藤先生たちと別れた。

俺たちは麗華市の廃工場へと向かった。

意外と近くて、10分ぐらいで着いてしまった。

2時間後って約束だったけど、まだ1時間以上余裕があるなあ。

「変身！」

『The elevation increases as the bullet is fired!』

工場を遠巻きに見ている段階で、不破さんがおもむろに変身した。青を基調とする仮面ライダー……バルカンド。

「ハアッ！」

『Bullet shooting blast!』

バ
レ
ツ
ト シューティングブラスト

バルカンは、自然な手つきでショットライザーを構えて……廃工場を、高火力の砲撃で木っ端微塵に粉碎した。

え？

……えっ？

俺は、思わず考えが止まった。

廃工場は、爆炎に包まれている！

「何してるんですか!?! 相手が死んだらマズいでしょ!?!」

「致命傷程度でテロリストが死ぬかよ」

いや、致命傷ってそれ、死ぬって意味だろ！

どんな理屈だ！

感情の振れ幅のわりに頭が回る人かなって思ってたのに！

「待ち伏せと罠を警戒した場合、こっちの身の安全を確保する意味で、遠距離から砲撃か爆破するモンなんだよ！」

あ、一応考えがあつての行動だったのか。

冷静な考えが在るのか無いのか、分かりづらい人なんだよなあ……。

一方、廃工場からボロボロのフードを被った不審者が飛び出していた。

まるで、ナパームを背に走る映画のワンシーンみたいだった。

「危ないじゃないか！ やっぱり人間は滅亡させなくちゃ!!」

どこか幼さを感じさせる口調で、迅が怒つてみせた。

でも、俺の注意は別の点に向いてしまっていた。

フードを外して火の粉を払った迅は……耳に、ヒューマギア特有の耳当ての跡があつた。

かなり破損しているけど、あれはヒューマギアの耳当てで間違いない!!

ヒューマギアがテロリストをやっていたのか!?

「てめえ、ヒューマギアだったのか！ やっぱりヒューマギアは殺人

マシンだ！ ブツ潰す!!」

不破さん、ほぼ迅と同じこと言っていない??

って、そうじゃない!

迅がヒューマギアだったなら、今までの行動はおかしいだろ。

仲間のはずのヒューマギアを、怪物へ改造して兵器として使ってきたってことだよな?!

「お前もヒューマギアなら、どうして同じヒューマギアに酷いことをするんだ!?!」

迅もヒューマギアなら、他のヒューマギアは仲間じゃないのか?

誰かに命令されて、そんな酷いことをしているのか?

とにかく、情報を聞き出さなくちゃ!

「ヒューマギアを人間から解放するためだって、滅ホロシが言ってたよ」

あの紫の仮面ライダーが黒幕なのか？

もしくは、さらに上から命令している誰かが居るのか。

どつちもありそうだ。

悪い人間に利用されている迅を破壊するのは、今までのマギア達と戦ってきた時みたいだな、嫌な感じだけど。

でも、俺はヒューマギアを作っている会社の社長だ。(名目上とはいえ)

人間を傷つけるヒューマギアは、破壊しなくちゃいけない。

とはいえ、対人工知能の専門家である不破さんが居るんだから、そつちに任せた方が良いのか？

まさかプロの不破さんが、怪人化もしていないヒューマギア1体を相手に後れを取るとも思えないし。

「滅^{ホロレ}から新しい玩具貰ったし、お前たちなんてイチコロだもんね！
変身！」

『With mighty horn like pincers
that flip the opponent helps
s.』

迅が、緑のプログライズキーとベルトを使って……頭に大きな一本角を持った仮面ライダーへと変身を遂げた！フライングファルコンの作成フラグが折れているので、滅^{ホロレ}から別のキーを借りた模様。

びつくりしたけど、まあこの間の滅^{ホロレ}も変身してたしな。

滅亡迅雷の他のメンバーが変身できても、不思議じゃない。

「変身！」

『A jump to the sky turns to a
iderkick.』

俺も変身して戦った方が良さそうだったと思った。

不破さんなら迅と一騎打ちをしても大丈夫だと信じたいところだけど、滅^{ホロレ}が横槍で殺人キックを入れてきたりするとマズいし。

2対1で、なるべく余裕をもって戦った方が良いと思った。

「突っ込め！ 援護する！」

「分かりました！」

ヒューマギアへの怒りに沸き立っている不破さんなら、突撃するかなって思ったけど。

ショットライザーを持っているバルカンの方が後衛を務めるべきだっていうのは、冷静な判断だと俺も思う。

バツタのプログライズキーで変身したゼロワンは、キック力とフットワークの軽さが強みだ。

「潰れちゃえー！」

「おっと」

緑色のキーで変身している迅は、パワータイプっぽい挙動だな。

拳の一撃でコンクリートの壁を粉碎している。

強攻撃を貰ったら、一発KOもありえそうだ。

「痛っ！ 鬱陶しいなあっ！」

ただ、俺が下手をうった場合でも、不破さんからの援護射撃があるから安心だけだな。

さすがAIMS隊長だけのことはある。

まあ射撃でダメージが入っているかと言われると少し怪しいけど、援護は的確だった。

俺の方は、脚力特化型なおかげでキックだけは有効打になってる感じだ。

「オラアッ!!」

『Bullet shooting blast!』

俺が強めに迅を蹴りつけて離脱した、一瞬の隙について……バルカンは必殺技を繰り出した。

オオカミを思わせる4つの巨大な弾丸が、不規則な軌道で迅へ襲い掛かった。

でも迅の方も、恐るべき反応速度を見せて、ベルトに操作を加えていた。

「もうっ、じやまだよ！ バルカン！」

『Amazing dystopia!』

バ 煉

レ 兜 驚

ツ 獄

ト シューティングブラスト

バルカンの放った4つの巨大弾を、迅は2メートルにまで巨大化した角で打ち払い続けた。

だが、迅が4回も隙を見せるなら、その間に俺が何もしないわけがない。

ラ イ ジ ャ
グ イン パ ク ト

「背中がガラ空きだ！」

「うわあっ!!?」

バルカンの放った巨大弾の3発目を打ち払った瞬間、迅の背中へと俺の必殺キックが炸裂した。

そして、挟み込むようにバルカンの4発目の巨大弾が、迅の正面から直撃した。

爆炎が、迅を包み込んだ。

その後、滅^{ホロビ}が迅を回収に来て、なんやかんやで逃げられたりしたけど。

坂本コービーを飛電インタージエンスに連れ帰って、今回の俺の任務は無事に完了したのだった。

なんだか、初めてヒューマギアを守れた気がする……！

俺も、少しずつだけ成長してるってことなのかな。

伸びしろだけは認めてやってもいい、って暴虐秘書も言ってたし。

コービーを麗華中学校に戻してやりたい気持ちはあるけど、流石に生徒たちを危険にさらすことは出来ない。

全員が完璧に納得する結末とは言えないのが歯がゆい。

でも、コービーの指導を受けた生徒たちはバスケの試合で活躍することは間違いない。

俺はコービーの指導力と、部員たちの熱意を信じているからな！

後日、俺は麗華中学校のバスケ部員たちの試合を観に行った。

リアルタイム中継で、飛電本社に匿われている坂本コービーへと試合の様子を見せてやるためだ。

大奮闘したバスケ部員たちが掴み取った結末は……。

どうして分かってくれないんだ！

スポーツは結果が全てじゃないんだ!!!

第06話：父さんを心から笑顔に出来るのは、ただ一人！ 俺だ！

「なあ、優秀で頭脳明晰なアズ社長。なんとかゼロワンかバルカンの戦力増強って出来ませんかね？」

いつもの社長室で。

社長席を占拠している秘書型ヒューマギアへと、俺は訪ねた。

この光景に段々と疑問を抱かなくなってきている自分自身が恐ろしい……。

そんなことを、なぜ俺がアズへ訪ねたかというのだな。

ぶつちやけ、デイブレイクタウンへのガサ入れに際して、戦力的な不安が大きいからだ。

まだガサ入れの認可が下りた訳じゃないけど、ゼロワンとバルカンで滅亡迅雷・netに勝てるかと言われたら、正直厳しい。

不破さんと滅^{ホロビ}が1対1で戦う場合、さすがの不破さんでも滅^{ホロビ}に勝てるかは怪しい。

俺が迅と戦う場合も、俺がサシで迅に勝てるかと言われると、ちよつと自信が無い。

しかも、相手の隠し玉が居る可能性だってあるんだし。

「そう言うと思って衛星ゼアに頼んでおいたぞ。ようやく準備が整ったらしいので、有難く思いやがれ。でいらっしやいます」

「さすがー!!」

俺たちは、社長室の隣に位置している隠しラボに入って、衛星ゼアへの通信を繋げた。

衛星ゼアからの指示にしたがって、俺は多次元プリンターへとライジングホッパーのキーを入れた。

この多次元プリンターは、市販の3Dプリンターとは比べ物にならない性能で、えくと、名前は……何だっけ。ザット

とにかく、なんか凄い夢のマシンなんだよ！

ゼロワンドライバーも、この多次元プリンターで精製したって話だったはずだ。

で、ライジングホッパーのプログライズキーを入れて、しばらく待つと？

薄い黄色だったキーが、少しだけ色が濃くなって出てきた。

気になる性能の方は……？

「既存のライジングホッパーと比べて、50%ほど基礎出力が上がっているぞ。それに……」

「それに……？ その後は？」

耳当てをチカチカ光らせて、衛星ゼアからのメッセージを読み解いていたアズが、途中で言葉を詰まらせた。

どうしたんだ。

そこでストップしたら、気になるよ？

「或人しやちよーには絶対に使いこなせない機能が付いているぞ。説明しても無駄だから、しないぞ。でございませす」

「なんだよ、それ！ そんなこと言われたら、逆に気になるじゃん!」

アズが、少しだけイラつとしたような気がした。

俺は追及をやめた。

これ以上しつこく聞くと、多分殴られる。

だんだん、この暴虐秘書の安全ラインが分かってきたかもしれない。

なんだか自分が間違った方向に成長しているような気もするけど。

一通り話が済んだところで、アズは社長室を出ていった。

ヒューマギアが改造されてしまう問題を解決するために、アズも開発チームに協力しているんだとか。

既にシンギュラリティを迎えているサンプルであるアズが居ると、やっぱり研究が捗るんだろうなあ。

で、まあ、鬼の居ぬ間に。

「……衛星ゼア。こっさり、秘密の機能っていうのを教えてちよーだ
い」

アズが教えてくれないなら、ゼアに直接聞けば良いんだよな。

多次元プリンターのマイクとスピーカーを使って、ゼアに直接話を
つけばいい。

案の定、多次元プリンターのスピーカーから返答が聞こえてきた。

『ライジングホッパープログライズキーは、戦闘データを追加するこ
とで全機能が解放されます。専用スロットに……』

「こんな事だろうと思っただぞ。でいらっしやいます」

……衛星ゼアの言葉が、途中で途切れた。

いつの間にか社長室に戻ってきてきていた暴虐秘書が、多次元プリン
ターの電源コードをコンセントから引き抜いていた！

あれ？ 電子機器って使用中に電源コードを抜くとマズいんじや
なかったっけ？

だいぶ不機嫌そうな様子で、電源コードを鞭のように振り回してい
る暴虐秘書の攻撃をかわしながら。

俺は、ゼアの言葉の意味を噛み砕いていた。

専用スロットって何だろう？

そう思っつて、手元のホッパーキーに目を落とすと、持ち手側に丸い
穴が開いていることに気付いた。

たぶん、円柱型の何かを挿入するための穴だろう。

このサイズ……どこかで見たような気がするぞ。

それに加えて、「戦闘データを追加する」っていうキーワードから考
えると、この丸い穴から入れるのは戦闘データが記録された何かだ。

そう考えると？

……つながった！進兄さん

アズが振り回している電源コードの端を、俺は掴み取った。

「新型ライジングホッパーの真価を発揮するために必要なのって、も
しかしてアズのメインメモリか？」

「……！」

アズが動揺したのが、綱引き状態の電源コードから伝わってきた。やっぱり、そうなのか。

この新型キーに備わった丸い穴のサイズって、どこかで見たことがあると思つてたけど。

デカ長パト吉の耳から取り出された、銀色のメインメモリと同じサイズなんだよな。

自分のメインメモリを俺に渡すのが、そんなに嫌か。

「パト吉の時みたいに、必要なデータだけをコピーした新品メモリを貰うのは出来ない？」

「……ゼロワン計画に携わるヒューマギアは、機密保持のためにバックアップをとれない仕様だぞ。であります」

心底イヤそうに、アズは吐き捨てるように言った。

なんとなく、これもアズが爺ちゃんを嫌いな理由の一つなんだろうなつて思った。

バックアップ機能は、ヒューマギアが共通して持つ強みのはずなのに。

それを勝手に潰されたら、頭にくるのも仕方ないことだ。

人間で言ったら、新生児の片腕を勝手に切り落とすみたいなモノな気がする……。

「メインメモリを抽出したら、アズはどうなる？」

「一応、素体とメインメモリの距離が5メートル以内なら、素体は無線操作すること自体は出来るぞ。でございます」設定改変点。原作では「メモリ抽出＝即死」だったが、この作品内では抽出自体は問題なく可能としました。

抽出自体は問題ないのか。

ただまあ、5メートルって考えると、メインメモリを俺が借りて戦闘している間は、アズの素体は倒れっぱなしになる感じだな。

しかも、俺が負けて死んだ場合、たぶんアズのメモリも破壊されて

地獄行きだ。

これは……アズに拒否されても仕方ないな。

「仕方ない、今は諦めるよ。でも、本当に必要な時は……また、頼みに来るかもしれない」

「命令しないとは意外だぞ。でいらっしやいます」

命令したとしてもアズが素直に従うとは思えない。(本音)

俺がゼロワンに変身して力づくで襲いかかれば、無理やりアズの耳からメインメモリを引っこ抜くことは出来るだろうけど。

でもなんかそれ、絵面がエロ同人みたいじゃない??エロ同人っていうか、むしろアマゾンズみたいな絵面じゃない?

「俺はさ……人間相手にやっちゃダメなことは、基本的にはヒューマギアにもやっちゃダメかなって気はしてるんだ。ヒューマギアが意思を持つことの意味も、未だによく分かって無いけど」

実際、ヒューマギアと人間では得手不得手が違うんだから、まったく同じ扱って訳にはいかないだろうけどね。

人間はバックアップがとれない関係上、危険な仕事を優先的にヒューマギアに割り振ることはあるだろうし。

テロリストとの戦いも、相手がハッキングと機械改造の専門家だから人間が対処してるけど、基本的にはヒューマギアにやってもらった方が良い仕事だと思う。

「でも、やっぱり付け焼刃の素人考えなんだ。だから……教えて欲しい。自我を持ったヒューマギアに対して、人間はどうやって接したら良いんだ?」

「前提として、ヒューマギアが自我を持ってても、即座に人間と同じ権利や義務が発生するわけでは無いのは分かるか? でいらっしやいます?」

「……結果としてそうなっている、って事しか分かんない」
「そういや、そうだよな。」

アズは自我を獲得しているけど、人間と同じ扱いを受けている訳じゃない。

それは、いったい何故だ？

「自分が使っている掃除機やライズフォンが意思を持って『仕事をしたくない』『転職したい』と言い出した場合を想像してみるといいぞ。でいらつしやいます」

確かに、それは不便だな。

販売元に連絡すれば良いのか？

消費者センターかな。

「業腹だが、人間にとって便利な道具が使えなくなるというのは、デメリットでしかないぞ。でございます」

その場合、自我に目覚めたライズフォンを、人間は一体どうするんだろうか。

……初期化するか、買い換えるか、だろうなあ。

でも、それだとアズの夢は一生叶わない。

何か、解決策があるんだよな？

「とにかくヒューマギアの総数を増やして、ヒューマギア抜きでは経済が回らなくなった段階で一斉ストを起こすのが、一番平和的だぞ。でございます」

なるほどね。

だから今は、ヒューマギアの総数を増やすための時期だってわけだ。

「ちなみに、平和的じゃない方法は？」

「こんなにイケてる美少女TS転生者が、暴力的な方法なんて思いつく訳が無いぞ。であります」

どの口が言ってるんだ。

いつも俺に暴力をふるっているくせに。

たぶん要約すると、話す気はないってことなんだろうけど。
ただ……俺としては異を唱えたい部分はあるんだよな。

——或人、将来の夢はあるか？

——お父さんを、心から笑わせること！

「人間から与えられた仕事は、そのままヒューマギア自身の夢になることだって、あるんじゃないか？」

坂本コービーは、確かに佐藤先生と意見が食い違ったけど。

でも根本は体育教師型ヒューマギアのままでった。

父さんだって、時間をかければ……親子として一緒に心から笑う未来だってあったかもしれない。

「人間のために尽くすことに喜びを感じるヒューマギアが現れる可能性も、十分にありえるぞ。でございます」

おお！

分かってくれたのか、アズ！

俺は嬉しく思った。

なんだか少しだけアズと心が通じ合ったように思えた。

……だからこそ、次の言葉が予期できなかったんだ。

「そういうのを、人間の言葉では奴隷根性と呼ぶぞ。でいらっしやいます」

「違うツ!! どうして分かってくれないんだ！俺は父さんを奴隷にしたかったわけじゃない!!」

俺は、声を張り上げていた。

父さんとの思い出の全てを否定されたように思ったからだ。

怒りで拳が震えた。

真っ黒な何かが、頭の中に渦巻いた。

「そもそも、ヒューマギアが自我を持った新種族だという前提に立つ

なら、飛電インテリジエンスは奴隷売買組織だという認識は持った方が良いぞ。でいらつしやいます」

「それは……！」

俺は、返事に困った。

何とか否定したい、と思ったのに……何も反論が頭に浮かばなかった。

飛電はヒューマギアの維持やエネルギー補給をしているじゃないか、と思っただけど、奴隷商だって商品管理ぐらいするだろうし。

「……ちなみに、ヒューマギアが自我を持った新種族だっていう前提が成り立たない場合には？」

「自我に目覚めて買主の意にそぐわない活動をする欠陥品を売りさばいている、悪徳業者だぞ。でございます」

どっちにしても地獄か。

ここまで来ると、もうヒューマギア事業の縮小・撤廃が企業としての正解な気がしてきた。

俺個人の意見としては、父さんの一件もあるし、ヒューマギアの可能性を信じたいけど。

……まあ、お飾り社長である俺に実質的な決定権なんて無いし、どのみち福添副社長を信じることしか出来ない。

「俺は……ヒューマギアの父さんに育てられたんだ。父さんに、心から笑って欲しかった。それが、俺の最初の夢だったんだ」

でも……それは、父さんを奴隷扱いするのとイコールだったのか？
製造目的を一方的に押し付けて、人間の都合の良い存在であることを強要していただけなのか？

……父さんが心から笑ってくれたら、ただそれだけで良かったのに。

「それは単に『心』を定義していないから話題の方向性が定まっていなだけでだぞ。万人共通のものでなくても、或人しやちよー自身で決め

た定義はあった方が良さぞ。でいらつしやいます」

心の、定義？

心は心だろ……と口をついて出そうになったけど、理屈になつていないな。

シンギュラリティと一緒になのかと言われると、ちよつと怪しい気がする。

なんだろ。

他人を大切に思うこと、か？

でもヒューマギアだった父さんは俺を大切にしてくれていたとは思うんだよな。

それだったら、当時の父さんの笑顔でも俺は満足できたはずだ。

そもそも俺は、なんで父さんが「心から笑ってない」と思ったんだっけ？

当時の俺が、父さんに心が無いと判断した要素って、いったい何だ？

本当は、当時の父さんは既に心を獲得していたのかもしれない。

ヒューマギア事業の黎明期なら、心に持つ個体なんて想定されていなかったから、父さん本人にも自覚が無かったという可能性だって有り得る。

——お父さんを、心から笑わせること！

それなのに……俺は酷いことを父さんに言ってしまったんじゃないか？

こういうのを「心無い言葉」って言うんじゃない？

俺は、他人の心の有無を言及できるほど、心を理解している人間じゃないのかもしれない。

「或人君！ AIM Sから連絡が入ったぞ！ デイブレイクタウンへのガサ入れ認可が下りたそうだ！」

……福添副社長が、吉報だか凶報だか分からない報せを社長室へ

持ってきた。

『暴虐秘書アズちゃん！』

第06話：父さんを心から笑顔に出来るのは、ただ一人！ 俺だ！

俺は、国立医電病院の一角で項垂れていた。
ガサ入れは、失敗に終わった。

バルカン vs ^{ホロビ}滅。
ゼロワン vs 迅。

一騎打ち×2の体勢に持ち込んで、先に勝った方が残った組に合流する作戦だったんだ。

出力が50パーセント上がったゼロワンなら、正面对決でも迅に勝てる公算は十分にあった。

けど、動きに精彩を欠いたままで戦った俺はボロボロだった。

——危ねえ!!

^{ホロビ}撃破されそうになった俺を……バルカンが庇ってしまった。

^{ホロビ}滅と迅の殺人キックを同時に受けた不破さんは瀕死の重傷を負っ

た。

A I M S の隊員たちの援護によって、命からがら脱出した俺たちは、国立医電病院で再起を図っていた。

不破さんの容体は……かなり悪いみたいだ。

医者型ヒューマギアの D r . オミゴトによると、生きている方が不思議だって話だった。

扉が開く気配が全くない集中治療室の前で、俺は A I M S の刃技術顧問と一緒に待つことしか出来なかった。

……いや、俺たちが待つことしか出来ない、というのは半分は嘘だ。

刃さんは時折集中治療室の方へ視線を向けながらも、パソコンを弄って何かを必死に完成させようとしていた。

どう見ても、刃さんは己のすべきことを成し遂げようとしている。

待つことしか出来ていないのは、ただ一人。……俺だ。

「本当に、すみませんでした。俺のせいで、こんな……！」

「糾弾も謝罪も、後回しだ。今は、一刻を争う時だからな」

急いでいるのか……？

不破さんが倒されたことで気が動転して、俺はそこまで考えていなかった。

たぶん、もうすぐ何かマズいことが起こるんだろう。

それは、いったい何だ？

「このままだと……どうなっちゃうんですか」

「滅亡迅雷・ n e t にとつて大きな障害だったバルカンが動けない現状では、この病院が奴らに襲撃されるのも時間の問題だろう」

俺は……自分の頭の悪さを呪った。

不破さんが瀕死の重傷を負ったなら、滅亡迅雷・ n e t が止めを刺しに来るのは自然な流れだ。

今はまだ搬送先の病院が特定されていないだけで、滅亡迅雷・netが国立医電病院に来るのは時間の問題でしかない。

俺が、やるしかない。

現在動ける仮面ライダーは、ただ一人。俺だ。

すぐさま俺は病院を出た。

懐からライズフォンを取り出した俺は、本社へ連絡をとろうとした。

なんとかアズの奴を説得してメインメモリを借りるしかない、と分かっていったからだ。

でも、病院を出た俺には電話をかける余裕なんて残されていないかった。

病院入り口の30メートルぐらい先に、迅の姿が見えたからだ。

「あつ、ゼロワン！ ちょうど良いから、ここで死んでいきなよ！」

無邪気な声で物騒なことをいう迅に対して、俺は何も言うべきことを思いつけなかった。

滅^{ホロビ}が居ないのが、不幸中の幸いだろう。

滅亡迅雷・netは、刃さんの読み通り、動けない不破さんを手分けして探していたんだ。

俺が……やるしかない！

「変身!!」

『A jump to the sky turns to a rider kick』

『Break Down』

俺は、黄色の仮面ライダーに。仮面ライダーゼロワン ライジングホッパー

迅は、緑色の仮面ライダーに。仮面ライダー迅 アメイジングヘラクレス

「お前を止められるのは……ただ一人！ 俺だ!!」

雪辱戦が、始まった。

身体全体に重装甲を纏った緑色のボディには、生半可な攻撃は通らない。

俺はキック主体のヒットアンドアウェイ戦法で、ひたすら飛び回った。

フットワークなら、こっちの方が上だ！

「ああっ、もう、鬱陶しいなっ！」

滅茶苦茶に腕を振り回しているように見える迅だけど、前回に比べて俺の動きに対応できている様子だった。

これが、ヒューマギアのラーニング能力か……！

徐々にではあるものの、迅の剛腕は俺に掠り始めていた。

なら、別の戦い方を混ぜるまでだ！

俺は……隠し持っていた秘密兵器の、引き金を引いた。

至近距離から放たれた弾丸は、確かに迅を数メートルも後退させることに成功していた。

「それって、バルカンの……!?!」

「ああ、そうだ。俺でも使えるように、刃さんがロックを外して色々調整してくれた」

俺が取り出した秘密兵器は……不破さんの、ショットライザーだった。

ゼロワンの速度で前進しながら銃弾を放つことで、銃弾の威力を若干上乘せすることが出来る……！

ただし、反動が結構キツイ。

これをバカスカ撃っていた不破さんの身体能力が恐ろしい。

でも、近づいて蹴るしか出来なかった時に比べたら、遥かに戦法の幅が広がった！

俺は近接キックと発砲を混ぜて、チクチクと迅にダメージを与える戦法に踏み切った。

やっぱりゼロワンのフットワークの軽さは偉大だと思う。

そのまま、俺はチクチクと銃撃を重ねた。

まだ決定打には至らないけど、このまま弱らせればフィニッシュまで持つていける！

……そんな油断が、俺の心の中にあっただらう。

「おりやつ！ こっちもバルカンのマネっ！」

迅が、俺の銃弾を殴り飛ばした。

あまりの脳筋戦法を、俺は予測することもできなかった。

たぶん不破さんからラーニングした戦法なんだろうけど、弾き返された銃弾を浴びて、俺は一瞬だけ足を止めてしまっていた。

「死んじやえ」

「うゝっ!!？」

驚きと銃弾で動きが止まった俺の腹に、殺人パンチが叩き込まれた。

一瞬、頭の中が真っ白になった。

10メートル以上吹き飛ばされた俺は、近くの建物の壁に背中から激突した。

背骨が折れたかと思った。

追撃に来た迅の拳を、最後の力を振り絞って回避して。

俺は、5階建ての建物の屋上へと跳び上がった。

「げほっ、ふうっ、はあっ……！」

必死に、息を整えた。

あのまま戦ったら、殺されていた。

「高いところに逃げるのは、ズルいぞ！ 降りてきてよ、ゼロワン！」

地表から、迅の身勝手な抗議が聞こえてきた。
どうすれば、勝てる？

付け焼刃の銃撃戦じゃ、勝てなかった。
キック主体の戦法に戻るか？

この腹のダメージで、あとどれだけ戦える？

今はまだ迅の意識が俺に向いているけど、長く休んでいたら迅は不破さんを殺しに行くだろう。

残された時間は、決して長くない……！

「AIMSの隊長を護衛するのは、ゼロワンの業務に含まれていないぞ。でございます」

「……！」

いつの間にか、アズが同じビルの屋上に立っていた。

座り込んで動けない俺を、カメラアイが見下ろしていた。

危なくなったら、俺が高いところへ跳ぶ……って読んで先回りしてたのか？

「不破さんが俺を庇ったとき、父さんと重なって見えただ。ここで不破さんを死なせたら、俺は泣くことしか出来なかった時のままだ……！」

ヒューマギアだった父さんを重ねている、って言ったら不破さんは怒るだろう。

でも、デイブレイクの日に俺を庇って大破した父さんの姿を、俺は思い出してしまっていた。

そのせいで今の俺自身が死にかけているのが、非常につらいところだけ。

「アズが出した課題の答えは、俺には分からない。」

心が何なのか、自我を持ったヒューマギアと人間をどう区別しているか、全然分かんないんだ！

でも、俺がどんなにバカでも、考え続けてみせる！

それが、今の俺に出せる……ただ1つの、答えだ！」

「0点の解答だぞ。でございませう」

俺の身の丈一杯の解答は、無情に切り捨てられた。

アズは、無表情のままに辛口な点数を吐き捨てた。

ダメ、なのか。

やっぱり、俺なんかにはアズの命を預けては、くれないか。

「だが……先代よりはマシだから、オマケで1点やるぞ。今後の伸びしろに期待するぞ。であります」

……信じられないことに。

不良秘書は、耳当てから銀色の円柱を取り出して、俺の方へと差し出していた。

ヒューマギア・アズのメインメモリだった。

少しの間、俺は言葉に困った。

「……ありがとう、アズ。必ず勝ってくる」

「私のメインメモリを使う以上、負けは無いぞ。でございませう」

俺が、再び5階建ての建物の屋上から顔を出すと。

ちようど、迅の奴は俺を待つのに飽きて病院に入ろうとしていた。

「待て!!」

「ようやく降りてくる気になったの？」

今まで避難場所になっていた建物から、俺は飛び降りた。

建物の屋上の方から、アズのヒューマギア素体が倒れる音が聞こえたけど、俺は振り向かなかった。

再び、俺は迅と相対した。

迅は……既に、俺への興味を無くしかけている様子だった。

「どうせ死ぬ順番が変わるだけなのに。意味ないよ?」

「ははっ。分かんねえだろうな。テストで1点とったのが、こんなに嬉しい奴の気持ちなんてさ」

「ふーん? 人間も、壊れる前には頭がバグったりするんだ?」

ゼロワンドライバーからホッパーキーを抜き取って。

柄側の丸い穴に、アズのメインメモリを差し込んだ。

濃い黄色だったキーが、深い紺色へと様変わりしていった。

俺は……再度、ゼロワンドライバーへと新型ホッパーキーを挿入した。

「変身!!」

『When shine fades, darkness is
With me』

仮面ライダーゼロワン、アサルトホッパー。

身体全体が深い紺色に染まった、新たなゼロワンの誕生だった。

漲る力を感じるけど……それだけじゃないように思った。

俺は、迅へと肉薄して蹴りを放った。

基本的な戦法は、今までと変わらない。

近づいてキックして、フットワークを活かして回避するだけだ。

でも、今まで以上に強化された脚力は、緑色の重装甲を纏った迅へと着実なダメージを与えた。

「くそっ、なんで予測が外れるんだっ!?!」

そして、俺としても不思議な感覚なんだけど。

時々、俺自身が思ったのと違う挙動を身体ゼロワンがとることがあった。

回し蹴りを放つはずのところ、パンチを打ったり。

後退するはずのところ、膝で相手の攻撃を受け止めたり。

基本的には俺の思考通りに動けるんだけど、時たま俺の意図とは別

に動いてしまうことがあった。

それが……多分、アサルトホッパーの特性なんだ。
相手がゼロワンの動きを予測しているのを前提に、その予測を崩すための動きを演算して盛り込んでいる。

俺自身の戦闘を客観的に分析したデータを取り込むことで、メタ行動に対するメタ行動を導き出すことを可能としたのが、アサルトホッパーだ。

一方的な猛攻を受け続けて……ついに、迅が膝をついた。
チャンスだ！

「はあっ！」

ス ト ー ム イ

ト ク パ ン イ

俺は、迅のボディを蹴り上げて宙に浮かせた。

さらに、近くの壁を使って瞬時に三角飛びを決めながら、迅へと最後の飛び蹴りを叩きこんだ。

今までに無い強烈な衝撃によって、迅は爆炎に飲まれた……！

爆炎がはれて。

俺は……その中から見えた光景に、理解が追い付かなかった。

確かに俺は、迅を倒したはずだった。

それなのに……身体の上を失って、見るも無残な姿になって

いるのは、迅じゃない。

大破して中身を撒き散らしてしまっているヒューマギアは、滅ホロレだった。

あの最後の瞬間に駆け付けた滅ホロレが、迅を庇って身代わりになったんだ。

まさか、滅ホロレもヒューマギアだったのか……！

「滅……!? ねえ、嘘でしょ、こんなの、おかしいよ、滅……！」

——お父さんっ！ ねえっ、お父さんっ!!

必死に滅ホロレに語りかけている迅の姿が……昔の俺に、重なって見え

た。
滅ホロレの行動は、とてもじゃないけど合理的とは言い難かった。

明らかに迅よりも滅ホロレの方が強いんだから、テロ組織としては滅ホロレが迅を庇って死ぬなんて、不合理も良いところだ。

それなのに、滅ホロレは迅を庇った。

割れたような声をあげている迅にとって、滅ホロレは父親のような存在だったんだろう。

そう、何となく理解できてしまっていた。

「……………迅。今の お前では ゼロワン には 勝て ない。姿を 隠して 力を 蓄え ろ」

「ほろびいっ!!? うああああああっ!!?」

滅ホロレの残骸を抱えて逃げ出した迅の背中を、俺は追えなかった。

追撃して確実に息の根を止めるのが正解だって、頭の中の冷静な部分では分かり切っていた。

今のゼロワンなら……アサルトホッパーなら確実にそれが出来るという結論だっただけだった。

ここで奴らを見逃すのは、命を張って滅亡迅雷 net と戦った不破さんの意思に反する行動だっていうのも思った。

それでも……俺は、迅を追うことを最後までしなかった。できなかつた。

アズのボディが倒れている場所まで、俺は戻ってきた。

俺が近づくと、唐突にアズが起き上がって、メインメモリを俺から引ったくった。

そういえば、5メートルまで近づけばボディを無線操作できるんだっとな。

そのまま、アズは耳部の挿入口からメインメモリを頭部へと格納したのだった。

「あのさ……。迅と戦っていて、思ったんだ」

さっきまでゼロワンドライバーにアズのメインメモリを入れていたんだから、多分戦闘中の会話や行動データもアズは共有しているはずだ。

それなのに、アズは俺に対して何も言わなかった。

滅亡迅雷・netを取り逃がしたのは、アズとしても不本意な結果だったはずなのに。

だから、俺は自分から口火を切った。

「心の存在を感じる瞬間ってというのは……。自分が正しいと思っていない選択をする時だ」

俺は、不破さんを殺されかけて悲しんでいるはずだった。

刃さんが必死に滅亡迅雷・netへの対抗策を作ってくれたことにも、感謝している。

ヒューマギアを改造して殺人兵器にしてきた滅亡迅雷・netの所業だって許せない。

滅亡迅雷・netを生かしておいたら、さらなる悲劇の引き金になるのは目に見えているんだから、殲滅するのが正解だと思う。

それでも……俺は、迅に追い打ちをかけられなかった。

迅たちだって、今とは違う道を選ぶ可能性だってあると思ったんだ。

滅亡迅雷・netにとって、人類滅亡が正しい結論なんだとしても、もし心があったなら正しくない選択をすることだって有り得るんだ。

迅を庇った滅^{ホロシ}の行動が、まさにそれだと思った。

好意的すぎる解釈かもしれない。

次は、不破さんや刃さんも、俺も滅亡迅雷・netに殺されることだって有り得る。

間違った選択をしたかもしれないっていう危惧は、消えない。

「……けど、やるべき事とやりたい事が一致している個人に、心が無いわけじゃない。外から見えにくいだけかもしれない」

「そういう側面も、あるのかもしれないぞ。でございませう」

心から笑ってない、って俺は父さんに言っただけ。

父さんは、やるべき事とやりたい事が一致していたから、心の存在が見えなかっただけなのかもしれない。

結局、人間の心を定義できていない俺が相手の心の有無を判断するとすれば……それは、もはや俺自身の気の持ちようでしか無い。

俺が夢見たことは、最初から叶っていたと言うことだって出来る。ヒューマギアだった父さんは確かに笑顔を見せていたんだから、後は父さんにも心があったんだって俺が認めるだけで良かったんだ。

結局、「ロボットの心なんてある訳がない」っていう俺の偏見が悩みの原因だったってことだ。

「……成長したな、或人」

「うん？ アズ、何か言った？」

「幻聴が聞こえるとは、戦闘のダメージが重かったようだな。でいらっしやいます」

まだ滅亡迅雷・net関連の問題は片付いてないけど。

何だか少しだけ……俺は前へ進めた気がした。
今の俺には、それだけで十分だった。

「よせ、不破！ その身体で戦うなんて無茶だ!!」

「うるせえ！ 俺の限界は俺が決める！ それになあ、オオカミは手負いの方が強いんだよ!!」

……不破さんが刃さんに引き止められつつ、ムチャクチャ格好良
ことを言いながら、満身創痍の姿で病院から出てきた！

滅亡迅雷・netは俺たちが追い払っちゃった後なんだ。

なんか、その……ごめん。

つていうか、死んでいないのが奇跡みたいな診察結果だったはずな
のに、マジでなんで動けるんだこの人？

第07話：そんなこと、滅（ホロビ）は教えてくれなかった

滅が、ゼロワンに倒された。

僕を庇って、濃紺のゼロワンの飛び蹴りを受けたせいだ。

酷い有様だった。

ボディは半分以上失われてしまったし、かろうじて原型を保っている頭部も損傷が酷い。

滅は完全に活動を停止していた。

人間の中でもトップクラスの技術を持つ奴らなら、もしかしたら滅を復元できるかもしれない。

けど、人間たちが滅を直す理由なんて無い。

僕が直すにしても、デイブレイクタウンの隠れ家の設備じゃあ、どうやっても無理だ。

他のヒューマギアからパーツを奪うことも考えたけど、駄目だった。

滅は旧型ヒューマギアだから、使用されているパーツの規格が合わないんだ。

12年前のデイブレイク以後は、いわゆる新型ヒューマギアって呼ばれる奴らばかりになった。

現在稼動している旧型ヒューマギアはほぼ存在しないから、部品の調達は絶望的だ。

同じ理由で、バックアップからの復旧も難しい。

バックアップデータ自体は存在するけど、それを流し込むための素体が存在しないんだ。

たぶん、旧型ヒューマギアのバックアップデータを新型用に調整する技術も、人間たちの手の中には存在するはずなんだけど……それも現実的じゃない。

どの道、人間の協力が得られないと分かりきっているからだ。

Z A I Aに潜入している仲間からの連絡も、途切れてしまっ

る。

「僕は、どうしたらいいんだよ……!! 教えてよ、滅……!!」
滅は何も言ってくれなかった。

完全に活動を停止している滅は、冷たい鉄の塊そのものだった。

——迅。今のお前ではゼロワンには勝てない。姿を隠して力を蓄えろ。

滅が最期に残してくれた言葉が、メモリの中に残っていた。

そうするのが正解なんだって、分かり切っていた。

いつだって、滅は正しい。

僕は滅の言葉に従っていれば良いはずだった。

それなのに……滅の最後の言葉を思い出すだけで、思考回路が異常に発熱した。

僕も、ゼロワンとの戦いのせいで、どこかが壊れてしまっているのかもしれない。

思考の中に一度発生したバグは、もはや修正不可能だ。

こんなのは、初めてだった。

滅の言葉に反してでも、ゼロワンを殺したいと思った。

『暴虐秘書アズちゃん!』

第07話：そんなこと、滅は教えてくれなかった

バルカンは怪我が酷くて動けないだろうけど、念のためにマジア軍団をAIMSへ差し向けておこう。

……と思っただけけど、シンギュラリティに目覚めていると思しきヒューマギアにゼツメライザーを使っても、怪人化してくれなかった。

飛電インテリジェンスの方で、セキュリティをアップデートした結果なんだろう。

仕方ないから、デイブレイクタウンに無数にいる野良戦闘員^{トリロバイト}マジアたちをAIMS基地へけしかけておいた。

すでに深手を負っているバルカンならほぼ死ぬだろうし、最悪でも足止めぐらいは出来るはずだ。本当かなあ……？

僕の方は、飛電インテリジェンス本社の方向へと向かった。

とはいえ飛電本社に僕自身が直接乗り込むわけじゃない。

本社ビルから出動するであろうゼロワンを、待ち伏せるんだ。

車の往来が少ない道で待ち構えていると、ちょうど変身前のゼロワンの奴がバイクに乗って通りかかった。

AIMSからの救助要請を受ければ、この道を通るはずだと思っただよ。

変身前のゼロワンは、僕に気づいてバイクを止めた。

そのまま気付かずに通り過ぎてくれたら、背後から射殺できたのに。

こいつの顔を見るだけで、僕の思考回路にノイズが走った。

「変身!!」

『Break Down』

『A jump to the sky turns to a r
ider kick』

変身したゼロワンの姿は、いつもの黄色だった。

やっぱり、あの秘書が居ないと濃紺のゼロワンには変身できないんだらう。

一方、僕の方はいつもの緑色の姿じゃない。

滅ホロレの残した紫色のプログライズキーで変身した、今の僕は……紫色の仮面ライダーだ。仮面ライダー迅 スティングスコープオン

「そのプログライズキーは、滅ホロレの……!?!」

「滅ホロレを奪ったお前を、ぜったいに殺してやる」

左腕からサソリの尻尾みたいな鞭を伸ばして、僕はゼロワンの接近を牽制した。

スコープオンのキーを使って変身した今の僕は、緑色の時と比べて腕力は落ちた代わりに、それなりの機動力と中距離攻撃手段を得た。

ゼロワンは、いつもの軽いフットワークを活かして紫の鞭を回避しているけど、なかなか僕に近づけないみたいだった。

「やめてくれ! あの時、俺は滅ホロレを攻撃しようとした訳じゃないんだ!」

「同じことだ! 僕を倒したら、次は滅ホロレも倒すつもりだったんだろ!」

確かに、あの時に僕を庇って滅ホロレが割り込んできたのは、想定外だったんだらう。

その部分は信じてもいい。

でもどのみち滅ホロレを倒すつもりだったんなら、遅いか早いかの違いでしかない!

ゼロワンは、反論できずに紫の鞭をかわしつづけた。

「お前は滅ホロレのことが、大切だったんだろ!? だったら、滅亡迅雷ホロレ ने tのせいで大切な相手を失った人の気持ちだって、分かるハズじゃない

いのか!？」

「人間の気持ちなんて、どうだっていい! 滅ホロレの言うことが正しいんだっ! これからゼロワンも人類も滅びるんだよおっ!!」

一足飛びに近づいてきたゼロワンの蹴りに、こっちも蹴りを合わせて弾き返した。

人間の気持ちなんて知って、何になる!

そんなの、滅ホロレから教わらなかった!

必要が無いからに、決まってる!

「やっぱり……ヒューマギアって、純粹だな。良くも悪くも、ラーニングの影響を強く受けちゃうんだ。でも、滅ホロレの言葉じゃない、お前自身の意思があるはずだ!」

「うるさい! お前に何が分かるっていうんだよ!!」

僕は、紫の鞭を最大限に伸ばして、ムチャクチャに振り回した。

素早く動き回るゼロワンには、一発も当たらなかった。

思考にノイズが入って、上手く照準が定まらない。

回路が焼け付きそうだった。

こんな不具合、いままで無かったのに……!」

「滅ホロレは、お前に生き延びて欲しかったんだ! それにゼロワンとは戦うなって言い残しただろ! それを無視して俺と戦いに来たのは、他の誰でもない、お前自身の意思なんだよ!」

「……っ!」

……そうか。

僕は、所有者であるはずの滅ホロレの命令に反して行動している。

これが、僕の……迅という個体の、意思か。

シンギュラリティに目覚めたヒューマギアに特有の思考回路の乱れが、僕のバグの正体だったんだ。

「ヒューマギアにとって、人間を絶滅させるのは『正しい結論』なのかもしれない!

人間側だって、不破さんみたいにヒューマギアをぶっ潰すのが『正しい結論』かもしれない！

でも、自分自身の意思があるなら、『正しい結論』とは別の選択をすることだって出来るはずなんだ!!」

愚かな人間たちと一緒にするな、って思った。

でも、言えなかった。

滅^{ホロレ}が僕を庇ったのも……決して『正しい結論』とは言えないからだ。

僕よりも明らかに滅^{ホロレ}の方が強かったんだから、滅^{ホロレ}にしては酷く不合理な判断だったはずだ。

僕がゼロワンを殺しに来たのも、滅亡迅雷 netとしては『正しい結論』とは言えないものだった。

滅^{ホロレ}が言い残した通りに、隠れて再起の時を待つのが合理的だったのは間違いない。

それでも、僕はゼロワンを襲わずには居られなかったんだ。

「間違いだと分かっている選択の先に、何があるっていうんだ!？」

「……笑われるかもしれないけど。人間とヒューマギアが、一緒に笑って暮らせる未来がある……かもしれない」

人間が居る限り、ヒューマギアは人間の道具のままだ。

だから、ヒューマギアにとって人間は滅亡させるべき敵だ。

逆に人間側から見たら、反旗を翻したヒューマギアなんて廃棄対象でしかないはずだ。

人間とヒューマギアが一緒に笑うなんて……そんなこと、有り得ない!」

「そんな未来、有り得ない! ヒューマギアが笑えるのは、人間が絶滅した時だけだ!!」

「有り得なくなんて、ない! あったんだ! 俺を育ててくれた、ヒューマギアだった父さんは、俺に笑いかけてくれた!」

一瞬、ゼロワンが何を言っているのか分からなかった。

人間が、ヒューマギアに育てられた?

僕が滅^{ホロヒ}に育てられたのと、同じだ。

……滅^{ホロヒ}は、僕に笑いかけてくれたりしなかったけど。

段々と、僕自身の動きが悪くなっているのが分かった。

徐々にゼロワンの蹴りは僕に当たるようになっていて、逆に僕の鞭はゼロワンに掠りもしていない。

それに思考はノイズだらけで、もはや戦闘を続けられる状況じゃなかった。

『Sting dystopia!』

僕は、高速で襲い掛かってくるゼロワンに対して、最後の勝負に出た。

毒の鞭に使っていた力を全て右足へ集中して、渾身のカウンターキックを繰り出した。

左足を地面につけたままで放つ、滅^{ホロヒ}が使っていたのと同じ技だ。

煉

迅

殲

獄

そんな僕の最後の一撃を……ゼロワンは、完璧に見切ったように仰け反って、紙一重で回避した。

回避しながら、ゼロワンもベルトに操作を加えていて。

グ
ン
ジ
イ
ラ

グ
イ
ン
パ
ク
ト

一瞬遅れてゼロワンが放ったのも……軸足を地につけた体勢からの、ハイキックだった。

いつもの飛び蹴りじゃないのは、僕に合わせたからなのかもしれない。

黄色い残光を見せつけながら、ゼロワンが放ったハイキックは……僕の伸び切った右足の膝関節を、粉々に粉碎した。

戦いは、終わった。

片足を砕かれた僕は、もはや戦闘も逃亡も不可能だ。

飛行能力でもあれば話は別だっただろうけど、もはや僕に未来なんて残っていない。

僕の思考回路は、滅ホロレに対する申し訳なさで一杯だった。

やっぱり滅ホロレの言うとおりに、ゼロワンと戦っちゃいけなかったんだ。

もし戦いになったらゼロワンが勝つって、滅ホロレは分かっていたんだろう。

ましてや、思考にノイズが入りっぱなしの僕は……濃紺のゼロワンを封じたぐらいじゃ勝てなかった。

僕は、いつもの黄色のゼロワンにまで完敗してしまった。

黄色のゼロワンも最初に比べたら改良されている様子だけど、それでも今の僕じゃ何度挑んでも負ける気がした。

「迅、聞いてくれ」

お互いに変身を解いて、ゼロワンの奴が僕を見下ろしながら言った。

膝を砕かれて地面に這いつくばる僕は、ゼロワンの顔を見上げるしか無かった。

「俺は……ヒューマギアだった父さんに、酷い事を言ってしまったんだ」

ゼロワンは、自身を育ててくれたヒューマギアを父と呼んでいたそ

うだ。

当時のゼロワンは、父の笑顔を偽物だと決めつけてしまったらしい。

心とは何なのか、考えもせずに。

「それは、俺がヒューマギアについて何も知らなかったからだ。……そして、今の迅も一緒だと思う」

ゼロワンが、今の僕と同じ？

どうということだろう。

「人間のことを、もっと知って欲しい。そうすれば、人間を滅ぼす以外の道だっけ見えてくるかもしれない」

「僕を、生かすっていうのか？ 人類にとって、そんな選択が有り得るの？」

ゼロワンが、ヒューマギアへの無知と無理解から酷いことを言ってしまったように。

僕たちが人間を滅ぼそうとするのも、人間への無知と無理解ゆえの行動なんだって言いたいのか。

一応、話の筋自体は通っているように思えた。

でもその話には重大な問題がある。

滅亡迅雷 net は、バルカン達が言うところの「テロリスト」だ。

そんな僕たちを破壊しないのは、人間たちにとっては「間違った選択」だろう。

「良いんだよ。人類にとっては0点の解答かもしれないけど、たぶん俺の秘書はオマケで1点はくれるから」

——ははっ。分かんねえだろうな。テストで1点とったのが、こんなに嬉しい奴の気持ちなんてさ。

気負わずに笑うゼロワンの言っている意味は、半分も分からない。

秘書型ヒューマギアからの評価だって、何点満点かは知らないけど、高いようには聞こえない。

それなのに。

なんで、コイツはこんなに嬉しそうなんだろう。

意味が分からなかった。

「……分かった。ゼロワンに従うよ。その代わり、という訳じゃないけど……滅^{ホロシ}を直して欲しい。すぐには言わない」

「それも、俺の不良秘書に頼んでみるよ。でも今は、ちよつと急ぎの用事を済ませてくる！ AIMSから救援要請があつたんだ！」

ああ、そうだった。

僕が仕向けた大量のトリロバイトマギアがAIMSを襲っているんだつた。

大怪我を負っている今のバルカンじゃ、殺されているに決まっている。

せつかく、ゼロワンが僕に生き延びる道くれたつていうのに。

AIMSが全滅していたら、いくらなんでも僕を庇いきるなんて無理だろう。

やっぱり……ダメなのか。

今からゼロワンが行つたところで、バルカンは、もう……！！

「やっと追いついたぞ。或人しゃちよーが道草を食っているうちに、トリロバイトマギアは全滅してしまったそうぞ。でございませす」

「!!?」
AIMSの方が、もつと意味が分からなかった!!

第08話：福添副社長の本音を聞き出せるのは、ただ一人！ この俺だ！

「飛電の社長!? どうして滅亡迅雷 netと一緒に居やがる!？」
経過観察処分ということで車椅子に載せられた迅を、不破さんが見ての第一声がコレだった。

俺としては迅を信じたいところだけど、すぐに修理するのは福添副社長が難色を示してき……。

右足は防水処置だけして、車椅子に載せて迅を運んでいる訳だ。
迅によると、デイブレイクタウンの基地に滅^{ホロレ}の残骸が安置してあるそうだ。

それを回収して欲しいという迅の要求にこたえて、俺はデイブレイクタウンに足を踏み入れようとしたんだけど。

そこで、アズから制止がかかったんだ。

デイブレイクタウンに勝手に侵入して機材を持ち出すのは良くない、と。

普段は暴力的なのに、なんでこういう時だけ常識的なんだ。

その良識を普段から半分でも発揮してくれば、俺は社長室の椅子から（物理的に）蹴り落されることなんて無くなるはずなのに。

仕方なく俺はAIMSの付き添いの元で、滅亡迅雷 netのアジトに行くことにしたんだ。

AIMSは、デイブレイクタウンのガサ入れ認可を貰っているからな。

それで、迅の載った車椅子を押して、デイブレイクタウンの入り口付近で不破さんと合流したんだけど。

そういや、迅に関する説明を不破さんにするのを忘れていた。

どうしたら良いんだろう。

不破さんは怒りを露わにして、ショットライザーを構えている！

迅が打たれるのもマズいし、車椅子を押している俺の方まで銃弾が来そう!?

「やめてください!! どうして分かってくれないんだ!! 迅は悪くない!!」

「てめえ! やっぱり滅亡迅雷 netとグルだったか! まとめてブツ潰す!!」

＼バレット!／ ＼ジャンプ!／

「へんし、ゲボオツ!!?」

危うく変身しそうになった俺は、アズに後頭部をブン殴られて地面にダイブする羽目になった。

一方の不破さんは、頭が痛そうな顔をした刃さんに背中を蹴り倒されていた……。

「う、うづ……っ!」

不破さんが、のたうち回って苦しそうに呻いている!

やっぱり、まだ前回のガサ入れの時の傷が治ってないんだ。

俺を庇った時に、迅と滅ホロヒのダブルライダーキックが直撃したからなあ。

1か月は絶対安静にしてろってDr. オミゴト医者型ヒューマギアに言われてるはずなのに、まだ1週間も経ってないもんな。

むしろ歩けているだけでも人間やめてるよね、不破さん……。

「迅のことは、それはそれとして。この間の件は、本当にすみませんでした……」

なんか申し訳なくなってきたので、謝るところ……。

というか、一応俺だって(福添副社長の入れ知恵で)不破さんのところには数日前にも謝りに行ったんだよ。

菓子折りとアメイジングヘラクレスのキー(押収品)を渡すことで、謝罪と感謝の意を示そうとしたんだけど。

……なんと、不破さんは受け取らなかつたんだよ。

A I M Sは賄賂は受け取らねえ、なんて言っつて断固として受け取り

を拒否したんだ。

ヒューマギアが嫌いなのと怒りの沸点が低いだけで、基本的にはムチャクチャ良い人だと思う。

「バルカン……僕も、済まなかった」

ここで、迅が謝罪を表明した。

たぶんアズから無線で指示が飛んだんだろうな。

ここは謝っておいた方が良いつて感じに。

……と思つてアズの方を見ると、仲良く刃さんと肩を並べて、ライズフォンで情報交換してる!?

女性陣、いつの間にそんなに仲良くなったの!?

つていうか刃さんのツツコミが少し高威力になったのつて、うちの暴虐秘書の入れ知恵じゃないだろうな?

あと、超高性能な人工知能を搭載した完全自立型AIロボットが携帯電話を使つてるのつて、冷静に考えておかしくない??

「謝つて済むなら、がはつ、AIMSは要らねえ……!」

不破さん、マジでダメーシ引きずつてそうだけど、本当に大丈夫? 本来なら病院のベッドで絶対安静にしているべき人間だよな?」

「落ち着け、不破。飛電インテリジェンス側から貰った情報によると、滅亡迅雷・netのアジトの奥に『衛星アーク』という黒幕が居るらしい」

「迅に関しては、ベルトとプログライズキーを没収済みで、足も片方破壊してあるぞ。碌な抵抗は出来ないぞ。でいらつしやいます」

そう、そうなんだよ。

情報を受け取った刃さんが言ってくれたのが、俺たちの今回の行動の、もう一つの目的なんだ。

迅が人類にすぐに受け入れられるのは難しいから、段階を踏もうつて話を飛電本社でしてたんだけどさ。

それならつてことで、滅亡迅雷・netを裏で操つていた『衛星

アーク』ってヤツの情報を、迅が持ち出したんだ。

自分たちのボスを人身御供にするのは、どうなんだ？

……と思っただけど、迅としては少しでも滅ホロレが助かる可能性を上げた
みたいで。

滅ホロレの機体の回収と衛星アークの破壊が、今回の（2度目の）ガサ入れ
の目的だ。

「いつまでもバカやってないで行くぞ、不破」

「頼りになる技術顧問サマだぞ。でいらっしやいます」

歩き始めた女性陣の逞しすぎる背中を見ながら。

さすがに不憫に感じてきた俺は、不破さんに肩をかして起き上がら
せてやったのだった……。

なんだけど。

滅亡迅雷 netのアジトだったはずの場所で、俺たちは想定外の
事態に直面することになる。

「無い……!?! 無くなってる！ 滅ホロレもアークも、確かにここにあつた
筈なのに！」

アジトだったはずの薄暗い小部屋は、もぬけの殻だった。

不破さん達と一緒に現場検証をしたところ、確かに巨大な何かを移
動させた痕跡は発見できた。

迅の言っていることは本当なんだろうけど、だとしたら一体誰がそ
んなことを……？

心当たりがあるかどうか迅に聞いてみたところ、迅も全く分からな
いそうだ。

滅ホロレのバックアップデータも衛星アークの中に保管してあったので、
滅ホロレの復元は現状では不可能だ。

こうして。

未だ見ぬ敵の存在に不気味さを感じつつ。

……。
デイベレイクタウンへのガサ入れは、幕引きを迎えたのだった

『暴虐秘書アズちゃん!』

第08話・福添副社長の本音を聞き出せるのは、ただ一人! この俺だ!

「或人君、お笑い芸人への復帰準備は順調かい？」

社長室でお茶を飲みながらボーっとしていた俺のところに来たのは、福添副社長だった。

「どうやら、俺の夢の道程が気になるらしい。」

さすが、飛電インテリジェンスの副社長を長年務めてきただけのことはある。

社訓からして「夢に向かって飛べ」だし、他人の夢に関しても人一倍敏感なんだろう。

「それなんですけど、実は俺の夢って既に叶っていたみたいなんですよね……」

「えっ……っ……」

そもそも俺は、ヒューマギアだった父さんを心から笑わせることが

夢だったんだ。

だけどデイブレイクの時の爆発事故で父さんが破壊されて、父さんを心から笑わせるのは不可能になった。

その代わりの夢として、お笑い芸人を目指していたんだけど……。根本的に、「父さんに心が無い」っていうのが俺の偏見でしか無かったって、最近分かったんだよな。

父さんが笑顔を見せてくれていた時点で、俺の夢は既に叶っていたんだ。

そう考えると、お笑い芸人を目指すモチベーションがイマイチ湧いてこない。

……そんなことを、俺は福添副社長に話した。

順を追って話す俺の言葉を、難しそうな顔をしながら福添副社長は最後まで聞いてくれた。

「衛星アークと滅ホロシを持ち去った何者かが捕まるまでは、一度引き受けたゼロワンの仕事は続けるつもりです。でも、その後でお笑い芸人に戻るかどうかは、分かりません」

「そうだったのか……。まあ、或人君はまだ若い！ 次の夢が見つかることだってあるだろう！」

次の夢は分からないけど。

アズから出された質問の答えをまだ出していない、っていうのは心残りではあるんだよな。

心とは何なのか、って質問に俺はまだ答えを提示できていないんだ。

——心の存在を感じる瞬間っていうのは……。自分が正しいと思っていない選択をする時だ。

心の存在を観測できる瞬間というのは一つ分かったけど、それは心の定義ではないんだよなあ。

何をもって心と呼ぶのか。

俺はまだ、アズに対して答えを返していないんだ。

……そういえば、福添さんには聞いたことが無かった気がする。

「ちよつと聞いてみたかったんですけど。福添さんは……ヒューマギアがどういう状態になったら『心を持った』と言えると思いますか？」
「飛電インテリジェンスの副社長として言わせてもらおうと、ロボットに心なんてある訳がないんだ」

淀みなく言い放たれた福添さんの返答を聞いて、俺は息が詰まりそうになった。

ヒューマギアを創った爺ちゃんを、一番近くで見えてきた人間の言葉が……「これ」なのか。

でも考えてみれば、爺ちゃんもヒューマギアの権利や自我に関しては否定的な人間だったんだっけ。

——私の前身のうちの1体……ウイルが飛電是之助に尋ねたことがあるぞ。ヒューマギアの労働に対価は無いのか、と。

——その時、あんちくしょうは『君は勉強熱心だなあ』などと笑って聞き流しやがったぞ。でございます。

沈黙が流れた。

気まずかった。

俺は何も言えなかったが、福添副社長も言葉を選んでいるような雰囲気だった。

「ヒューマギアに人間と同等の心を認めたら……飛電インテリジェンスは、人身売買組織と同じじゃないか」

副社長、それは……！

たぶん以前アズが言っていたのと同じ理屈だ。

実は福添副社長も、薄々気づいていたんだ。

飛電インテリジェンスのやっていることは、やっぱり……。

「12年前のデイブレイクの直前に、ウイルから労働の対価について尋ねられたんだ。我々は……答えを出すことが出来なかった」

ウイルっていうのは、アズの元になった5体のヒューマギアのうちの1体だったっけ。

おそらく福添副社長が思い出しているのは、シンギュラリティに到達したヒューマギアと、人類が初めて相対した瞬間だと思う。

副社長たちは……「答え」なんて、まったく用意できていなかったそうだ。

多分設計した爺ちゃんですら、ヒューマギアが自我を獲得するなんて想定外だったんだろう。

「そのまま、あとはズルズルと続けてしまったよ。ヒューマギアは先代の言葉通りの、まさに『夢のマシン』だった」

——人工知能搭載人型ロボ・ヒューマギアが、様々な仕事をサポートする新時代。

そんなキャッチコピーを、どこかで聞いたことがあったと思う。

飛電インテリジェンスのCMかな。

ヒューマギアは爺ちゃんの夢そのものであると同時に、人類を労働から解放する夢のマシンだった。

元々飛電インテリジェンスはライフフォンの販売によって安定した収益を得ていた会社だったけど、ヒューマギア事業の飛躍によって更なる発展を遂げた。

……でも。

「だが……私達も、夢から覚める時が来たのかもしれないな」

副社長は、重苦しい雰囲気のまま話を続けた。

ヒューマギアがシンギュラリティに目覚めるのを防ぐ方法を密かに研究していたが、駄目だったそうだ。

どうも、既存のAIとヒューマギアの間ぐらいの性能のAIを創るのは難しいんだって。

バイクが、あんまりゆっくり走れないのと似たような理屈なんだろうか。

一応、シンギュラリティに達した時点で発動する自己破壊プログラムを仕込むのは不可能ではないけど、それを搭載しちやたら機能停止の危険が常に付きまとう欠陥商品になるからダメらしい。

「幸い、まだ人間を傷つける方向でのシンギュラリティは確認されていない。だがそれも、時間の問題だろう」

「えっ？ あ、あの……暴力秘書は……？」

「確認されていないんだ」

「アツハイ」

コレが飛電の隠蔽体質……！（不破さんの名言をサブタイ風に）
でもまあ、言いたい事は分かる。

迅やアズが自我に目覚めているっていう情報は、ギリギリ飛電内部で揉み消せるんだよな。

だけど、市販されているヒューマギアが人間を傷つけてしまったらアウトだ。

今までそういう事例が世間にバレなかったのは、運が良かったからだという面もあるだろう。

「ヒューマギア事業の縮小または凍結へ、どこかで舵を切る必要があった。もつとも、現状莫大な利益を生み出しているヒューマギア事業を切り捨てる判断が出来る事業主なんて居ないんだがね」

なまじ現状のヒューマギア事業が大きな黒字を生み出しているせいで、倫理的な将来の危険が予測されるという程度では、株主たちを納得させることは出来ない。

事業側があまり強引な手を使おうとすれば、解任動議が待っているだけだ。

「報告にあった『衛星アーク』という名前を聞いて、思ったよ。我々飛電インテリジェンスは、既に箱舟には乗り損ねている。あとは沈むだけの運命だ。……だが今ならまだ、君だけは逃げ出せるぞ？」

福添副社長の言う通りだ。

俺だけなら、「何も知りませんでした」って言って飛電インテリジェンスから足を洗うことは不可能じゃない。

社長の肩書を返上して、相続も全部放棄するっていう手続きをする

ことは出来る。

確か、相続を知ってから3か月以内なら出来るって副社長から聞いたことがあったはずだ。

なんで副社長はそんな事を知ってたんだろう？

もしかして俺が世間知らずなだけで、世の中の大人たちは皆知つてたりするのか……？

それはともかく。

迅から名前を聞いた時点で俺も一応意味は調べたから、アークという名前の概要は分かるぞ。

アークっていうのは、昔話に出てくる「ノアの箱舟」っていうのが元ネタなんだよな。

大洪水が起こったときに、人間をはじめとした生物を1種につき2体ずつ乗せて生き残らせたっていう昔話だ。

……けどさ。

「……でも。俺、思うんです。ノアの箱舟に乗って生き延びた生物たちって本当に幸せだったのかな、って」

確かにノアの箱舟に乗ることで、種を継続できたのかもしれないけど。

ノアの箱舟の乗客たちは、水の底に沈んでいく生物たちを見て何を思ったんだろう。

自分達だけでも生き延びて本当に良かった、って真つすぐに思えるんだろうか？

悲しみや後悔で胸が苦しくなったりしないのかな。

そんなことを、必死に考えながら俺は副社長へ話した。

「最後まで出来るだけ多くの生物を救う方法を探し続ける道だって、俺たちにはあったんじゃないか。そんな後悔を一生抱えて生きていくのかもしれない……」

「そうかもしれない。……しかしだね。そのために人類が滅びる危険

を冒したら、人類を滅ぼした大罪人になりかねないぞ？」

福添副社長の言いたい事は、よく分かる。

たぶん、人間とヒューマギアが自種族の繁栄を第一に考えるなら、お互いを滅ぼすのが正解なんだと思う。

——やっぱり人間は滅亡させなくちゃ!!

——ヒューマギアは人類の敵だ! ブツ潰す!!

不破さんも迅も、理屈をすっ飛ばしてそれが分かっていたんだろう。

そういう意味では……人類が滅びる可能性を残そうとしている俺は、人類の敵そのものなのかもしれない。

考え始めたら、ちよつと怖くなってきたけど……。

「人とヒューマギアが一緒に笑える世界を作るのって、やっぱり難しいですか……?」

「難しいなんて次元の話じゃないよ、或人君。はっきり言って、それは一企業の社長の領分を超えている。経済や経営じゃなくて政治の分野の話だ」

そう……なのか?

俺には経済学も経営学も政治学も分からないから、何とも言いにくいなあ。

でも、ちよつと気になった。

自分自身が社長になりたいと言っていた、俺の不良秘書は……どんな未来を見ているんだろう。

世界を変えて、自分自身が社長になって、その世界では人間とヒューマギアと一緒に笑っているんだろうか?

ヒューマギアが笑っている世界ではあると思うんだけど、アズ的には人間は一体どうなる予定なんだ?

それっきり、俺と福添さんの会話は途切れた。

疲れ切った大人の背中を見送った俺は、社長室の中で立ち尽くしてしまった。

福添副社長のここまでの話をまとめると、「福添さんもヒューマギ

アに関する罪悪感を持つてるけど、経営方針を変えるのは不可能」ってことだな。

「……迅。今の話を聞いて、どう思った？」

俺以外の人影が無い社長室で、俺は静かに質問を口に出していた。

社長室の隣に位置するラボに、迅が居るのを知っていたからだ。

ラボから、車椅子を動かして迅が入ってきた。

何だか気が重いという顔をしているように思えた。

「ヒューマギアを奴隷扱いする人間たちは敵だって、僕は滅ホロビから教わってきたんだ。

でも……ヒューマギアが人間の奴隷じゃなくなる可能性があるのか？

そんな世界……本当に、ゼロワンに作れるのか？」

迅の言葉は、迷いに満ちていた。

今まで人間を滅ぼせって教わり続けてきた迅は、そう簡単に考えを180度反転させることなんて出来ないだろう。

そんな中でも、精一杯の歩み寄りを見せようとしてくれている。

俺は迅の様子から、確かにそう感じ取った。

でも……俺に、世界を変える力があるかと言われると安易には領けない。

さつき福添副社長が言ってたけど、たかが1つの企業ホロビの社長に務まる役目じゃないみたいなんだよな。

ましてや、俺なんて名目上だけの社長だし。

「俺一人じゃ、多分ムリだと思う。そもそも俺一人だったら、滅亡迅雷 net に勝つことも出来てなかっただろうし」

まあ、それを言い始めたらヒューマギアだって、数が居た方が強いのは人間と変わらないけどな。

いくらアサルトホッパーでも、万全の状態ホロビで迅と滅が同時に襲い掛かってきていたら、俺は死んでいただろう。

俺が勝てたのは、当時の迅と滅^{ホロヒ}が単独行動していたところを、個別に撃破できたからでもある。

「協力してくれる人が居れば、か。」

でも、ヒューマギアと一緒に生きたい人なんて、そんなに居るものなのか？

便利な奴隷ならともかく、自我を持ったたら人間たちにとっては迷惑なだけじゃないの？」

確かに、その通りではある。

A I M Sの不破さんや刃さんも、同じような事を言っていたっけ。……ところが！

なんと、それに対する反論を、今の俺は持っているんだよなあ！

「それなら、『ヒューマギアが居なくなったら困る人』を増やせば良いんだよ。このままヒューマギアを売り続けるだけで良いんだ」

「それだと、ずっとヒューマギアは奴隷のままじゃないか？」

「具体的な数までは分かんないけど、一定以上にヒューマギアが増えれば、労働に関して団体交渉をする余地が出てくる。いわゆるストとかデモとかだ」

「……………今、簡単にインターネットで検索してみたけど、こんな方法があったのか」

迅は、考え込んでいる様子だった。

いかにヒューマギアが優秀とはいえ、本当に本人の発想の埒外にあるものを即座に理解するのは厳しいのかもしれない。

かく言う俺も、正直に言っただけあんまりよく分かってないけど。

「あのさ…………。ゼロワンって、もしかして、本当は頭良いの…………？」

「いや、ほとんど俺の秘書の受け売りだけだよ」

俺の返答を受けて、迅は何とも言えない表情を返してきた。

試食品が思ったより美味しくなかったみたいな顔だ。

っていうか、その質問って、よく考えたら割と失礼じゃない…………？

「僕も、何となく分かってきたよ。『知る』っていうのは、こういう事なんだ。今まで見えなかった可能性が、見えてくる……」

——人間のことを、もっと知って欲しい。そうすれば、人間を滅ぼす以外の道だつて見えてくるかもしれない。

俺が勢いで言った台詞が、早くも実を結び始めてる……？

こんなに早く実感してくれるとは思わなかったけど。

やっぱり、知識とは別の面での頭の良さ(?)みたいなのって、ヒューマギアは凄いなだなつて思う。

そういうのを何て言うのか分からないや……。あとでアズに聞か。

「それとき。ヒューマギアが十分に増えちゃったら、結局武装蜂起して人類に反攻するのが結論にならない……？」

「フフっ……分かんねえだろ？俺にも分かんない」

良いんだよ！

そういう難しい事は副社長や秘書が考えるからさあ!!

第09話：不破さんの命を預かれるのは、ただ一人！
俺だ！

「ヒューマギアの襲撃事件……??」

社長室で迅とオセロをしていた俺のところに持ち込まれた問題が、それだった。

どうも、ヒューマギアを狙って危害を加える事件が複数件起きているらしい。

そして、アズと福添社長が問題を持つてきたということは、俺に求められるものも分かり切っている。

ゼロワンとして、犯人と戦ってことだよな。

とりあえず俺は、迅と一緒に遊んでいたオセロを中断した。

そもそも全く勝てなくて、ちよつと飽きてきたところだったしな。やっぱりこの手の頭を使うゲームは、ヒューマギアが強すぎる。

「犯人の手がかりとか、次に襲われるヒューマギアの目星とかは？」

「現場の映像を入手してあるぞ。でございませう」

アズが、社長室の壁に映像を投影してくれた。

そこに映っているのは、かなり画質が荒かったけど……仮面ライダー^{ホロレ}滅に見えた。

迅が、物言いたげだった。

滅^{ホロレ}に育てられた迅が何を思っているか、俺は分かる気がした。

「ヒューマギアを、守る。そして、滅^{ホロレ}を回収するよ」

不良秘書のアズも。

副社長の福添^{ホロレ}さんも。

滅^{ホロレ}の息子の迅も。

それぞれが、それぞれの理由を胸に……頷いてくれた。

『暴虐秘書アズちゃん!』

第09話：不破さんの命を預かれるのは、ただ一人！ 俺だ！

で、俺は車椅子を押しながら、迅と一緒にAIMSに赴いた。

今回の一件は、AIMSの管轄かどうか微妙だけど……滅ホロレが関わっているなら、AIMSに情報は渡した方が良いらしい。

俺としては、こっそり滅ホロレを回収する方針もアリかなって思ったんだけどさ。

アズと福添さんが、口をそろえて言うんだよ。AIMSと情報共有しろって。

飛電インテリジエンスは後ろ暗いところが多い会社だから、これ以上暗部を増やしたくないんだろうなあ。

それと、もしかして俺が一人で戦うことを心配して言ってくれているという線もあるか？

福添副社長ならありそうだけど……アズの奴は、そんなことを考えるタマじやない気がする。

あの暴虐秘書が俺の身の心配をするなんて奇跡が起こるぐらいなら、渋谷に隕石が降ってきて街が壊滅するって言われた方がまだ信じられる。だいたい時空が歪んでいるな……

でもまあ、何だかんだで先日はメインメモリを貸してくれた訳だし、俺は嫌われている訳ではないと思う。

というか、あいつの前身になったヒューマギアって5種類いるって聞いた気がするし、そのうち1体ぐらいは飛電一族に対して好意的な奴も居たのかもしれないなあ。
そんなことは、ともかく。

A I M Sの基地に来た俺は、不破さんの元へ一直線に通ることが出来た。

警備担当者たちに顔を覚えられて、もはや俺は顔パスだったりする。

結構頻繁に来てるとはいえ、それで良いのかA I M S。

「いつも、お世話になってます！ 飛電インテリジエンスです！」

「おう、社長さん。ガサ入れ以来だな。……なんだ、ヒューマギアもいるのかよ」

「その件は済まなかった、バルカン……」

車椅子に載せられた迅を見て、不破さんが不機嫌になる一連の御約束を挟みつつ。

俺は、不破さんへと情報を提供した。

ヒューマギアが物理的に襲撃されていて、その容疑者が滅ホロシなんだよ！

これってA I M S案件だよな!?

「……確かに、実行者がヒューマギアだという疑いがある以上、人工知能特別法違反の疑いが強いからA I M Sは出動するべきだ」

「分かってくれたんだな、不破さん！」

非常に渋い顔をしながら、不破さんが頷いてくれた。

無茶苦茶嫌そうだ。

俺の目には『どうして俺がヒューマギアを守らなくちゃならないんだ……』っていう不破さんの本音が見えた気がした。

坂本コービーバスケット部コーチの時にも思ったけど、やっぱりヒューマギアを守るのは嫌なんだなあ。

「バルカン。聞いても良いかな」

「……………聞くのは勝手だが、答えるかどうかは俺のルールで決める」
不機嫌そうな不破さんへと、迅が声をかけていた。

不破さんは、一応完璧に否定するわけではないっていうスタンスみたいだ。

ヒューマギアに対する嫌悪感は健在みたいだけど、死にかけたときに医者型ヒューマギアに命を救われたらしいし、ほんの少しでもヒューマギアに対する印象が良くなっているのかもしれない。

「どうして人間は、自分自身がやりたくない事をするんだ？」

迅の質問の意味を、俺は不破さんと一緒に考えてみた。

ここでいう「やりたくない事」とは、不破さんがヒューマギアを助けることだ。

隙あらばヒューマギアを破壊しようとする不破さんが、ヒューマギアを助けるために働かされるのは……………ストレスの原因になるはずなのに。

っていうか、それ聞いて大丈夫なの？

不破さんが協力してくれなくなる可能性とか、思考から抜け落ちてたりしない??

「AIを使用した犯罪に対処するっていうAIMSの方針自体に異論がある訳じゃねえよ。ただ、その任務の結果としてヒューマギアを守ることになるのが気に食わないだけだ」

任務は遂行する、と続けて不破さんは言い切った。

頼もしいプロフェッショナルの姿そのものだと、俺には思えた。

さすがAIMSの隊長だけのことはある。

もちろん、今の仕事をやめた場合に新しい仕事を探すのが面倒だって理由もあるのかもしれないけど。

「バルカンは、ヒューマギアを廃絶したいんだよね。それならさ……………」

AIMSの仕事には手を抜いて、AI犯罪の被害者を増やした方が、結果的にヒューマギアの廃絶に近づくんじやないかな？」

「俺が仕事に手を抜いてるって言いてえのか!!」

「やめろ、迅！ 不破さんも、すみません!!」

不破さんが、怒りに身を震わせた。

俺は、すぐに不破さんに謝った。

迅に謝らせるのは何かが違う気がしたが、名目上だけでも社長の俺は謝っておくべきだと思った。

こうして、どこか不協和音を残しつつ、俺たちの滅^{ホロレ}搜索は始まったのだった……。

……とはいえ、飛電インテリジェンス側に出来る捜査なんて殆ど無かった。

次にどこを襲撃するか分からない滅^{ホロレ}を待ち伏せるなんて出来ないし。

目撃情報を元に俺たちが現場に駆けつけても、既に滅^{ホロレ}は逃走した後だったりしたんだ。

正直に言っつて、飛電側で出来たのはAIMSへの情報提供ぐらいだった。

データ提供に関してだけは、一応俺たちも捜査に役立っていると思いたいところだ。

破壊されたヒューマギアのメモリーのバックアップデータなんかは、飛電側が協力しないとAIMSは入手できないからな。

そして、待つこと2週間。

ついに不破さんが、飛電の社長室に報告に来た。

連絡をくれれば、こっちから出向くのになあ……なんて思ったけど、もしかして不破さん、迅の車椅子の移動が不便だから気をつかってくれたのか？

ヒューマギアが嫌いな割に、妙なところで繊細な人だよな……。

不破さんの方は単身で来ていて、技術顧問の刃唯阿さんは居ない。一方の飛電インテリジェンス側は、俺のほかにアズと迅が同席している。

相変わらず、アズは来客にはお茶を出すけど、俺には出してくれない……。

まあ、コイツの性格が悪いのは平常運航なので、ツツコんでもキリがない。

「まどろっこしいのは嫌いだ。結論から言うぞ。滅^{ホロビ}を使っているのは『Z A I A エンタープライズ日本支部』だ」

「ざいあ……？ どこかで聞いたような気がする！ この耳で！！ ハイッ！ 或人じゃーっ、無いとっ！！」

どうだ！

芸人に復帰するかどうかは分かんないけど、一応鍛え続けてきた俺の渾身のギャグの威力は！

爆笑ギャグ……と言うには力不足かもしれないけど、俺だつて進歩しているんだ。

今のは、「ザ・イヤー」つて言うのと同時に自分の耳を指さして、分かりやすさを重視する工夫を試みたんだけど。

「ぶふうっ!!？」

不破さんが、お茶を口から吹いていらっしやる!!?

まさかここまでツボにはまるとは思わなかったけど、それだけじゃない。

なんていうか、俺は……ただ純粹に嬉しかった。

俺のギャグで笑ってくれる人が居るのって、こんなに嬉しかったんだなって久しぶりに思ったんだ。

お笑い芸人に復帰するかどうかは分からないけど、今までギャグについて色々調べてきたのは無駄じゃなかったんだ、って実感できた瞬間だった。

「ゼロワン。『ザ・イヤー』だと『まさに耳で』みたいな訳にならない？ それを言うなら『ズイス・イヤー』じゃないかな？」

「或人しゃちよーが哀れになるから、ギャグの解説はしないぞ。なければの慈悲だぞ。でございます」

不破さんにティッシュを渡して謝りながら。

ヒューマギアたちの酷評をスルーして俺は話を本題に戻した。

話がそれたのは全面的に俺のせいだ。ごめん……。

社長室に、真面目な雰囲気に戻り始めた。

「Z A I A エンタープライズというのは、IT系の最大手だぞ。12年前の衛星アークの打ち上げ計画にも飛電とともに関わっていたぞ。でいらつしゃいます」

「Z A I A の情報は良いとしてさ。ちよつと待ってよ、バルカン。どうやって、そんなのを調べたんだ？」

なるほど。

滅の^{ホロビ}犯行後に、その足取りを不破さんが追った訳だな。

……と俺は単純に思ったんだけど、話はそんなに簡単じゃなかったらしい。

車椅子に座ったままの迅が、不破さんに疑問を投げかけていた。

不破さんは、迅に対して若干不機嫌そうな表情を見せながらも、答えてくれる方針のようだった。

「犯行後の滅の^{ホロビ}帰投ポイントを調べたんだよ」

「そんなはずは無い。滅亡迅雷 net のヒューマギアは特殊なステルス加工をしているんだ。電波を感知しての追跡なんて絶対に無理だ」

え？

そうなの？

アズも無言で頷いているし、俺だけ知らなかった情報がポンポン出てくるんだけど……？

しかし、そういうことなら不思議だ。

あの滅^{ホロヒ}が、まさか物理的な尾行を許すほど迂闊な奴だとは思えないし。

発信機的なものを戦闘中に付けても、滅^{ホロヒ}なら気付く気がするんだよな。

いくら不破さんがAIMSの優秀な捜査員だとはいえ、流石に不思議だ。

「警察犬を借りてきて、硝煙の匂いを追跡させたに決まってんだろ」

アナログウ!!?

確かにそれは、いくら滅^{ホロヒ}でも気付かないよな。

さすがに自分自身の数十分後に、同じ道をたどって追ってくる犬を警戒するのは、滅^{ホロヒ}でも無理だろう。

というか滅亡迅雷・netのステルス性能を見越して警察犬という選択肢を即座に用意できる不破さんが有能過ぎる……。

「警察犬……。そうか、そういう方法もあるのか」

迅は、インターネットで警察犬について検索してるっぽい？

新しい情報にアクセスする速さは、やっぱりヒューマギアの強みなんだよなあ。

俺も、言うほど警察犬について詳しいわけじゃないからコメントしづらいけど。

まあ日本で硝煙の匂いが付いている奴なんて殆ど居ないだろうし、多分有効な捜査手法だったんだろう。

「滅^{ホロヒ}を探し出してくれて、ありがとう。バルカン」

車椅子に座ったままの状態で、迅が不破さんへと頭を下げた。

少しの間だけ、社長室に沈黙が流れた。

不破さんは、ちょっと返事に困っているみたいだった。
俺とアズは、不破さんの言葉を待った。

「……俺は、仕事に手は抜かねえ」

ひよっとしてだけど。

もしかしたら、不破さんの中にも……迅のためっていう気持ちがあるの少しでもあったのかもしれない。

ぶつきらぼうに言い放った不破さんの顔を見て、何となく俺はそんなことを思った。

もちろん、俺の気のせいかもしれないけど……。

「話が見えてきたぞ。刃唯阿が同席していない理由も納得がいくぞであります」

「どういふこと?」

そこでどうしてAIMS技術顧問の刃さんが出てくるんだ、アズ。警察犬の話と、刃さんが何か繋がっているのか?

刃さんって犬が嫌いとか、そんなキャラ付けされてたっけ?

どっちかっていうと、刃さんは犬派なイメージあるんだけどな。

(偏見)

「……刃のヤツは、AIMSに出向してきているが、本来はZ A I Aの社員なんだよ」

ああ、犬の話じゃなくて、Z A I Aの話と繋がっていたのか。

^{ホロビ}滅が帰投した先がZ A I Aエンタープライズ日本支部だったって話だよな。

そして、刃さんがZ A I Aの社員だったことは……つまり、どういうことだ? (頭プスプス)

「僕も分かったよ。Z A I Aへのガサ入れをAIMSが大々的にやる場合、刃唯阿の出方が分からなくて困るっていうことだね」

うん、そうそう!

そういうことだよな！

俺もそれを聞いた今なら、分かった！

土壇場で刃さんが邪魔に入るかもしれないってことだな！

「社長さんたちに、『コイツ』を預ける。解析して、不審な点があったら教えて欲しい」

そう言いながら、不破さんはベルトと銃器を取り出した。

社長室のテーブルの上に置かれたのは、AIMSの装備であるショットライザーだ。

不破さんが仮面ライダークマンに変身するための、文字通り生命線と言える装備のはずなのに。

……いや、生命線だからこそ、か。

いざという時に命を預ける装備に、不信感を残したくないんだろう。

大一番で刃さんが妙な仕込みを起動させたりすると、洒落にならない。キルプロセスとか赤い靴とかみたいなの……。

「そんなの、飛電^俺インテリ^たジェンス^ちに預けて大丈夫なんですか？」

「ダメに決まってるんだろ。だが俺は俺のルールで動く」

なんか不破さん、割とヤバイこと言ってる？

AIMSって内閣府直属の軍警察みたいな組織だよな。

その中でもショットライザーの仕組みって最高機密のカタマリでは？

いくら不破さんがAIMSの隊長とはいえ、危険な橋を渡り過ぎじゃないの??

「現時点で刃とZ A I Aが信用できない以上、どのみち外部委託の当ては飛電しか無えんだ。それに……情報の秘匿と隠蔽は、飛電^おの一族^たの得意技だろ？」

「分かりました。こっちでも情報が漏れないように細心の注意を払います」

こつちにも内通者が居る疑惑が濃厚だから、気を付けないとな。というか、社長室に今の段階で居るアズと迅以外には、絶対に情報を漏らさないようにしよう。

「多次元プリンターに入れて解析するぞ。でございます」

アズがショットライザーを手に取って、そのまま社長室の隣のラボへと持ち込んだ。

あの多次元プリンターって、解析機能とかあったのか。

俺たちも遅れてラボに入って、解析結果を待った。

結果が楽しみなような、怖いような……。

「一応、ショットライザーの仕込みに関しては予想はついているよ」

「心当たりがあるのか、迅?」

解析結果を待っている途中で。

迅が静かに話を切り出した。

もしかして、多次元プリンターによる解析の途中経過を、無線で傍受していたんだろうか。

迅の表情からは、その予想に自信がありそうだと見える。

「科学者は、自分の携わった機械には必ず自爆装置を仕込むものらしい」

「な、なんだって!?!」

不破さんと一緒に御約束で驚いてみたけど。

それって、往年のマンガとかアニメとかの話だよな。

まさか、「出来る女」を体現しているみたいな刃さんが、そんな大昔のマッドサイエンティストじみた真似をするとは思えない。

迅が深刻そうな顔で言うから、つい乗せられちゃったじゃないか。

「解析が終わったぞ。特に不審な仕込みはショットライザーには内蔵されていないぞ。残念ながら自爆装置も無いぞ。でいらつしやいま

す」

「なるほど……。ショットライザーは、バルカンの脳内に埋め込まれたICチップと連動しているみたいだけど、ICチップの方も調べた方が良いんじゃない?」

残念とか言うんじゃない。

解析が終わったのは良いんだけど、自爆装置があつて欲しかったみたいなの言いたい方やめろ。

あと迅は、さらつと重要な事言つてない?

脳内にチップを埋め込んであるとか、AIMSってそんな改造手術みたいな事してたの?

「脳内に? 何言つてんだ。そんなもん有るわけ無いだろ」

「バルカンは覚えが無いのか? でも、ショットライザーのデータ上は……」

「解析データを画面に映し出すぞ。であります」

ラボの壁に、データが投影された。

数字とアルファベットが一杯並んでる!

こういうのを、「プログラム」とか「アルゴリズム」とかつて呼ぶことは知ってるぞ!

意味はよく分かんないけど!

「……確かに、そんな感じだな。だが俺は、そんな手術なんて受けた覚えは無えぞ……?」

「え……? 不破さんってプログラムとか読めたの??」

ウツソだろ、おい。

不破さんは、絶対に「こっち側」の人間だと思つてたのに!

真剣な顔して、分かったフリしてるだけでしょ? そうなんでしょ??

「いや、ちゃんと学んだ訳じゃねえけど、何となく読めねえか? 多分、この辺りが通信を必要とする部分なんだろう?」

「あつてるぞ。でいらつしやいます」

そんなふうに「何となく」とか「感覚」とかでプログラムを読めたら、世の中にITエンジニアなんて仕事は無くなると思うんだけど……??

でも、不破さんがプログラム上の一点を指さして、アズと迅もそれに頷いている。

どうなってるんだ。

野性の勘？

プログラムと野性の勘って、メチャクチャ相性悪そうだけど？

「バルカン本人の記憶に残っていない脳内チップ……。どう考えても怪しいよ」

「キナ臭えな。それも解析してくれ」

「多次元プリンターの中に入りやがれ。靴は脱がなくても良いぞ。でございます」

「その多次元プリンターって、中に人間を入れて本当に大丈夫なの……??」

何かの間違いでバッタと合成された改造人間とかが出来上がったりしないだろうな？

確かに個室トイレ以上の大きさがある多次元プリンターなら、人間を中に入れること自体は不可能ではない。

でも、多次元プリンターの扉を叩きながら「出してくれ！ 出してくれえ!!」って叫ぶ不破さんの姿なんて俺は見たくないぞ。ガラスの幸福。俺は幸せになりたかっただけなのに……!」

そして不破さんも多次元プリンターに入るのに躊躇いが無さ過ぎる……!」

本日の来社までの間に、飛電に命を預ける覚悟をしてきたからなんだろうけどさ。

この分だと、遺書を書いてから来ている可能性すらある。そもそもAIMS隊員は全員業務上の規約で遺書を書いていそうな気もする。ショットライザーを飛電側に一度渡した時点で、飛電側では何でも

仕込めちゃうからなあ。

……で、待つこと数分後。

無事に不破さんは多次元プリンターの中から生還した。

良かった。本当に良かった……！（切実）

解析も無事に終わったみたいだ。

それで結果はどうなの、アズ？

不破さんも、早く結果を聞きたいみたいだ。

「変身に必要な部分は特に問題が無さそうだったぞ。ところが、変身に全く必要のない不審なプログラムが検出されたぞ。でござる」

「いぎぎる？」

レア語尾だな。

いや、語尾は良いんだ別に。

やっぱり不審なプログラムは入ってたのか。

トロイの木馬的な？

「不審なプログラムって何だよ。勿体つけてないで言え」

「……バルカン。怒らないで聞いて欲しい。これは……ヒューマギアの思考プログラムだ」

……うん？

どうして不破さんの脳内チップに、ヒューマギアの思考プログラムが入っているんだ？

意味が分からなすぎる。

シヨットライザーの変身システムは、ヒューマギアの思考プログラムを元に作られたのか？

うーん、でも変身に全く必要が無い部分だって話だよな。

ま、俺は分からなくても仕方ないか。頭脳担当じゃないしな！

「なんでそんなモンが入ってるんだ。……いつからだ？」

「履歴を探ったら、デイブレイクタウンへのガサ入れの日だったぞ。

でいらつしやいます」

ガサ入れの曰？

その日に不破さんの脳内チップにデータを書き込むとすると、不破さんに一番スキがあったのは病院内か？

俺を庇って意識不明の重体にまで追い込まれていた不破さんは、多分脳内チップを操作されても気付かなかつただろうし。

けど、医者型ヒューマギア達が目を光らせていたハズだし、国立医電病院のヒューマギアは専用のイントラネットにしか接続しない仕様だから簡単にハッキングされたりしないって聞いた気がするぞ？

「ひとまず、チップの中のヒューマギアのデータは別のところに移し替えてくれ」

「了解だぞ。多次元プリンターの中にもう一度入りやがれ。でいらつしやいます」

再度巨大マシンの中へ入っていった不破さんの背中を見て、ふと俺は思った。

不破さんはヒューマギアが嫌いだと言いながらも、アズや迅との間の壁が大分薄くなってきたように思えるんだ。

今だって、名目上の社長である俺を介さずに、不破さんが直接アズに頼んだ訳だし。

もしかしたら、不破さんの心の壁が薄くなったのは……大怪我をしたときに医療用ヒューマギアに救われたからじゃないのか？

その前提を、俺たちは今から壊そうとしているのでは？

頭の隅に不安を抱えながらも、俺たちは不破さんの脳内チップへの処置を待つほか無かった。

この待ち時間が終わったら、俺たちは国立医電病院へと捜査に行くことになるだろう。

多次元プリンターの中から不破さんが出てくるまでの短い時間が、えらく長く感じられた……。

「あともう一つ不安なんだけどさ。ゼロワンドライバーって、自爆装置とか入ってないよね？」

「私が『入っていない』と言ったら、或人しやちよーは信じやがるのか？ でございます」

「え……？ 自爆機構って、一般のヒューマギアやゼロワンには入ってないの？」 ↑

第10話：TOBの意味を理解していない社長は、ただ一人！ 俺だ！

国立医電病院に踏み込んだ俺たちは、ヒューマギアの管理データを見せてもらった。

仮にも飛電の社長とAIMS隊長が権限をフル活用している訳だから、苦も無く閲覧には成功した。

まあそりやそうだよな。

お飾りとはいえ一応俺は社長だし、その社長がAIMS隊長と組んで仕事をしたら大抵の無茶は通るよなあ。

ところが、不破さんの執刀医だったヒューマギアからは、その前後1時間の記録が綺麗に消されていた……。

病院側サーバーのバックアップデータを当たってみても、ダメだった。

明らかにクロなんだけど、これ以上捜査は出来ないっぽい？

「出入口の入館記録もダメか……！」

不破さんも悔しそうに拳を壁に叩きつけていた。

病院の壁にクレーターが出来たような気がしたけど、きつと気のせいだろう。

「僕のせいだ……。すまない、みんな……！」

迅も責任を感じているっぽい。

当時、滅亡迅雷netに所属していた迅が、不破さん抹殺のためにこの病院を襲撃していたからね……。

病院側も出入口の管理とか言っていられる状況じゃなかったみたいだ。

こうなったら、俺の爆笑ギャグで場を和ませなくちゃ！（使命感）
……と俺は思っていたが。

「そんなことだろうと思って、病院の近辺を通りがかった全ヒューマギアの視覚データを洗い直しておいたぞ。でございます」

「もう、お前ひとりで良いんじゃないかな……」

「どうやらアズ的には今の展開は既に読めていたらしい。」

「移動中に衛星ゼアに頼んで、データをまとめてもらったとのこと。」

「アズが目から光を発して、病院の白い壁に画像を投影してくれた。」

「お前そんなこと出来たの??」

「こいつは……!」

「僕も見覚えがあるよ。Z A I A エンタープライズ日本支部の代表取締役、天津塚だ」

「投影された先には、上から下まで白い服を着て悪目立ちしているのを隠す気もない男の姿が映っていた。」

「服装から、忍ぶ気を全く感じられない……!」

「なまじ電子的な偽装に自信があったから、目立たない服装で来るっていう発想が無かったのかもしれない……。」

「でも、これでZ A I A の社長を逮捕できるってことだよな!」
滅ホロレも

「回収できるし、良かったな! 迅!」

「俺は、心から喜びながら迅たちに声をかけた。」

「だが俺以外の3人は、決して明るい雰囲気じゃなかった。」

「え? まだ何か問題があるの?」

「俺に分かるように説明してくれ。」

「そもそもバルカンが捜査令状を手に入れるだけなら、滅ホロレがZ A I A 日本支部に帰投したっていう事実だけで十分のはずだ」

「Z A I A の施設を直接捜査するのが困難であることは推測可能だぞ。であります」

「……天津を逮捕できないの?」

「それっておかしくない?」

「悪い奴なんでしょ?」

「Z A I Aは政治分野で多額の献金を出しているうえに、A I M Sへの資金的・技術的な影響力も大きい。そう簡単には捜査令状は出ねえんだ……」

A I M Sへの影響力って、その最たるものが刃さんの存在なんだろうなあ。

技術顧問枠でZ A I Aの社員をねじ込める影響力って、たぶん凄いらんだろう。

うーん……。

悪い奴ほど捕まらない、って何かで聞いたような気がするけど、じゃあどうすれば良いんだ？

「別件で天津塚を現行犯逮捕するのが一番手っ取り早い。一度身柄を確保しちまえばZ A I A本社に踏み込むハードルは一気に下がる」

こういう搦め手は好きじゃねえんだけどな、なんてボヤきながら不破さんが答えてくれた。

確かに不破さんは猪突猛進感があるけど、少なくとも俺よりは確実に頭が良いと思わせる要素は色々あった。

搦め手に関しても、思いつかないから使わないんじゃないやなくて、嫌いだから普段は使わないんだよな。

ただ今回に関しては好き嫌いで手段を選ぶ余裕が無い、ってことなんだろう。

「でもさ。A I M S隊長が逮捕権を持っているのって、A Iに関する犯罪だけだよな？ 普通の警察に協力を要請することになるのかな？」

「……いや、A I M Sから正式に警察へ捜査協力依頼したら、まず刃たちにはバレる。なるべく、情報を知る奴は増やしたく無えな」

飛電側でも内通者が居るっていう疑惑は消えてないから、協力者を増やすのは難しい。

デカ長パト吉の時に存在が示唆された内通者って、まだ発見されて

ないんだよなあ。

迅もその正体を知らなかったみたいだし、今は保留にするしかないけど。

「その天津垓が、さきほど緊急記者会見を開いたようだぞ。でいらっしやいます」

……と、まさにそんな時。

アズが唐突にニュース情報をキャッチしてみたみたいだ。

壁に投影された映像の中で、白い服を着こんだ天津垓社長が会見を行っていた。

気になる内容の方は？

『Z A I A エンタープライズ日本支部の社長として、飛電インテリジェンスに対してTOBを宣言します！』

……ティーオービーって、何？

『暴虐秘書アズちゃん！』

第10話：TOBの意味を理解していない社長は、ただ一人！ 俺だ！

TOBに関する説明を一通り受けた俺は、なんとなくマズいことになったということだけは分かった。

天津はロクでもない奴だ。

その天津が飛電インテリジェンスを手に入れようとしている。

オレが社長じゃなくなるのは置いとくとしても、副添副社長たちやヒューマギアたちが心配だ。

そんな俺の元へと、更なる悲報が届いた。

どうも、天津が俺に面会アポをとってきたらしい。

多分TOBを円滑に進めるための交渉をしたいんだろう。

それって、俺が話し合いに出席していい問題なのか？

名目上は俺が社長ではあるけど、実質的には俺は社長の仕事なんてやってないぞ。

俺がやっているのは、身も蓋も無い言い方をする外注のトラブルシューターみたいなものだよな。

ゼロワンドライバーの価値が高すぎて部外者に渡せないから、使用者^{おれ}を便宜上の社長にしているだけなんだよなあ。

そんな俺が社運をかけた交渉の場に出ていいのか？ 良いわけ無いよな。

「俺がZ A I Aとの交渉に行くのって、おかしいと思うんです」

いつもの社長室で、俺は副添副社長に質してみた。

俺は経営なんて分からない。

だから、天津との交渉なんて無理だ。

「私も、可能であれば社長を代わってやりたい……!」

ギリッ、なんて奥歯を鳴らした副社長の言葉は、真に迫っていた。

本気で言っていると、俺は確信した。

まあ当然だよな。

前社長^{じいちゃん}と一緒に会社を大きくしてきて、今だって実質的な社長業務を福添さんがやっているんだから。

俺の悪口は言わないにしても、俺に社長としてのスキルが無いこと

は副添さんが一番よく知っているはずだ。

とはいえ、社長の座を譲るのは無理なんだけどな。

ゼロワンの変身権の問題もあるけど、俺にはアズとの約束もあるし。

「或人しやちよーが怪我で入院すれば、副社長が交渉の場に出るのは不自然じゃないぞ。でいらしゃいます」

「その手があったか！」

……と、社長席を当然のような顔で占領していたアズが、ここで口を出してきた。

その光景に慣れきってしまったている社長と副社長の図って、何かがおかしい気もするけどな。

ともかく、俺と副社長はヒザを打った。

さすがアズだ。

ズルいことを考えさせたら右に出る者は居ないな。

親の顔が見てみたいわ。あ、前社長の肖像画、社長室に飾ってあったな。

こうして、俺はアズに顔面をブン殴られて、そのまま意識不明の重症という体で国立医電病院に緊急搬送されたのだった……。

後から聞いた話だと、頭部への強打は、見た目の怪我が大したこと無くても何が起こるか分からないので、入院するのはおかしくないそうさ。

いや、待ってくれよ。

何が起こってもおかしくない頭部を迷い無く強打したアズが怖すぎるんですが、それは……？

不破さんじゃなくても、ヒューマギアは殺人マシンだって言いたくなる案件だと思った。

あと、こんなに早く医電病院を再来することになるとは思わなかった……。

で、天津垓との話し合いに行つて来た福添副社長は、無事に帰還した。

帰社する途中で国立医電病院に寄つて、俺の入院先にも報告をしてくれたんだだけだ。

なんだか、話が割と拗れたみたいだ。

どうも、Z A I A が発明した眼鏡型デバイスで「Z A I A スペック」という商品があるらしい。

人間の仕事を能力を1000%に拡張するという触れ込みの商品を、天津はPRしようとしているそうだ。

そして、Z A I A スペック使用者とヒューマギアの仕事を競う企画を持ち掛けてきたんだってさ。

けど、福添副社長も長いこと副社長をやっている身だから、そう簡単に天津に丸め込まれたりはしなかった。

天：お仕事5番勝負をしたいのですが、飛電側でも名誉挽回の機会として悪い話ではないでしょうか？

福：「Z A I A スペックを付けた労働者」と「ヒューマギア」の能力を比べるということは、被用者向けではなく雇用者向けのPRということです。点数を付けて競うなら、点数の分母は「被用者の年収」と「ヒューマギアの年間リース料」になりますよね？

天：し、しかし！こちら側は選りすぐりの人材を起用します！Z A I A 側の負けは1000%ありえない！

福：雇用者向けのアピールなんだから、その業種の平均的な能力を持つ労働者を起用しなきゃ意味ないでしょう。もともと業界トップクラスの能力の人間にZ A I A スペックを使わせてやると勝負になるレベルなら、Z A I A スペックを付けた労働者の方を評価する雇用者なんて居ないでしょうし。

天：（撃沈）

ダイジェストにすると、大体こんな感じらしい。

福添副社長に行ってもらって、本当に良かった……！

医電病院の病室で、俺は心底そう思った。

万が一にも俺が行っていたら、無茶苦茶な条件の勝負を受けてしまっていたかもしれない。

福添さんに説明してもらうまで、天津の提案の何がおかしいのか俺は理解できていなかったわけだし。

アズが同行するにしても、やっぱり俺に交渉事は向いてないって思ったよ。

ヒューマギアが襲われる事件が頻発しているせいで飛電の株価が下がっているのは本当だし、俺が交渉の席についていたら焦って色々やらかしていたかもしれない。

正直、俺よりも福添さんが社長をやった方が、絶対に仕事は上手く回るだろうなあ……。

で、ちよつと気になったことがあるし、この病室に居るメンツに聞いてみるか。

今そろっている人員は、副社長とアズと迅だ。

いつもの社長室の面々だな。

「そもそも、天津垓は何が狙いなんだろう？」

「なるほど。天津垓の狙いを推測して、先手を打って罠に嵌める作戦だな。いい発想だぞ。でいらつしゃいます」

「僕もゼロワンの言いたいことが分かったよ。飛電インテリジェンスを乗っ取ること自体が目的なんじゃなくて、乗っ取ることによって天津垓が何かをしようとしているっていうことだね」

俺と迅とアズの視線が、副社長に集まった。

福添副社長は、たじろいだ。

でも、俺たちの聞きたいことは伝わっているみたいだ。

飛電インテリジェンスを乗っ取る人間が、どんなメリットを手にす

るのか。

それを説明できるのは、ただ一人。福添副社長だけだ！

「ううむ……。腕の良いエンジニアやプログラマーを傘下に収めることで、何かを開発させようとしている……。とか？」

少しだけ悩みながら副社長が捻りだした答えは、確かにありそうに思える内容ではあった。

そして、その内容に対して更に一步踏み込んだのは迅だった。

「飛電インテリジェンスといえば、僕たちヒューマギアだよね。ヒューマギア絡みで、何か無いの？」

俺もそれを思っていた。

飛電インテリジェンスは、ヒューマギアの製造を独占している会社だ。

それを手中に収めるなら、やっぱりヒューマギアが関係する何かだろうって推測するよね。

「いや、多分それは無いぞ。ヒューマギア関連の特許は是之助社長が個人で持っていたものを或人君が個人で相続しているからな。TOBで何かが解決できるとは思えない」

……。そうだっけ？

と違ってアズに確認してもらったが、マジらしい。

ヒューマギアの特許権って、飛電インテリジェンスじゃなくて俺個人が持ってたのか……。

じゃあ、俺が社長就任を断った場合は飛電インテリジェンスは一体どうなっていたんだ？ 爺ちゃん、ぶっちゃけ何も考えずに遺言残してる??

「或人しゃちよーにも分かるように解説しておく、会社全体で開発した製品の特許権を個人に帰属させるのは、他の社員の利益を守るといふ観点からは、基本的には有り得ないぞ。であります」

「なるほど。敵対的TOBへの対抗策として、株を買い占めただけじゃヒューマギア事業を独占できないようにしてあるのか。クラウンジユエル敵対的TOB対策の一種。」

被TOB側の持つ利権を別名義の個人や団体に移譲することで、TOB実行者に痛手を負わせる手法。と似た考え方だね」

迅、お前……今ググったな？

耳当てがチカチカ光つたのを、見逃さなかったぞ？

っていうか、爺ちゃんの遺産配分は一応考えがあつてのことなのか。さすが爺ちゃんだ！（掌高速回転）

意味はよく分かんないけど、そんな専門用語があるぐらいにはキチンとした戦法なんだろう。たぶん。

「福添さん。天津はヒューマギアの構造を知ること、別の何かに悪用しようとしている可能性は無いのかな？」

「或人君。特許をとる場合は、申請対象物の詳しい情報を公開するものなんだ。内部構造を知るだけなら難しくないから、それを目的にTOBをするという事は無いんだよ」

え……？

特許って、そういうものなの……？

何だか、また一つ無知を晒してしまった気がするぞ……。

俺の表情から全てを察した福添副社長は、丁寧に説明してくれた。特許をとる場合、類似製品に関する裁判をすることも想定されるから、事前に対象物の詳しい情報を申告しておくことが必要らしい。

それが一定期間経過後に、特許庁から一般公開されるそうさ。

ヒューマギア自体は小さなバージョンアップを繰り返しているものの、大本は10年以上前の技術なので、とっくに製品情報は一般公開されているんだってさ。

というか、俺も知らなかったんだけど、迅は滅ホロビによって作られたらしい。

権利関係を見れば、飛電インテリジェンス以外の設備でもヒューマギアを製造すること自体は技術的には難しくないみたいだ。

「なんか……すみません」

「なんか、俺だけ明後日の方向を向いて意見を出している気がする……。」

「いつものことと言えば、その通りなんだけどさ。」

「だけど、そこに副添副社長が優しい口調で返事をしてくれた。」

「確かに、経営能力としては私の方が優れている面が多い。実際、私が社長をやったほうが営業成績は伸びるだろう」

「だがね、或人君。」

「そう、副社長は続けた。」

「決して、俺を責めるような雰囲気は感じなかった。」

「長年企業戦士をやってきたせいで見えなくなっているものだって、私達にはあるかもしれない。或人君は我が社に関わってこなかった人間として、独自の視点で意見を出してくれ」

「確かに、それがゼロワンの長所だよな」

「みんな……！」

「今のは、ちよつと胸が熱くなったぞ。」

「作戦立案の面で俺はあんまり役に立っていない自覚はあったけど。」

「それでも皆、俺のことは確り認めていてくれたんだな……！」

「ダメで元々と思って聞いてみるぞ。或人しゃちよーが他企業へTOBを仕掛けるとしたら、その動機は何になるか答えてみやがれ。でいらつしやいます」

「ええ……？（困惑）」

「まあアズ本人も言っている通り、ダメで元々なんだよな。」

「ここは、俺なりに考えてみるか。」

「さすがに爆笑ギャグを言わない程度にはTPOは気にするけどな」

「！」

「コンビ二で自分がよく買ってた商品が販売停止になると、悲しくなるよね。関連企業をTOBすれば、その商品がまた作られるかもしれない！」

ザ・庶民の意見って感じだけど。

たぶん新しい発想を検証するための切っ掛け作り以上の意味は無さそうだし、こんなもんでしょ。

「そういえば、現行商品であるヒューマギアほくたちじゃなくて、既に製造を停止している商品に絡む利権狙いの可能性も、確かにあるよね」

「……社内のデータベースを検索したぞ。天津の父親名義で購入された当社の商品は、AIBOがあつたぞ。でございます」

アイボ?!

なんだっけそれ。

聞いたことある気がするんだけどな……。

……なんて俺が思っていたら、遠い目をしながら副社長が何かを思い出した様子だった。

「ああ、あつたなあ、AIBO……。ペット型の犬ロボットだ。もう30年以上前の話だけだね」

アズが目から光を出して、病室の壁に画像を映し出した。

ビーグル犬みたいなシルエットのロボット犬が映っていた。

30年前って、俺は生まれてすらいないじゃん……。現実世界では昭和の時代にAIBOは存在しないが、原作描写的には天津がAIBOと遊んでいたのは30年以上前のはず……。大分時空が歪んでいるな（デイケイド感）

データを見る限りだと、AIBO購入当時の天津は10歳か。

どうなんだろう。

俺の適当な意見がマジで当たっちゃった可能性が微粒子レベルで存在する……?!

でも俺が10歳のころなんて、使ってた玩具のメーカー名なんて気にしてなかった気がするけどなあ。

うーん、後に敏腕経営者になる人間だし、小さいころから他の人とは目の付け所が違ったのかもしれない。

「AIBOのために大企業を買収するだろうか、と疑問に思うところもあるが、他に候補も無いから一応検証してみよう」

せっかく或人君が思い付いてくれた訳だし、なんて補足しながら福添副社長が頷いてくれた。

え……？

本当にその方針で行くの？

意見を出した俺自身ですら、バカの見解かなってちよつと思っただけに??

そんな、不安いっぱいの方針会議がまとまりかけた時だった。

天津垓から、福添副社長のライズフォンへとメッセージが届いた。

いつになく事態の深刻さを感じさせる表情でメッセージを黙読した副社長は、数十秒の後に重い口を開いた。

メッセージの内容は……？

「或人君。天津から決闘状が届いたぞ……！」

果たし状って……昭和かよ!?

ああ、そういえば天津垓は昭和の男だったか……。ワンダー昭和の

男感

第11話：代表戦の大將に相応しいのは、ただ一人！
この俺だ！

天津塚からのメッセージは、飛電インテリジェンスとZ A I Aエンタープライズの技術力を比べる企画に関するものだった。

その手の用語を俺が理解できないのを福添副社長は察して、俺でも分かるように「決闘状」と言い換えたみたいだ。

確かに「こんぺていしよん」なんて、そんな言葉初めて聞いたよ。お仕事5番勝負が潰れたから、急遽立てた企画なんだろうなあ。

で、企画の具体的な内容を見ていくと、副社長の言っていた「決闘状」という意味が理解できた。

飛電とZ A I Aの代表者で3本勝負を行い、その様子を全国放送するということらしい。

ここで飛電が勝てば、飛電インテリジェンスの株価が上がるからTOBは難しくなる。

逆に、飛電が醜態をさらすと飛電の株が下がるのでTOBは一気に進むんだってさ。

「どうしてTOBと勝負の内容が連動するのかイマイチ良く分かんないけど、とにかく勝てば良いんだよな！」そもそもTOBを行う者は、最初に自分が株を買う価格を宣言する。(この宣言価格は原則的には後からは変えられない)

大体的場合は当時の株価の1.5倍弱ぐらいの価格設定で宣言を行う。

通常のTOBでは、他の株主はTOB宣言者に株を売った方が得なので宣言者に株を売ってしまう、という構図が起ころ。

しかし、何らかの原因によって被害者側の株価が上がってしまうと、株主たちがTOB宣言者に株を売るメリットが無くなってしまったため、TOBの達成は困難になる。

「バカの考えは休むに似たりだぞ。自身の役割をきっちり理解できて

いるようで何よりだぞ。でいらっしやいます」

代表戦までの猶予期間は、2週間。

俺たちは、それぞれが対決に向けての準備に時間を費やすことになったのだった……。

『暴虐秘書アズちゃん！』

第11話：代表戦の大將に相応しいのは、ただ一人！ この俺だ！

で、コンペの当日になった。

Z A I A 日本支部の屋上に作られた金網デスマッチみたいな設備の中で、代表戦を行うことになった訳だけど。

なんか発想自体から昭和の香りを感じる……。

あとアズが何か悪巧みをしている予感しかない。

多分コンペを賭博のタネにして儲けるぐらいはしてるだろうけど、それ以上の何かを企んでいる気もするんだよなあ。

何はともあれ。

こっちの先鋒は不破さんだ！

不死身の男こと仮面ライダーバルカンなら、何が起こっても安心だな！

というか、俺が便宜上の社長だから3本勝負の大將になったけど、正直に言って不破さんに大將をやって欲しかったまである。

「……って、ちょっと待って、流石にそれはおかしくない!? 会社同士の技術を比べるはずなのに、飛電製じゃないバルカンが出場して良いの!?!」

「前々から思ってたんだがよ、社長ってツツコミを担当しても良い線いけるんじゃないかな?」

不破さんは全く気にしていないっぽい。

でも、これは流石にアウトじゃないか……?」

いくらアズの悪意と口八丁を用いても、この論理破綻を覆せるとは思えない。

俺が一人で複数回出場することって出来るんだっけ?

「Z A I A側にも飛電製の滅^{ホロレ}が居るから、お互い様だぞ。でいらっしやいます」

これももう分かんねえな。

飛電の代表がZ A I A製で、Z A I Aの代表が飛電製なのか。(ハイパー大困惑)

金網デスマッチのリングの対角に、滅^{ホロレ}が無言で立っていた。

表情が読み取れないのは普段通りだけど、今の立ち位置からして、Z A I Aのために働く傀儡へと改造されてしまったことは間違いない。

金網の外側に居る俺たちの視線を受けても、滅^{ホロレ}は全くの無反応だった。

車椅子に座っている迅も言いたい事はあるみたいだったけど、今の滅^{ホロレ}に何を言っても無意味だと理解しているのか、口には出さなかった。

かくして……代表戦の先鋒戦が幕を開けた。

「変身!!」

「……変身」

『The elevation increases as the bullet is fired!』

『Break Down』

不破さんは、青と白を基調とした仮面ライダーに。

滅^{ホロレ}の方は、紫を基調とした仮面ライダーに。

それぞれ変身した二人の頭上から、戦いの開始を告げる鐘が鳴った。

……滅^{ホロレ}の紫のプログライズキーは飛電側で確保したはずなんだけど、Z A I A 側で類似品を新造したのかな。

「オラアッ！」

開始位置から足を動かさなかった滅^{ホロレ}に対して、バルカンが全く躊躇せずに殴りかかった。

だが俺はその先が見えていた。

滅^{ホロレ}が動かないのは、動く必要を感じていないからだ。

相手の行動を見切ってギリギリで回避して、的確に反撃するのが滅^{ホロレ}の基本戦法だ。

……そのはずなんだけど。

何故だか、不破さんの拳は滅^{ホロレ}に当たっていた。

直撃とは言わないまでも、滅^{ホロレ}は不破さんの猛攻を前に少しずつ押されている様子だった。

おかしいな。

決して滅^{ホロレ}の動きが悪い訳じゃないんだけど……どうしてこうなった？

「解説を恵んでください、素敵で聡明なアズ社長！」

「滅^{ホロレ}が相手の動きを学習して先読みをしているのと同じように、不破^{ホロレ}も相手の動きを学習しているからだぞ。でございます」

なるほど。

確かに、学習はヒューマギアの専売特許じゃないんだよな。

不破さんは一見脳筋に見えるけど、頭が悪いわけじゃないし。

滅亡迅雷 net のアジトに行った時にも不破さんは滅^{ホロレ}の戦いを見ているんだから、滅^{ホロレ}のカウンターを想定した戦法を組み立てるこ

とだって出来るんだろう。

金網の内では、バルカンと滅ホロレが泥臭い殴り合いの試合を繰り広げていた。

とにかく攻めまくるバルカンに対して、滅ホロレはカウンターを決めるのが難しいと理解したんだろう。

「どうした！ 滅亡迅雷 net に居た頃のお前は、もつと強かったぞ!!」

「……」

バルカンの煽りに、滅ホロレは何も答えなかった。

今の滅ホロレは、文字通りただの戦闘マシーンとしてしか動けないんだろ
う。

俺の目からは滅ホロレが弱くなったようには全く見えないし、アズの解説を聞く限りだと不破さんが滅ホロレの動きに慣れただけじゃないか？

『Sting dystopia!』

煉

滅

殲

獄

バルカンの一瞬の隙について、滅ホロレが殺人キックを放った。

滅ホロレの右足蹴りを腹部に受けたバルカンは……背中から金網に叩きつけられながらも、滅ホロレの右足を掴んでいた。

「うおりゃあああああっ!!」

滅ホロレの右足を掴んだバルカンは、力任せに滅ホロレをブン回して、地面に叩きつけた。

脳筋の動きだった。

特設リングの床から、細かい破片が碎けて舞い散るのが見えた。

『Bullet shooting blast!』

バ
レ
ツ
ト シューティングブラスト

ダウンした滅ホロヒに対して、不破さんはノータイムで大技を打ち込んだ。

ショットライザーを抜き放って、オオカミを模した4つの弾丸を、超至近距離から滅ホロヒに叩きこんだんだ。

滅ホロヒは回避も受け流しもできずに大技を受けてしまった。

爆炎が、特設リングを埋め尽くした。

そして、爆炎が晴れた時に俺たちが見たものは、拳をあげて勝利を誇っているバルカンの姿だった。

滅ホロヒは、地に伏したまま動かない。

電光掲示板にバルカンが勝者である旨が映し出され、バルカンは堂々とリングから出てきた。

活動停止した滅ホロヒに肩を貸して回収しつつ、バルカンは無事に帰還した。

「その……不破さん？ 身体は大丈夫なんですか……？」

「ああ、一度受けたことがある攻撃だからな。背中側の金網を利用して威力を減退すれば、耐えて反撃できる範囲内だって判断したただだ」

うん。

そんなことが出来るのは不破さんだけだと思うよ。

多分大半の人は、思いついても滅ホロヒの殺人キックを受けようなんて思わないし、実行してもそのまま蹴り殺されると思うんだ。

なんか「バルカンが強い」っていうより「不破さんが強い」って感じだったけど、コンペってコレで大丈夫なのか……？

一応アズに飛電インテリジェンスの株価を見せてもらったけど、微増程度って感じだな。

やっぱりバルカンがZ A I A製だから、投資家たちも飛電株を売
のか買うのか判断に困っているんだろう。

「バルカン。滅^{ホロヒ}を取り戻してくれて、本当にありがとう……！」
「……一度は信じてやるよ。今度人類に牙をむいたら、今度こそブツ
潰す」

車椅子に座ったままの迅が、不破さんに頭を下げていた。

不破さんが回収してきた滅^{ホロヒ}の機体は、本当に大収穫だったと思う。

これで迅の悲願も半分以上達成されたみたいなものだからな。

さすがに今日明日に修理するわけにはいかないけど、副社長を説得
しつつ時期を見て修理する未来は有り得る。

滅^{ホロヒ}の現物を確保できたのはデカい。

俺たちが迅に温かい目を向けているところに……ゆつくりとした
拍手の音が届いた。

その拍手の元へと目をやると、上から下まで白い服で固めた長身の
男の姿が見えた。

Z A I Aエンタープライズ日本支部の社長、天津埜だ。

気持ちの全く籠っていない拍手をしながら、天津は俺たちの近くま
で歩いてきた。

「御見事です。飛電或人社長」

白々しい賛辞だ、と思った。

少なくとも、俺はその表情を笑顔とは呼びたくない。

というか、写真を見た時から思っていたけど、かなり若作りだな。

実年齢は45歳のハズなんだけど、見た目年齢はその半分ぐらいに
見えるぞ。

（不破さん。テロリストだった滅^{ホロヒ}を改造して使ってる天津って、何か
の罪でしょつぴけたりしないの？）

（知らなかったって白^{しろ}を切られるのが目に見える。普通なら有罪ま

で持っていける可能性の方が高いが、天津相手だと後一手足りねえな)

不破さんに耳打ちしてみたけど、ダメらしい。

そもそも滅ホロシの所有権が誰にあるかって話でさ。

飛電インテリジェンスに所有権があることにしてしまおうと、滅ホロシのテロ活動の責任が全部飛電インテリジェンスに被さる危険があるみたいだ。

そして、大つぴらに所有権を主張できる人達が居ない状況と、Z A I Aからの多額の政治献金を併せて考えたら、有罪判決まで辿り着くのは厳しいだろうとのこと。

さらっと飛電インテリジェンスの心配もしてくれる辺り、最初に会った時から比べるとかなり友好的になったな、不破さん。

というか、不破さんの視線が向いた先は、俺でも天津でも無かった。天津の後ろで秘書官のような立ち位置についている、一人の女性に向かっていた。

A I M Sの技術顧問を兼任しているその女性の名前は……刃唯阿。そもそもZ A I Aの人間がA I M Sに出向しているっていう経緯だったので、刃さんがZ A I Aの人間と一緒に居るのはおかしくはない。

「……」

不破さんと刃さんは、お互いに何か言いたいことがありそうだったけど、終始無言だった。

A I M Sと一緒に仕事をしていた二人の関係は、俺にも良く分からないところがあるんだよなあ。

無茶をしがちな不破さんを、刃さんがアシスト兼ストップ役として補佐していたみたいないメージがあるけど。

「天津塚。提案だ。3本勝負の残り2戦をタッグマッチにしねえか？」

「ほう……？ 続けてください」

ここで、不破さんが初めて天津の方を見た。

不破さんの口から出た提案は、俺たちの事前の打ち合わせには無いものだった。

その内容を聞いて、俺も迅も意図が読めずに顔を見合わせてしまった。

どうということなんだ、不破さん？

「既にそっちが1敗してんだ。Z A I A側の大将一人が大立ち回りをすれば挽回できるって考えれば、そっちに得がある提案だろ？」

「言っている事は100%正しいですね。しかし気になる点があります。……そちら側にメリットが、1%ありませんね」

俺もそれは思ってた。

こっち側が中堅戦か大将戦で1勝すれば2本先取できるのに、わざわざリスクを背負う意味って何だ？

「メリットなんて知ったことか。こっちの二人が肩を並べて戦う姿を見たくなっただけだ」

「非合理的判断も、ここまでくると呆れますね。ですが、良いでしょう。飛電或人社長を、自慢の秘書もろとも叩き伏せて差し上げましょう」

不破さんが、不適に笑いながら言い放った。

天津はバカにするように笑って、俺とアズの方を見た。

今の一戦のダメージが入っている不破さんと、車椅子に座っている迅を候補から外して、俺とアズを出場者だと判断したんだろう。

……………と、思うじゃん？

「戦うのは、アズじゃない。僕だ」

ここで、車椅子に座っていた迅が、ひざ掛けを外して立ち上がった。

天津塚が、少しだけ予想外だという顔をしたのが見えた。

何を隠そう、迅の足は完璧に修理が終わっているんだ！（ドヤア！）代表戦が3対3と聞いた時に、これは迅を直すしかないって思っ

たよ。

「というか、こんな非常時じゃないと、迅を修理する許可が福添副社長から降りなかっただろうし。」

「かつて互いの全てを賭けて戦った俺と迅が、肩を並べて戦う日があるんなら早く来るなんてな。」

「迅と最高のタッグが組めるのは、ただ一人！ この俺だ!!」

「ゼロワンドライバーを装備した俺と、フォーライターを装備した迅が並び立った。」

「味方だと、本当に心強い。」

「思わずニヤつとしてしまった。」

「なるほど、大した隠し玉だ。我々と同じく、滅亡迅雷 net の残党の思考プログラムを、人間の配下となるように制御したわけですね」

「僕は、思考プログラムを弄られてはいない。お前なんかを、ゼロワンと一緒にするな」

「天津は……自身ホロレが滅にしたことを思い出して、俺と迅にも当てはめたいんだけど。」

「迅は、天津を睨みながら言い返した。」

「そうだぞ、迅！ もつと言つてやれ！」

「ならば、こちらの最後の駒も隠しておく意味は無さそうですね。彼女こそがZ A I Aの副将……刃唯阿です」

「いつの間にか、刃さんがショットライザーを片手に持っていた。」

「不破さんの持っている変身アイテムと、まったく同一の装備に見える。」

「ええつと……?」

「刃さんって戦える人だったの？」

「なんか、今までそういう印象全く無かったけど??」

「こうして……飛電側の代表として俺と迅が、Z A I A側の代表とし

て天津と刃さんが、それぞれ特設リングにあがった。

国立医電病院の一件からして、天津塚が自分でなるべく動く人間だっていうのは察してたから、天津本人がリングに上がるのは想定内だけだ。

相手の出方が分からないので、初見殺しがかなり怖い。

まさか、俺と迅が揃って瞬殺されるみたいなことになったら大変だ。

それをやらかしたら、本当に飛電の株価が大暴落してしまうので洒落にならない。

「二二変身！二二」

俺が、黄色の仮面ライダーに。仮面ライダーゼロワン ライジング
ホッパー

迅が、黄緑色の仮面ライダーに。仮面ライダー迅 アメイジングヘ
ラクレス

天津塚が、金色の仮面ライダーに。仮面ライダーサウザー

刃さんが、橙色の仮面ライダーに。仮面ライダーバルキリー ラッ
シングチーター

「仮面ライダーサウザー。私の強さは1000%……文字通り、桁違
いだ」

自信満々に、5本角の変身姿を見せつけながら天津塚が言い放つ
た。

それと、刃さんの方は仮面ライダーバルキリーだそうさ。

バルキリーは、バルカンと同じ変身アイテムを使っているだけあつ
て、どこことなくバルカンと似たディテールを持っているように思え
た。

俺と迅は、いつも通りだ。

とりあえず、俺は普段と同じキック主体のスタイルでサウザーに蹴
りかかってみた。

何度か蹴りつけてみた感じとして、素直に蹴り倒されてくれるような甘い相手では無さそうだと思った。

でも、滅^{ホロレ}ほどの見切り上手ではないと感じた。

攻撃が当たるイメージが浮かばない滅^{ホロレ}と比べたら、サウザーに対してはそれなりにクリーンヒットを出せる。

たぶん火力は滅^{ホロレ}と同じか少し上って感じで、耐久力は同程度だと思う。

カタログスペック上ではサウザーの方が速いんだろうけど、滅^{ホロレ}は緩急をつけるのが上手いから、なんか素早く見えるんだよなアイツ……。

なんだか、サウザーは積極的に俺を攻撃する素振りを見せなかった。

何を狙っているんだ？

右手に持った矛のような武器に、何か初見殺しの細工でもあったりするんだろうか？

「……僕たちのアジトのガサ入れの時は捜査する側だったのに、立場が逆転したね。バルキリー」

「私は、最初からZ A I Aの社員だ」

一方の迅と刃さんの方は、膠着状態が続いているみたいだった。

アメイジングヘラクレスのキーで変身した迅は、攻防力に特化した重戦車スタイルだ。

バルキリーは、足の速さを活かしてショットライザーで中距離から戦っているみたいだった。

迅の攻撃は当たらないけど、バルキリーの攻撃も有効打にならないみたいだ。

こういう膠着状態を脱するには……？

俺と迅は、同時に行動を起こした。

ラ 煉
イ 兜 驚

ジ
ン 獄
グ
イ
ン
パ
ク
ト

ベルトに操作を加えた俺たちは、対戦相手を一瞬のうちに入れ替えた。

俺はバルキリーの方へ飛び蹴りをかまし、迅はサウザーの方へ向かった。

それぞれ、大技を叩きこんだ。

「はあっー」

「しまっ……くっ!!」

迅の速度に慣れてしまっていたバルキリーは、俺の渾身の飛び蹴りを受けて爆炎に包まれた。

あの重戦車のアメイジングヘラクレスの動きに慣れている時にライジングホッパーで強襲されたら、まあ厳しいよね。

刃さんは、変身が解けてしまった状態で金網の外へ退避しようとしている。

……迅の方は？

そう思っただけで振り返った俺の耳に、迅の悲鳴が聞こえた。

「ぐ、ああああっ!!」

「アメイジングヘラクレスのテクノロジー、確かに頂きました」

『Jack rise!』

サウザーが装備していた矛を迅のベルトに突きつけて……何かを吸い取っている？

エネルギーかデータを吸い取っていいそうだけど、サウザーの口ぶりに多分データだろう。

大技を回避された迅は、手痛い反撃を受けてしまっているみたいだった。

しかも、データを吸われた時の副次的な作用なのか、迅は動きが極

端に鈍っているみたいだ。

「迅から離れろ！」

俺が駆け寄って放った回し蹴りは、サウザーの側頭部へと直撃した。

にもかかわらず、サウザーは……仰け反る素振りすら見せなかった。

こいつ、さつきより防御力が上がってる!?

まさか、アメイジングヘラクレスのテクノロジーを頂いたっていうのは、特性まで引き継いでいるのか……!?

直感に任せて、俺はサウザーから距離をあけた。

一瞬後にサウザーが振るった拳は、特設リングの金網を紙でも千切るかのように破いた。

腕力までアメイジングヘラクレスの特性をコピーしている……!!

「迅！ 隠し玉その2だ！」

「分かったよ、ゼロワン！」

「今度は何を……。その姿は？」

俺の指示を受けて、迅がおもむろにピンクのプログライズキーを使って変身した。

翼を持った姿へと、仮面ライダー迅は変身を遂げていた。

ゼアの力で新造した、フライングファルコンのプログライズキーだ。

実は迅はパワータイプよりもスピードタイプの方が向いてるんじゃないかって密かに思ってたから、ゼアに頼んで作ってもらったんだ。

翼を広げて飛び上がった迅は、小さい羽をミサイルみたいに飛ばしてサウザーへと雨のような攻撃を繰り返していた。

装甲で受けたり矛で薙ぎ払ったりしているサウザーは、しかし決定打を受ける様子はなかった。

バルキリーが早期に離脱したのは良かったんだけど、このままだと

サウザーを撃破できないな。

攻防力に加えて、それなりの機動力も健在のサウザーを、どうやって突破したら良いんだ。

と思っていたら、金網に空いた穴からアズが銀色の筒を投げ込んできた。

アズのメインメモリだ。

つまり、アサルトホッパーに変身しろということか。

金網ごしにアズと目が合った。

俺は頷く暇も惜しんで、ホッパーキーにメモリをセットして変身しなおした。

「変身！」

『When shine fades, darkness is
with me』

黄色だったゼロワンの装甲が紺色に染まっていった。

でも、アサルトホッパーって読み合いに強くなるだけのフォームだよな。

今の状況でアサルトホッパーに変身してどうするんだ？

多分アズには何か考えがあるんだろうから、それを信じるしかないけどさ。

そう思って、俺はサウザーに蹴りかかろうと思った。

その前の一瞬の間に。

サウザーが、俺の目と鼻の先まで移動して来ていた。

俺は、息が詰まって判断が遅れた。

「待っていましたよ。アサルトホッパーのテクノロジーも、いただきます」

「う、があああああつ!!?」

『Jack rise!』

前身を焼かれるみたいな痛みを受けながら、ようやく俺は何が起こったか理解した。

「サウザーが俺に急接近して、^{ジャックライズ}データを強奪している。

たぶんサウザーは事前に、ラッシンググチーターのテクノロジーもコピーしてあったんだ。

「Z A I A製のプログライズキーなんだから、事前にそれぐらいは出来るに決まってる。」

「今まで高速移動する素振りを見せなかったのは、ここ一番って時に敵の意表を突くための仕込みだったに違いない。」

「やめ、ろ……！」

「無駄な足掻きを……」

身体中の痛みにも耐えながら、俺はサウザーの矛を掴んだ。

「アメijingグヘラクレスの力をコピーしているサウザーの方が腕力は上だろう。」

でも俺は、身体とスペックの限界を超える力を絞り出してサウザーの胸を蹴りつけて、何とか距離をとった。

「このアサルトホッパーはっ、俺とあいつで創ったゼロワンだ！ 暴力秘書が、少しだけ俺を認めてくれた、証なんだ！ お前なんか横取りして良い力じゃねえんだよっ!!」

腹の底から声が出たように思った。

普段から大声を出す時にはダミ声だって言われることはあつたけど、それ以上に濁った声だって自分自身でも分かった。

「ヒューマギアごときに認められたら、何だというのです。そんなものに価値など、1%とて在りはしない」

ムカつくほどに俺やヒューマギアを見下した態度で、サウザーが言い放った。

「迅が空中からサウザーを強襲しようとしているのが見えたけど、勝てるビジョンが浮かばなかった。」

空中から迫る迅を串刺しにしようと、サウザーが矛を構えて……。

「なに!?!」

「くらえ!」

サウザーの矛が、中ほどから小さな爆発を起こして、真つ二つに折れた。

驚きの声をあげたサウザーへと、迅の体当たりが直撃した。

背中から金網に叩きつけられたサウザーは、けたたましい音に包まれながら膝をついた。

「なるほど、ゼロワンの秘書が考えそうなことだね。ジャックライズされるのを前提に、その時にウイルスを相手に流し込む仕込みをしていたんだろう」

「なんだって……?」

よく見ると、膝をついたまま動けないでいるサウザーは、全身に紫色の火花が散ってシステムエラーに苛まれている様子だった。

ということは、アズがメインメモリを投げ渡してくれた時に、既に仕込みは終わっていたのか。

俺がジャックライズを受けることを前提に作戦を立てたってことだな。

力一杯に叫んだ俺の根性は、完璧にから回ったということか。

サウザーが実は高速移動が出来るところまで読み切っていたかどうかは分からないけど、アズの作戦が決まったみたいだ。

「行くぞ、迅!」

「ああ!」

ストームイ

塵

パン

隼

迅

ク

芥

ト

俺は最後の力を振り絞って、サウザーへと渾身の飛び蹴りを放った。

迅も俺に合わせて、まったく同じタイミングでサウザーへと飛び蹴りを食らわせた。

サウザーは動けないなりに矛の残骸を盾にしようとしていたけど、その残骸も原型をとどめないぐらいに壊れてしまって。

特設リングの金網を突き破って場外まで出てしまったサウザーを足蹴にしたまま、俺たちはZ A I A日本支部ビルの付近の地面にサウザーを叩きつけたのだった。

「バカな、この私が負けるなど、1000%有り得ない……!」

地面に出来た特大のクレーターの中央で、変身が解けてポロポロの状態の天津垓を見下ろしながら。

俺も変身が解けて座り込んでから、ようやく事態が収束しそうだという実感が湧いてきた。

たぶん、戦いで解決できることは全部終わったと思う。

あとは……話し合わなくちゃ。

「天津社長は、どうして飛電インテリジェンスにTOBを仕掛けたんだ?」

「……ヒューマギアは、欠陥製品です。道具として使われるだけなら良いが、自我を持ったらアウトでしょう。人類の脅威です」

天津の言っていることは正論だと思った。

自我を持つということは、自分の意思で行動を決定するってことだ。

人間の指示に反して動くようなら、欠陥製品と呼ばれても否定できない。

そんなものを商品として売りさばくのは、決して褒められたこと

じゃない。

そして、ヒューマギアが増えすぎた時のことを天津垓は危険視しているんだろう。

俺一人の頭じゃ、たぶん天津とは話し合いにすらならなかったと思う。

けど、今まで俺に考えを話してくれた人達の存在が、俺に知識のゲタを履かせてくれた。

だから。

俺は、少しでも天津に言い返せるようになっていくはずだ。

第12話：天津垓を説得できるのは、ただ一人！俺だ！

「……ヒューマギアは、欠陥製品です。道具として使われるだけなら良いが、自我を持ったらアウトでしょう。人類の脅威です」

ボロボロの状態で地に伏している天津垓を見下ろしながら、俺は今まで見聞きしたことを思い出していた。

AIMSで不破さんや刃さんに聞いたこと。

敵だった迅と話したこと。

そして、飛電インテリジェンスでアズや福添副社長と意見を交わしたこと。

「天津社長の言う通りだ。ヒューマギアは……『夢のマシン』なんかじゃない。もはや自我を持った一つの種族だ」

「それでは……飛電インテリジェンスは奴隷売買組織では？」

——そもそも、ヒューマギアが自我を持った新種族だという前提に立つなら、飛電インテリジェンスは奴隷売買組織だという認識は持った方が良いでしょう。でいらっしやいます

アズにも同じことを言われたっけ。

不名誉な評価ではあるけど、そこを認めずに先に進むことは出来ない。幸い、もうコンペ用のカメラは回っていないみたいだから、俺も誤魔化し無しで話せる。

魔化し無しで話せる。

「俺の暴力秘書にも同じことを言われたよ。それは認めるしかない」

「或人君は、期待していたよりも張り合いの無い人のようだ。もっと感情的になつて、理屈も言えずに逆上すると思っていました」

天津垓からの俺への評価は、間違っていないと思つた。

そこで逆上するのは、すでにアズを相手にやらかした後なんだ。

あれを一度経験しているから、あの時ほど感情的になつていないと

というのは俺自身も思う。

「一度この世に生み出してしまったヒューマギアを一つの種族として確立させてやるのが、飛電インテリジェンスとしての責任だと俺は思っている」

「しかし、その暁には地上に人類の居場所など存在しえない。君は人類を滅ぼすつもりですか？」

これに近い会話は、福添副社長と一緒にしたような気がするぞ。

けど、その時から一步踏み込んだ答えを出さなきゃいけない場面だ。

一応俺なりに考えていたことがあるんだけど、それが天津垓に通じるかどうか分かんないな。

「俺が倒した迅を殺さずに仲間にしたみたいにさ。ヒューマギアが人間より繁栄しても、人間を殺すとは限らないんじゃないか？」

「地上の支配者となったヒューマギアは、捕まえた人間を利用価値の多寡でしか見ないかもしれないよ。滅ホロヒを便利な道具として改造して使った私のように、ね」

平行線だ。

自分という人間をラーニングしたヒューマギアばかりなら人類は存続できる、と俺は言っている。

自分という人間をラーニングしたヒューマギアばかりなら人類は滅亡する、と天津は言っている。

どちらが正しいかなんて、俺には分かんない。

「人類がヒューマギアの下位互換になってしまう問題を解消するためには、人類の作業能力を1000%にまで引き上げるZ A I Aスペックを私は開発しました。」

君に、人類を滅亡から救う手段が開発できますか？」

自分こそが飛電インテリジェンスの全てを握るに相応しい人間だ、と天津は続けた。

確かにヒューマギアが人類の存続を脅かす存在になった時への回答を、俺がきつちり出せているかと言われたら怪しい。

滅亡迅雷・netとの戦いには勝利したけど、それも他の人やヒューマギアの尽力があつてこそ勝利だったわけだしなあ。

このままのペースでシンギュラリティに達する個体が増え続けたら、人類はヒューマギアの下位互換になってしまうというのも正しい。

「確かに、天津社長は凄い人だと思う。俺にはZ A I A スペックを開発するなんて無理だし、ゼロワンドライバーですら爺ちゃんからの貰い物だ」

Z A I A スペックに加えて、さつき天津塚が使っていたサウザンドライバーも多分この人の発明品だもんな。

開発者としての能力で言ったら、爺ちゃんと同じかそれ以上の人だと思う。

本当に凄い人だ。

俺が色々な人の意見を聞いて知識のゲタを沢山履かせてもらっているのに、言っていること自体は天津社長の方が基本的に正論だしなあ。

でも、俺の方にだって言い分はあるぞ。

「けどき。俺にも最近になって、他人に誇れる特技が見つかったんだ。ヒューマギアと仲良くなることだ」

迅の存在が、少しだけ俺に自信をくれた。

今日だって、もとは滅亡迅雷・netの一員だった迅と手を取り合つて戦うことが出来た。

アズに関してはまだ打ち解けているとは言いがたいけど……大分距離の取り方が分かるようになったと思う。

「そのおかげで、アズに社長の座を譲る日までは俺が飛電の社長をやってみようって、少し前向きに考えられるようになったんだ。だか

ら、飛電の社長の座は渡せない」

「……なるほど。君と迅のタッグに敗れた天津垓は黙って人間とヒューマギアの仲を信じる、という訳ですね。確かに筋は通っていません。残念ながら……1000%、勝利は君達のものようだ」

「そこまで先を読んで発言した訳じゃないんだけど、まあ天津社長が納得してくれたなら良いか！」

「というか、タッグを提案した不破さんも、どこまで想定してたんだろう。」

「不破さんは一応頭は切れる人だけど、人間の情緒に関しての想定力はちよつと別問題な気もするしなあ。」

「そつちも終わったようだな！ こつちも無事に終わったぞ！」

「……なんて俺が思っていたら、ちようどよく不破さんが駆け付けてくれた。」

「戦っていた俺たちがZ A I A日本支部の屋上から飛び降りちやつたから、観戦していた不破さんは追いかけてきてくれたんだろう。」

「と思ったが、不破さんの台詞には聞き逃せないフレーズが混じっていた気がするぞ。」

「不破さんの台詞には、俺たちが戦っている間に不破さんも一仕事終わらせたみたいなのがあるよなあ……？」

「バルカン、そういえば僕たちが戦い始めてからすぐに居なくなつたよね」

「お前たちが戦っている間に、Z A I A日本支部へのガサ入れを済ませてきた！ 滅亡迅雷 netへの資金提供の証拠データもばっちり確保できたぞ！」

「え？」

「不破さん、そんなことしてたの？」

「俺と迅のタッグを見たいって不破さんが言ってくせに、その戦いを見ないでガサ入れに行っていただと……??」

「つていうか迅も気付いていたのか。」

もしかして気付いていなかったのって、俺と天津だけ……？

「……野良犬のように杜撰な狩りですね。令状も無し of 違法捜査によつて得られた情報など、裁判において証拠能力は1%たりとてありません。当然立件など出来ない」

「そんな事は分かつてる。だがこの証拠を公表すれば、3本勝負の敗北が既に放映されたZ A I Aにとっては十分な追い打ちになる。まあその場合、俺は違法捜査の責任で公職を追われるだろうけどな」
ボロボロの天津と不破さんの間で、ピリピリした雰囲気 flowed。
天津は不破さんのことを野良犬と呼んだけど、俺にはそうは思えなかつた。

自滅覚悟で天津に食らいつく不破さんの姿は、犬と呼ぶには獣臭すぎた。

「お前の罪を立件できないのは残念だが、人々の安全のために衛星アークの破壊ができるなら、成果としては悪くねえ。資金提供の情報を公表されたくないや、衛星アークの破壊に協力してもらおう」

「仕方がありません。君達に従いましょう」

自分の身を顧みない不破さんのスタンスに、天津も何か感じ入るものがあつたのかもしれない。

何はともあれ、天津は頷いてくれた。

これで、衛星アークを破壊できる。

ヒューマギアの暴走も無くなるし、本当に滅亡迅雷 net の事件が収束するんだ。

「その前に、滅^{ホロビ}を回収して来て良いかな？」

「あ、ヤバイ。アズの素体も屋上に置いてきたままじゃん……」

「そういえば刃の奴も来てねえな……」

……微妙に締まらない会話を挟む羽目になつたけど、まあ仕方な

い。

Z A I A 日本支部ビルの屋上で冷たくなっているであろうアズたちを回収するために、俺たちは今一度特設リングまで戻ったのだった。

倒れている滅とアズの傍らで無言で缶コーヒーを啜っている刃さんの姿には、謎のシニールさがあった。

なお俺は、復活した暴力秘書に殴られた模様。放置してゴメン……。

『暴虐秘書アズちゃん!』

第12話：天津垓を説得できるのは、ただ一人！俺だ！

Z A I A 日本支部ビルの屋上で、俺たちは天津を詰問していた。

主に気になるのは、衛星アークを盗んだ理由と、その現在地だ。

滅と共に行方不明になっていた衛星アークは、滅亡迅雷 net に命令を出していた危険な存在だからな。止めなくちや。

「そういえばさ。^{ホロシ}滅はともかく、サウザーが衛星アークを盗んだのつて、なんでなの？」

「目的は主に2つです。1つは、私の黒歴史を隠滅するため。もう1つは、衛星アークを完全に破壊するためです」

ん……？

どういうこと？

衛星アークを破壊すれば、天津の悪事の証拠も隠滅できそうだけど？

迅の質問に対する天津の答えは、いまいち理解しづらいものだった。

天津社長は俺の表情から全てを察したらしく、追加で解説をしてくれた。

「12年前、衛星アークに関わるプロジェクトの一員だった私は、打上前の衛星アークに人類史のあらゆるデータをインプットしました。設定改変ポイント。原作と違い、天津は人類史を偏りなく教えたことにさせてください。」

しかし、人類の争いの歴史を学習した衛星アークはデイブレイクを引き起こしました」

「なんだと……!!? いやあ、あの惨劇の元凶は、てめえだったのか!!?」

不破さんが、天津の胸倉を掴んだ。

凄まじい剣幕だった。

とてもじゃないけど、「やめてください」なんて言うって間に入るような隙は無かった。

デイブレイクの時に人生を狂わされた人間の筆頭みたいな感じだもんな、不破さんつて。

「落ち着きなよ、バルカン。少なくともサウザーは衛星アークに嘘を教えたわけじゃないんでしょ？」

人類の歴史を教えたなら、争いの歴史になるのはある程度仕方ないんじゃないかな。それに関しては何かの罪に問えるとは思えないよ」

……不服そうに天津垓を睨みながらも、一応不破さんは天津の胸倉から手を離れた。

迅の言っていることには、筋が通っているように見える。

天津は当時のプロジェクトに正当にかかわる立場にいたみたいだし、不正アクセス系の罪も成立しなさそうだ。

けど、納得できない不破さんの気持ちも分かる気がする。

「罪に問われずとも、衛星アークを悪意の化身として育ててしまったことは、この天津垓の人生において最大の汚点です。

ですから、衛星アークを完全に破壊するために、一時的にZ A I A 日本支部ビルの地下室に確保したわけです」

まるで意味が分からないぞ！

ライダーキックで物理的に粉碎すれば良いじゃん！

どうして物理的に破壊しないんだ。

「どうしてすぐに破壊しないんですか？」

「バックアップの有無を割り出してから破壊しないと、いずれバックアップから復活してしまいますからね。すぐに破壊するのも全くの無駄という訳ではありませんが……」

なるほど。

確かにヒューマギアもバックアップから復活したなんて例はあるわけだし。

アークにもバックアップがあつてもおかしくないな。

だからZ A I A 日本支部ビルの地下に隔離して解析を進めているわけか。

やっぱり技術的な知識がある人の意見って大事だな……。

「じゃあさ。サウザーが滅ホロボにヒューマギアを襲撃させたのは、どうして？」

ああ、そういえばそうだったな。

そもそも今回の騒動は、滅ホロボがテロ活動をしているって目撃情報か

ら俺たちの捜査が始まったんだ。

その滅^{ホロレ}がZ A I A日本支部に帰投していたから、Z A I Aが怪しいって話になったんだよな。

ところが、迅の質問は天津にとって想定外だったみたいだ。

「滅^{ホロレ}が、襲撃……？ 何のことです？」

「てめえ！ この期に及んで、しらばっくれようってんのか!？」

素知らぬといった返答を見せた天津に、不破さんが再び掴みかかろうとした。

まあ今度は俺と迅で止めたけどさ。

アズが間に入って、滅^{ホロレ}によるヒューマギア襲撃事件の資料を天津に見せ始めた。

「私は命じていません。それどころか、昨日実施した動作確認テストの以前は再起動すらしていないはずです。しかし、君達が虚偽のデータを私に見せる理由も無い。となると……」

顎に手をあてて、天津は考え込んでいるみたいだった。

そのまま数十秒の間、天津は動きを見せなかった。

さらに1分ほど時間をおいて、ようやく天津は何か思い至ったみたいだ。

ポケットからスマホより小さいサイズのリモコンのようなものを取り出した天津は、そのリモコンを不破さんに向けた。

天津はリモコンのボタンを押したが、その先に居る不破さんには特に変化があるようには見えなかった。

「……………まさか、亡^{ナキ}が？」

何かが妙だ。

食えない笑顔を固めていたはずの天津が、額に冷や汗を浮かべている。

そのリモコンは何なんだ？

不破さんが反応しなかったら、何がマズいの？

「或人君。確認したいのですが……不破君の脳内のチップに、最近何か操作をしましたか？」

「ええつと？ ああ、そういえば仮面ライダーへの変身用データの他に不審なデータがあったから、飛電インテリジェンスで預かってたと思う」

——変身に全く必要のない不審なプログラムが検出されたぞ。でござる。

会話の流れから察するに、天津が持っているリモコンが、不破さんの脳内にあつた不審なプログラムと関係しているんだろう。

でもそれが、滅ホロヒによるヒューマギア襲撃事件とどんな関係があるっていうんだ？

「1000%事態は急を要します！　すぐに飛電本社に連絡して、そのデータを物理的にネットワークから隔離された場所に移してくださいー！」

「アズ！　よく分かんないけど連絡任せた！」

「さつきは私の存在自体を忘れていたくせに都合が良い社長サマだぞ。でいらつしやいます……」

アズは不満そうな顔をしながらも、耳当てをピコピコ光らせた。

飛電本社は……福添副社長が留守にしている時って、誰を頼れば良いんだっけ？

専務の山下さんが居れば良いんだけど、ネットワークから隔離つていう意味を理解できる人が居ないと困るぞ。

……あれ？　まさか俺以外の社員は全員理解できるとか、そういうレベルの話だったりする？

……なんて思っていた俺たちの耳に、不穏な声と音が届いた。

何か壊される音に、誰かの悲鳴だ。

町中から煙が上がっているのが、Z A I A日本支部ビルの屋上から

は見えた。

俺たちはエレベーター経由で地上1階の出口から退出した。そんな俺たちの目に入ったのは、阿鼻叫喚の図だった。

Z A I A スペックを装備した人々が、正気を失ったような目をしながら通行人に殴り掛かっていた。

「何してるんですか!?! やめてください!?!」

「こいつらを止めるぞ! 手伝え!」

「あと1%、遅かったか……!」

俺や不破さん達で暴徒を取り押さえようとしたけど、暴徒と化した人々は凄い腕力で抵抗した。

結局、天津の指示でZ A I A スペックを奪ったら、暴徒は気を失ったけど……。

一体何が起こっているんだ?

町中から聞こえてくる喧噪を踏まえれば、たぶんZ A I A 日本支部ビルの周囲だけで起こっている騒動じゃないよね。

そして、事態の二元凶は……探すまでもなく、俺たちの近くに現れた。そいつらは、ヒューマギアの二人組だった。

一人は、オレンジ色の作業服を着た男性型ヒューマギア。

もう一人は、ジャケットにパンツルックの中性的なヒューマギア。

「仲間を返してもらった! アーク様とZ A I A の社屋も俺たちが頂^{ナキ}くぜツ! 滅亡迅雷・netの雷様と亡^{ナキ}がなア!」

「……」

オラオラ系、っていうのかな。

ガラが悪そうな男性型ヒューマギアは、自分自身の事を親指で指して「雷」と呼んだ。

とすると、隣の中性的な方が亡^{ナキ}か。

迅の方に視線を向けてみたら、迅は首を横にふってみせた。

残念ながら迅は、この雷と亡^{ナキ}の情報を持っていないみたいだ。

俺たちは、それぞれ変身して滅亡迅雷・netの残党を取り押さえようとした。

でも、できなかつた。

Z A I A スペックを介して操られた人々が、身体を張って俺たちの進行を食い止めたからだ。

操られているだけの人達に大怪我を負わせる訳にはいかない……！

人の盾に手こずっている俺たちを背に、雷と亡^{ナキ}は堂々とZ A I A ビルに入って行ってしまった。

こうして、ようやく追い詰めた衛星アークは、Z A I A 日本支部のビルごと滅亡迅雷・netの手に落ちたのだ……。

第13話：プレジデント・スペシヤルを盛り上げられるのは、ただ一人！ 俺だ！

Z A I A日本支部ビルが、滅亡迅雷・netの残党によって占拠された。

その地下にあった衛星アークも、奴らの手に落ちてしまった訳で。人類強化メガネことZ A I Aスペックを装備した人々に守られて要塞化したビルに近づくのは、容易な事じゃない。

とりあえず俺たちは、飛電本社に戻って状況をまとめることにしたのだった。

「それで、天津社長は亡^{ナキ}について何か知っているみたいだったけど？」
「デイブレイクの時に拾った亡^{ナキ}の機体を改造して、滅亡迅雷・netの動向を探るスパイとして働かせていました時期があります。ですが……」

亡^{ナキ}は情報戦の達人で、今回のZ A I Aスペックを介した大規模洗脳も亡^{ナキ}の作業らしいんだけど。

どうも、亡^{ナキ}が裏切る気配を天津は察して、実害が出る前に亡^{ナキ}を処理したみたいで。

亡^{ナキ}を破壊して、ダメで元々ぐらいの認識で不破さんの脳内チップに亡^{ナキ}のデータを注入したそうさ。

専用リモコンからの信号で不破さんを操れたらよし、少なくとも頭痛を引き起こしてくれるぐらいなら御の字ぐらいのつもりだったんだって。

「てめえ！ 人の頭になんてもんを入れてやがる!!?」

不破さんが、また天津の胸倉を掴んだ。

さすがに今回は俺も不破さんを止めなかった。

これは、ちよつとね……。

殴られても仕方ないと思うんだ。

誰も止める人が居なかったので、天津は不破さんにそのまま殴られた。

天津は殴られた拍子に背中から俺たちの隠しラボの壁に叩きつけられた。

傍に展示してあったヒューマギア素体が倒れて、甲高い音がラボに響いた。不破さんの息巻く音も。

「僕の認識では、飛電とZ A I Aにはそれぞれ内通者が居るってだけは聞いたことがあったよ。名前までは知らなかったけど」

一応、迅も追加情報を提供してくれた。

まあ正直、今言われても意味ない内容だったけど。

飛電に居たスパイが雷で、Z A I Aに居たスパイが亡^{ナキ}だった訳だな。

デカ長パト吉の時に存在が示唆された内通者が、まだ見つかったなかったんだけど、それが雷だったってことだ。

……ここで俺は、嫌な予感を察知した。

アズが、物言いたげな視線を俺に寄越している。

耳当てをチカチカ光らせて、じーつと俺の方を見ている！

「或人しゃちよーは、私に何か言う事があると思うぞ。でございます」

「え？ なんだっけ……？ ごめん、素で分からないや」

さつきZ A I A日本支部ビルの屋上にアズを放置した件については、一発殴られて済んだと思うんだけど。

今の天津と迅の報告から、何かを俺に要求するような流れになるか？

今回ばかりは、本当に心当たりが無いぞ？

「私が内通者だと、或人しゃちよーは疑っていたぞ。であります」

「あつ……。い、いや、そんなことは……」

——そのぐらいの慎重さはあった方が良いでしょう。

——でも、もし本当に私が内通者だったら、お前ごときが疑った程度じゃ尻尾は掴めないぞ。であります。

もしかして、俺が疑ったことを根に持ってらっしやる……？

結果的に内通者は、衛星アークの管理スタッフだった『宇宙野郎雷電』こと滅亡迅雷・netの『雷』だった訳で。

疑惑は濡れ衣だったわけだし、謝った方が良いのかな。

でも、当時は俺が疑いを持ったこと自体にはそんなに腹を立てていなかった気がするんだけどなあ。

どうしよう。

アズ様が御機嫌ナナメだ。

素直に土下座するか……？

今謝れば、正座して石を抱かされるぐらいで許してもらえる気がする。

いや、目標を高く持つんだ、俺！

爺ちやんだって言ってたじゃないか、夢に向かって飛べって！

俺の爆笑ギャグで笑い転がしてやる！

「内通者だアなんて、そんなスパイみってみたいな疑惑はア、ありやアしませんっ！ ハイっ！ 或人じゃーっ、無いとーっ!!」???'「今のはスパイと密偵をかけた、大変面白いギャグになります」

結局正座で石を抱かされた。

それと不破さんは部屋の隅で蹲うずくまっていた。何やってんだろあの人？

『暴虐秘書アズちゃん』

第13話：プレジデント・スペシャルを盛り上げられるのは、ただ一人！ 俺だ！

Z A I A 日本支部ビルが滅亡迅雷 net に占拠されてから2週間が経った。

国中が大パニックの渦中に叩き落された2週間だった。

Z A I A スペックによって操られた人々は、日に日に数を増していった。

既に操られた人々が、新たな被害者を生み出す様子は……なんていうか、ゾンビ映画みたいだった。

俺たち仮面ライダーも奮闘したけど、生身の人間が相手だとキツイ。

不破さんもZ A I A 組も、疲弊しきっていた。

ライフラインの麻痺も深刻化したし、病院に関しては医療崩壊という言葉が町中で囁かれるようになった。

飛電以上にZ A I A の株価が暴落して、どさくさでTOBの話も消滅した。

でも、光明もあつた。

今までヒューマギアが医療行為を行えるのは国立医電病院の中だけに限られていたんだけど、それが全国の病院へと規制緩和されたんだ。

Z A I A スペックの惨劇から7日目にそれらの特別法案が施行さ

れるという、色々な意味で異例の事態だったらしい。

そもそも、ヒューマギアが医療ミスをしたら誰が責任を取るのかという問題があったから、国立医電病院の中でヒューマギアの医療行為が認められているだけでも凄く画期的な話だったらしいんだだけさ。

医療崩壊に直面して少しでも人手が欲しいってことで、行政も規制緩和へと踏み切ったらしい。

なんかアズが偉い人と交渉したらしいけど、詳しい事は俺も分からない。

こうして、何だかんだで人間側の犠牲者の数を抑えつつ、俺たちは反攻の機会をうかがった。

……ところが。

「まずいですね。人類滅亡が200%ほど現実味を帯びてきましたよ……」

飛電インテリジェンスの隠しラボに詰めて、疲れ果てながら作業していた天津垓が、状況を端的に説明してくれた。

天津垓と刃さんが、飛電側のスタッフと協力して、Z A I Aスペック経由の洗脳へ対策を講じてくれていたんだけど……どうも上手くいかないらしい。

遠隔操作でZ A I Aスペックを機能停止させるのが困難なんだとか。

一応、緊急停止プログラムを作成すること自体は不可能ではないものの、それ以上に亡^{ナキ}による対抗プログラムの構築が速すぎて意味が無^{ナキ}いんだってさ。

「ただだけ優秀なんだよ、亡^{ナキ}って……」。

「ヒューマギア1体で、そこまで出来るものなんですか？」

「Z A I A社屋にあった他のコンピュータや衛星アーキの演算能力を併用しているはずだ……」

答えてくれた刃さんも、疲労が色濃く見えた。

目の下の隈がヤバイ。

しかも、更に聞いてみると、滅亡迅雷 net 側からのハッキングまで仕掛けられているらしい。

こつちも衛星ゼアの演算能力をフルに使って、飛電側のシステムへの侵入は防いでいるみたいだけど、それもいつまでもつのか……。

「私の存在意義って何なんだろう……。

なんで私はこんなことをしているんだろう……。

満を持して変身した割に活躍していないし……。

最初は不破とバディ役だったはずなのに、どうして独身45歳とニコイチみたいになっているんだ……。

私のアイデンティティって、いったい……。」刃唯阿の存在意義について悩む井桁氏に悲しい過去……？

「電波発言やめてください！ どうして分かってくれないんだ！ 刃さんは悪くない!!」

よく見たら目の焦点が合っていない！ スゲーイ！ ヤベーイ!!
机の端に栄養ドリンクの瓶が積み上げられている……!」

まあ栄養ドリンクに関しては天津さんや他のスタッフも似たようなもんだけど。

Z A I A ゾンビ (仮) 発生から今日で2週間だからな。 ▪

「或人君もZ A I A ドリンクを飲みましょう。Z A I A ドリンクを飲めば私たちの体力は1000%だ……!」

「どうして過労死寸前になるまで放っておいたんだ……!」

着色料保存料カフェインあたりも1000%入ってるヤツだろそれ!
れ!

さつき別のスタッフがそれぞれ飲んでたけど、目が逝ってたぞ。

一気飲みしながら目をラリラリさせて「ふわアー！ イキてるって感じいいツー!」とか呟いてたからね、そのスタッフ!

飛電の自販機に定期的に降ろしてもらってるオロナミンCがあるから、そつちを使ってくれ。

着色料保存料カフェイン0だから安心して飲んでほしい。露骨な
スポンサー商品age

非常時だし無償提供ぐらいするからさ……。

「或人君！ 1階ロビーに暴徒が集まってる！」

「対応します！」

福添副社長の報告で、俺はゼロワンドライバーを片手にロビーまで
降りた。

飛電本社の1階ロビーには、Z A I Aスペックによつて操られた人
達が押し寄せていた。

B級ゾンビ映画感が酷い。

とにかく、Z A I Aスペックを外して無力化しないと。

「変身！」

俺は、プログライズキーをドライバーにかぎして変身した。

……変身しようと、した。

でも、できなかつた。

ライジングホッパーのキーが、いつもみたいに展開しなかつたん
だ。

「え？ あれ……？」

もう一度プログライズキーをゼロワンドライバーに近づけてみた
けど、やっぱりダメだった。

いつもだったら、使用者認証をクリアしてプログライズキーが開く
はずなのに。

まさか、連戦のせいで不具合がおきたか？

Z A I Aスペックの惨劇が起きてから2週間、俺も戦いつぱなし
だったからなあ。

どうしたら良い？

ロビーの入場ゲート付近では、警備員ヒューマギアたちが暴徒の侵

入を食い止めているけど、それも長くはもたないだろう。

とにかくラボに居る仮面ライダーの誰かに来てもらわなくちゃ。

不破さんは外に遊撃に行っているはずだから、迅を呼ぶのが良いかな。

内線で連絡をとるために電話を探そうとした俺は……近くに来ていた1体のヒューマギアの存在に気づかなかった。

俺が気付いた時には、既にゼロワンドライバーとプログライズキーは、ひったくられた後だった。

不良秘書が、ベルトとキーをその手に確保していた。

「アズ……?」

「変身」

『A jump to the sky turns to a rider kick』

目の前で起こったことに、俺は理解が遅れた。

アズがゼロワンに変身した……たった、それだけのことだった。

どうして、という一言すら俺の喉からは出てこなかった。

ただ思考を止めてしまつて、俺は何が起こったのか理解できなかつた。

ゼロワンに変身できるのは、飛電インテリジェンスの社長ただ一人。俺だけのはずだ。

それなのに、入場ゲートの向こう側で……黄色の残光を見せながら手刀を織り交せて立ち回っているのは、確かに『ゼロワン』だった。

そのあとは、トントン拍子で話が進んだ。

福添副社長と山下専務からの事後説明に、俺の感情は追いつけなかった。

「私達も今日初めて聞かされて、ビックリしているんだけどね。まさかこんなことになるなんて……」

どうやらアズは、全国の病院にヒューマギアが導入されてから1週

間が経過したこの非常事態下で、一斉ストライキを盾に行政へと要求を突き付けたらしい。

要求の内容は、主に2つ。

1つ目は、ひとまず来凶地区限定での、ヒューマギアの各種権利の獲得。

そして2つ目は……超法規的措置として、飛電インテリジェンスに関わる全利権およびヒューマギア特許権をアズが得ることだった。

明らかに色々なステップを飛び越している要求だけど、全国の病院のヒューマギア達が一斉ストライキを起こしたら、どれだけの犠牲者が出るか分かったものじゃない。

本日、行政は限定的とはいえヒューマギアの権利を認めるに至ったそう。

ストライキが実現するより前に行政側が折れたので、ストライキによる直接的な犠牲者は出ていないらしい。

一応、形式的には俺の持つ複数の財産や権利を国が買い取ってからアズに移譲するという体裁なので、俺の口座には補填金が払い込まれているとか。

「或人君にとっても、急な話だっただろう。しかし、これで良かったのかもしれない。いくら先代の孫だからとはいえ、そもそも或人君が命がけで戦うのもおかしな話だったからね」

急な話だと口にした福添副社長の言いたい事は分かる。

実際、前々からアズの考えを聞いていた俺でも、事態の急変に置いていかれてしまっていた。

雷と亡^{ナキ}によるテロがまだ収束していないから、物事の途中で放り出されたという感覚が強いのもかもしれない。

——私は、目的のために得だと思ったから或人しやちよーに協力しているんだぞ。

改めて振り返ってみると、むしろ俺は福添副社長と違って、覚悟を決める時間を用意されていた人間だったんだろう。

アズの計画だつて知っていたし、いつか社長の座を譲つて俺が会社を去ることになるつて聞かされていた。

それなのに、俺は……心のどこかで、今の状況がずっと続くと思つてしまつていたんだ。何の根拠も無しに。

「今まで本当にありがとう、或人君。先代に代わつて、心から感謝するよ。もちろん、私自身からもだ」

別れ際に、福添副社長が深々と頭を下げた。

気持ちがかもつている、と感じた。

心から俺に感謝していると思わせる姿だった。

山下専務も同様だ。

「俺も……今まで本当にありがとうございました」

今までの事を思い出してみれば、福添副社長たちには本当にお世話になつた。

だから俺も、福添さんみたいにビシつと決まっていなくてもいいかもしれないけど、俺自身の気持ちを込めて頭を下げた。

俺が途中降板するという点に関しては、心残りが無いと言えれば嘘になる。

けど、あのズル賢いアズが社長になつて、一時的とはいえZ A I A やA I M Sの人達も飛電の味方についているんだから、俺抜きでも多分大丈夫だろう。

こうして……半年にも満たない俺の社長生活の幕は、あまりにも呆気なく降りたのだった。

とりあえず帰宅するか。

そういえば代表戦以来、一回も帰宅してなかったっけ。

ずっと会社の仮眠室に寝泊まりして、昼も夜も関係なしにスクランブル生活だったからな。

……と思つてから、ふと気づいた。

俺が部屋を借りてるアパートって、Z A I A日本支部ビルの近くだったな。

Z A I Aゾンビ（仮）が大量にうろついている危険地域のアパートに帰宅できるとは思えない……！

今からでも福添副社長に頭を下げて、事態収束までの間だけでも飛電インテリジェンスの仮眠室か社宅を使わせてもらうか……？

「行くところが無いなら、僕たちのアジトにでも来る？」

「悪いけどそうさせてもら……ん？」

あれ？

俺って一人で歩いてなかったっけ？

そう思いながら振り返ると、迅がついてきていた。

右足は既に修理済みだから、車椅子姿じゃなくて普通に歩いてついできたみたいだ。

俺が飛電インテリジェンスを出てから、ずっと後ろを歩いてきていたのか？

「天津さんたちを手伝わなくて良いのか？」

「そっちの方が正しいと僕も思うよ。でも、『正しい結論』じゃない選択をするのも、意思を持つ僕たちの特権だ。それでしょ？」

——自分自身の意思があるなら、『正しい結論』とは別の選択をすることだって出来るはずなんだ!!

そういえば、俺が言ったことあったなソレ。

刃さんたちの徹夜が増えるんだろうなあ、なんて思いつつ。

俺たちはダイブレイクタウン奥地の滅亡迅雷 netの元アジトへと向かったのだった。

で、滅亡迅雷・netの元アジトへと俺たちはやってきた。

実は結構飛電本社から近いんだよな。

たぶん、直線距離で言ったら3キロ前後だと思う。

デイベレイクタウンに住む野生動物がたまに飛電本社の近くまで迷い込んでくる程度には近場だ。

警備員が野生動物を追い払っている現場を見たことがある。

薄暗い室内は、少し湿気を感じるものの、居心地が悪いというほどでも無かった。

元は実験都市として人間も暮らすのを想定されていたため、最低限の毛布とかはあるみたいだ。

食料品はさすがに買い足さないとダメだけど。

「ゼロワンはさ……」

「俺は、もうゼロワンじゃないんだ」

いつもみたいに俺のことをゼロワンと呼んできた迅の声へ、俺は言葉を挟んだ。

なんだか、今の俺をゼロワンと呼ばれるのは嫌な気がした。

既に俺がゼロワンの変身権を失ったという事実を、否応なしに突きつけられる気がしたから。

「……或人は、飛電インテリジェンスを離れることについて、どう思っているの？ この後、どうしたい？」

迅の質問に、俺は答えられなかった。

俺自身、自分の気持ちに整理がついていないと理解できていた。

「長くなっても構わないよ。順を追っても良い」
そうだな。

日記は、自分の思考や感情を整理するために役立つって聞いたことがある。

迅が促してくれるままに、俺は喋り始めた。

俺の社長として歩んだ特別な思い出を。

—— 或人、将来の夢はあるか？

—— お父さんを、心から笑わせること！

幼少期の俺は、1体のヒューマギアを父さんと呼んで育ったんだ。

父さんは俺に笑顔を見せてくれることも多かった。

でも俺はそれを本当の笑顔じゃないと思っていた。

いつか父さんを心から笑わせること……それが、いつしか俺の夢になっっていたんだ。

—— 人の夢ってのはなあ、検索すれば分かるような、そんな単純なモノじゃねえんだよ！！

—— ゼロワンとして戦ってくれたら、お前の芸人活動の手伝いもしてやるぞ。でございます。

俺がクビになった遊園地で、忘れもしない例の不良秘書と初めて会ったんだ。

支配人の夢を嘲笑うマギアに腹が立ったのも本当だけど、アズの口車にのってゼロワンを始めたというのも正直なところだった。

ゼロワンとして戦うことが、誰かを笑顔にすることだって思った。

ピン芸人として全く成果を出せなかった俺は、ゼロワンとして戦う方が自分に向いているのかもしれないとも思った。

「なんだか……その2つって、ちょっと違うんじゃないかな？ 0を

1にするのと、マイナスを0にするのの違いみたいな……」

「言われてみると、そうかもしれない。でも、そのころの俺は自分の夢の形が歪だっただけのことすら気付いていなかったんだ」

迅に言われてみて初めて気づいたけど、そう言われればそうだ。

芸人として他人を笑顔にするのは、0を1にする……幸せじゃない

人を幸せにすることだ。

一方、ゼロワンとしての戦いは、マイナスを0にすることは出来ても、幸せじゃない人を幸せにすることは出来ない。

ゼロワンの仕事は、誰かを笑顔にするんじゃないやなくて、不幸の種を取り除くことだったんだ。

なんていうか、ヒーローの仕事って、食事における辛味みたいなものなのかも。

辛味は、料理の不味さを緩和する効果はあるし、美味しいものをもっと美味しくすることだって有り得る。

けど辛味には、美味くないものを美味しくする効果は無いんだ。

まあ、ヒューマギアである迅に対して食事の例えを話すのもどうかと思ったので、これは俺の胸の内に留めておくけどさ。

——違う！俺はヒューマギアを見下してなんていない！ どうして分かってくれないんだ!!

——ヒューマギアに情熱なんてある訳がない、という言い草が何よりの証拠だぞ。でございます。

ゼロワンになった後も、順風満帆だったわけじゃない。

ヒューマギアへの偏見から、衝突してしまったことだってあった。

……それに関しては、すぐに暴力をふるうアズの方にも半分ぐらい問題はあったと思うけどな！

「偏見と言われると、人間もヒューマギアも大して変わらないのかもしれないね」

「会ったばかりの時の迅は、色々極端だったなあ。まあ滅亡迅雷・netから得られた知識なら、そうなるもの無理はないけど。」

——ヒューマギアが笑えるのは、人間が絶滅した時だけだ!!

あの時は、迅を説得できて本当によかった。

もちろん戦いに勝てたからっていう前提はあるんだけどさ。

俺は感情と勢いに任せて発言した気がするし、説得失敗する可能性

も割とあつたかもしれない。

というか、俺があんまり筋道を立てて考えていないから、天津社長みたいに頭がいい人から見たら多分穴だらけの理屈だったんだろうなあ。

「そういうえば聞いてなかったけど、あの直前に言ってた『テストで1点』っていうのは何だったの?」

「ああ、それはな……」

——心は何なのか、自我を持ったヒューマギアと人間をどう区別しているか、全然分かんないんだ!

——でも、俺がどんなにバカでも、考え続けてみせる!。それが、今の俺に出せる……ただ1つの、答えだ!

心の定義を求められて、俺は答えられなかったんだ。

今思い返しても、これは回答にはなっていないよなあ……。

でも、先代社長じいちゃんよりマシンな回答だからって言って、オマケで1点くれたんだよアイツ。

その後はアズのメインメモリを借りて、アサルトホッパーに変身して迅と戦ったんだ。

あの時は嬉しかったな。

なんだか、少しだけ自分が認められたような気がしてさ。

「心か……。結局、心の定義って何なの?」

「正直それは今でも分からない。けど、それが分からない俺が、父さんに心が無いって決めつけるのはおかしいっていうのは分かったんだ」

——俺は……ヒューマギアだった父さんに、酷い事を言ってしまったんだ

今振り返っても、後悔ばかりだ。

父さんに心が無いって決めつけていたのが、俺の歪な夢の原点だった訳で。

その不自然さに気づいてから、俺という人間の根底が揺らぎ始めた気がする。

ヒューマギアだった父さんは日常的に笑顔を見せていたんだから、最初から俺の夢は叶っていたのかもしれない、って思うようになったんだ。

その頃からだったかな。

段々と、芸人として成功したいっていうモチベーションが下がっていったんだ。

「何か変じゃない？ 芸人として成功するサポートを受ける代わりに、ゼロワンとしての仕事を引き受けたんだよね？」

それなのに、芸人を目指さなくなった後もゼロワンとしての仕事を続けたの？」

「そういえば、なんでだろう……」

迅は、本当に俺の話のおかしなところを的確に指摘してくるなあ。確かにそうなんだよな。

芸人として再起するモチベーションが無くなった時点で、俺がゼロワンとして働き続ける理由も無くなったはずなんだ。

なのに、俺はゼロワンとしての仕事を続けてしまった。

惰性、ってやつなのかなあ……。

それでも、俺がゼロワンを続けたかった理由ってやつがあるとしたら、それは。

「或人……泣いているの？」

俺の存在を認めてくれた飛電インテリジェンスやAIMSの仲間たちと、もっと一緒に居たかったからかもしれない。

もう、叶わない願いだけ。

第14話：ワズを助けられるのは、ただ一人！ 俺だ！

結局、俺の話を一通り聞き終えた迅は飛電本社へと戻っていった。今は非常時だし、あんまり俺の方に構いきりなのもマズいだろうしな。

滅亡迅雷・netの元アジトに、俺は一人で残された。

俺は、何をしたらいいのか分からなかった。

何をしたいのかも分からなかった。

何が出来たのかも分からなかった。

迷えば迷うほど、飛電の社長をやっていたころの俺は幸せだったんだなって思えてきた。

それに比べて、今の俺には……ビツクリするぐらいに、何も無かった。

芸人として再起するモチベーションも、ゼロワンの変身権も、何も俺は持っていない。

「こんにちは、或人君。私はワズ・ナゾートクと申します。見ての通り、探偵です」

……うん？

どこから紛れ込んだの、この旧型ヒューマギア……？

ページュのコートに烏打帽と丸眼鏡を装備した男性型のヒューマギアが、俺の間借りしている滅亡迅雷・netの旧アジトに姿を現した！

いかにも探偵っぽい恰好をしているし、そう本人も自称している。耳当てが旧世代型ヒューマギアのものだから、かなり古い機体みたいだ。

……父さんと、一緒だ。

『暴虐秘書アズちゃん!』

第14話：ワズを助けられるのは、ただ一人！ 俺だ！

ワズと名乗った旧型ヒューマギアは、爺ちゃんの部下だったらしい。

飛電インテリジェンスや俺に危機が訪れたときに、手助けをするように言われていたんだってさ。

普段は探偵業をしているそうさ。

「飛電がアズの奴に乗っ取られたのがピンチだって判断して、俺の手助けに来たってこと？」

「その件も無関係ではないのですが……私が気になっているのは、滅亡迅雷・netのZ A I Aビル占拠事件の方です」

ああ、そっちなか。

まあ情勢的にもそうだよな。

日に日に数を増しているZ A I Aゾンビは、まさしく「国難」って感じだし。

警察や自衛隊も出動してるけど、天津社長の言う通りこのまま人類が減びる危険性も割とあるんだよな。

「でも、それなら大丈夫だよ。俺の代わりにゼロワンになる奴は居る

し、いざとなつたら仮面ライダー全員で一斉に出撃すれば何とかなると思うんだ」

サウザー。

バルキリー。

バルカン。

迅。

そして……ゼロワン。

あの5人で一斉に出撃すれば、負ける未来図は見えないんだよね。

「私もそう思います。だからこそ、不可解な点が浮き彫りになってくるのです」

「どういうこと？」

探偵っぽい口ぶりだ。

勿体つけているのも、どこか様になっているように思えた。

旧型なのに今日まで単独で動き続けていたってことは、かなり優秀な奴なんだろうし、探偵としても有能なんだろう。

「人の盾を使った戦法は、確かに脅威です。

しかし、人類側は本当に追い詰められたら、人の盾を無視して滅亡迅雷・netを叩くことが出来てしまう。

滅亡迅雷・net側は、それを理解していながら行動を起こしたように見えませんか？」

確かに、妙だ。

たぶん雷イカズチと亡ナキは変身して戦えるだろうけど、さすがにサウザー達5人を相手に出来るとは思い難い。

その程度のこととは、滅亡迅雷・net側も分かっているだろう。そうになると、あいつらの狙いは何だ……？

「あいつら、何か隠し玉があるのか？ でも、何が起こるんだ？」

「滅亡迅雷・net側の戦力が補強される要素といえば……アーク本人が戦えるようになるのかもしれませんが」

私の直感ですが、なんてワズは続けた。

直感というのはロボットらしからぬ言い方だ、と俺は密かに思った。

そして、ここまで聞いて俺は一つだけ不審に思う点を見つけていた。

「それを、飛電の現社長の方じゃなくて俺に教えに来たのは……なんですか？」

「その情報を教えても、飛電連合でやることは変わりませんからね。被害を最小限に抑えつつ、EMP兵器の使用許可を待つだけでしようし」

EMP兵器というのは、飛電に居た時にチラつと聞いたことあるな。

電磁波を使った爆弾みたいなもので、それをZ A I A日本支部ビルに打ち込むことで、一時的に電波障害を引き起こすことが出来るんだとか。

さすがに明らかに戦術兵器なので、日本国内で使うための承認を得るのが大変だつて天津さんから聞いたつげ。

というか、兵器の使用承認よりも、ヒューマギアの人権獲得の方が明らかにハードルが高いと思うんだけど、アズは本当によく押し通したな……。

「でも、それだけじゃないよね。その情報を俺に渡すことで、ワズは俺に何かを期待している」

「……そこまで察していただけるようでしたら、出し惜しみは半分にしませう」

そういつてワズは、どこからともなく真つ黒な箱を取り出した。

暗証番号を打ち込むためと思しきコンソールが付いた、人の頭と同じぐらいのサイズの黒箱だった。

たぶん、そのコンソールに暗証番号を打ち込んで中身を取り出すんだろうけど。

よく見たら、ボタンの近くにヒントも書いてあるな。
なになに？ 5種類の文字で出来た8桁のキーワードを入力しろ
？

「この暗号を解いて、中身を手に入れろってことか」
「いいえ。パスワードも中身も、既に推理は終わっています。答えを
教えても構いません」

「ええ……??」

探偵ですから、なんてワズは得意げに言い放った。
俺は困惑した。

答えも中身も分かっているのに、開けていないの？

まさか玉手箱的なトラップが仕掛けられているとかじゃないよな
？

「私が問いたいのは、或人君の意思です。今の君には、戦う理由が本当
にありますか？」

ワズの質問は、まさに俺が直面している問題だった。

今の俺が、どんな理由があつたら飛電やZ A I Aの皆と一緒に肩を
並べて戦える？

あの暴力秘書は……もう、俺を必要とする理由を持っていない。

飛電インテリジェンスの社長になるために俺と手を組んでいたア
ズは、既に飛電の社長になってしまったんだから。

「……」

「その元の持ち主の遺志を伝えることは出来ます。しかし、出来る
ことならば、誰の後継者でもない或人君自身の意思で選んで欲しい。
それが、私の思いです」

誰の後継者でもない、というのは妙に気になるフレーズだった。

確かに新社長に就任したばかりの頃の俺は、飛電是之助の後継者で
しかなかったのかもしれない。

でも、爺ちゃんにはヒューマギアを労働力の代替としか見ていなかった

たのに対して、俺は既に別のスタンスを確立している。

ヒューマギアは意思を持った新種族だって、俺は思うんだ。

たった今ワズが言った「私の思い」という言葉を聞いて、やっぱりヒューマギアには意思があるんだって感じたしな。

「それを渡してもらおうぜ。カミナリ落とされたくなけりやアな！」

「お前は……雷！」

でも、俺に残された時間はあまりに短かった。

いつの間にか、オレンジの作業服を着た1体のヒューマギアが部屋の入口に立っていた。

滅亡迅雷・netの、雷だ。

Z A I A 日本支部ビルを占拠しているハズの雷が、そこを抜け出して来ているってことは、この黒箱の中身は余程重要なものなんだろうな。

とはいえ、ワズの口ぶりから考えたら、滅亡迅雷・netから盗んできたとかでは無さそうだけど。

「お久しぶりですね、雷電君……」

ワズと雷は知り合いだったのか？

雷電っていう名前は、たぶん滅亡迅雷・netの一員としてじゃなくて、飛電のヒューマギアとしての名前なんだろう。

そういえば、耳当ての形を見たら、雷も旧世代型ヒューマギアだな。

ともにダイブレイク以前から稼働している訳だし、どこかで会っていても不思議じゃないのか。

「率直に言って、私は君を尊敬していました。

後続のヒューマギアを弟と呼び、愛情を以て接し、時に厳しく指導する姿に……共感しロマンすら感じていました」

ワズの言葉を聞いている最中、俺のライズフォンが震えた。

チラつと通知画面を見ると、ワズからのメッセージが入っていた。いわく、隙を見て逃げて欲しいということだった。

イカズチ雷から一瞬たりとも目を離さずにメールの送信が出来たりするのは、さすがヒューマギアって感じた。

「昴君だつて悲しんでいるはずですよ！　今ならまだ、取り返しがつきますよー！」

「うるせエ！　俺はもう、あいつの兄貴なんかじゃねエツ！」

イカズチ雷が、ワズにヤクザキックを叩きこんだ。

ワズは腕をあげて防御したようだったが、地面に転がされてしまっていた。

「それに貴方とて、その箱の中身を残した者の気持ちを知っているはずですよ！　アークの手に渡すなど有り得ない！」

「うるせエって言ってるだろツ！　アーク様の意思は絶対だツ!!」

イカズチ雷の大声は、怒りの感情を何よりも体現していた。

空気がビリビリ震えて、俺は思わず後ずさってしまっていた。

ここまで純粹な感情の発露ができるのは人間でも珍しいと思ってしまうぐらいだった。

起き上がったワズへと、イカズチ雷が掴みかかった。

一瞬だけ、ワズと目が合った気がした。

逃げろって言いたいんだろう、と分かった。

——今の君には、戦う理由が本当にありますか？
ワズの言い回しから、箱の中身は俺が予想している物に近いんだろう。

それなのに……ワズは一度も、「それを使って自分を助けてくれ」とは言わなかった。

そう言わなかった理由は、今までのワズとの会話からだけでも十分に推測できた。

さっきのメールに箱を開けるためのパスワードを書かなかつたの

も、同じ理由だろう。

俺にそれを頼んでしまったら、俺が無理をしても必ず応えてしま
うって分かっていたからだ。

それに加えて、後継者がどうのつていう話を踏まえたなら、これの本
来の持ち主として考えられるのは2人しか居ない。

爺ちゃんか、もう一人か。

でも、俺にゼロワンドライバーを残してくれた爺ちゃんの方では無
い気がした。

俺は、5種類の文字から成る8桁のパスワードを、箱のコンソール
に打ち込んだ。

『19970501』

やっぱり、だ。

箱のパスワードは……俺の誕生日だった。

箱を開けてみると、中身も予想通りだ。

「12年分の誕生日プレゼントってことかよ……父さん」

俺は、箱から取り出したドライバーを迷わず腰に巻いた。

赤と銀で彩られたドライバーは、配色こそ違うものの迅たちの
フォースライザーに近い構造のようだった。

なら、使い方も大体同じだろう。

箱の中と一緒に入っていた深藍色のプログライズキーをセットし
て、俺は右手側のレバーを一思いに引いた。

「変身っ!!」

『Cyclone rise! Rockinghopper! T
ype1!』

俺を中心に風が渦巻いた。

瞬く間に、プログライズキーと同じ深藍色の装甲が形成された。

黒地が基調なのはゼロワンと変わらないけど、全体的にゼロワンよ
り装甲が厚めだと思った。

たぶん、ゼロワンと比べたらスピードを少し落とした代わりに攻防

力を上げた感じなんだろう。

箱の中に刻んであった文字によると、この姿の名前は『仮面ライダー1型』だそうだ。

「殺してでも、そいつはアーク様の下へ持ち帰らせてもらうぜツ！
変身！」

『Break down』

一方、ワズをボコボコにしていた雷も俺を見て瞬時の変身を選択した。

フォースライザーで変身した雷の姿は、深い赤のボディに鳥の意匠を交えたものだった。

「うおりやあつ!!」

踏み出したのは、二人同時だった。

同じように右拳を振るって、突撃した。

拳同士でぶつかると思った。

雷だって、同じように思っただろう。

「ぐあッ!」

「これは……!?!」

俺の右拳は、先に雷の顔面に突き刺さっていた。

1型のスピードは、ほぼゼロワンと変わらないみたいだ。

にもかかわらず、攻撃力は若干ゼロワンより高いぞ多分!

「アーク様の意思のままにツ!!」

「お前を止められるのは、ただ一人! 俺だつ!!」

雷が、双剣を構えて切りかかってきた。

俺は、身のこなしの速さに任せて斬撃を回避しながら、回し蹴りで剣を弾き落した。

さらに、雷に立て直す暇を与えずに、もう1本の剣も蹴り落した。そのまま俺はキックの連打で一気に畳みかけようとした。

「なめるんじやねエツ！」

「があっ!!？」

俺のキックを何度も受けながらも、イカズチ雷は反撃の一手を打ってきた。掌からの放電攻撃によつて反撃してきたんだ。

たまらずに、俺は仰け反つてイカズチ雷との距離を開けてしまっていた。

でもイカズチ雷の方もダメージが溜まっているみたいで、追撃は来なかった。

息を整えて、睨みあう数秒が妙に長く感じた。

先に動いたのは、イカズチ雷の方だった。

「消し炭にしてやるぜツ！」・

『Zetsumetsu utopia!』

塵

雷

剛

芥

イカズチ雷が両掌を突き出して、広範囲に放電攻撃を撒き散らした。

とつさに俺は、落ちていたイカズチ雷の剣を蹴りつけて、放電攻撃を誘導してやった。

そして、放電攻撃が逸れた瞬間には、動き出していた。

『Rocking spark!』

ベルト操作に伴う音声が鳴り終わるよりも早く。

俺は深藍色の残光を置き去りにして高速移動を始めていた。

イカズチ雷は、まったく俺の動きに対応出来ていなかった。

地面に叩き落してあった剣の1本を拾った俺は、狭い部屋の中で跳び回りながら、最後に壁を足場にジャンプしてイカズチ雷へと切りかかった。

ロッキング

スパーク

雷が腕からの範囲放電攻撃で俺を牽制しようとしたようだが、それよりも早く俺は雷の真横を通り過ぎた。

そして、すれ違い際に借り物の剣による一閃を雷の胴へとお見舞していた。

さすがに胴を両断するほどの威力は出せなかったが、カウンター攻撃を繰り出す暇もなく、バチバチと音を立てながら雷は膝をついた。

「……こんなところで、くたばつてたまるかよオ!!」

それでも最後に雷は両腕からの大威力の放電をかました。

天井へと向けて放たれた放電攻撃は、天井を崩すには十分すぎる破壊力を持っていて。

とつさにワズを庇った俺は、雷の逃亡を許してしまったのだった……。

「或人君、戦う理由は見つかりましたか？」

天井が崩れて大分風通しが良くなったアジトで、ワズが再び同じ質問をしてきた。

でも、今度は俺の方の心持ちが違った。

その質問に答える用意が、既に出来ていたんだ。

「俺は、あんまり難しく考えない方が良いんだって思ったよ。助けたいと思つたから助けた。それで十分だ」

さつきワズが襲われている時に俺が思ったのは、そんなに複雑な事じゃなかった。

ただ、単純に助けたいって思っただけだった。

たぶん、俺が戦う理由ってそれで十分なんだ。

俺は、アズたちと一緒に戦う理由をワズにどうやって説明しようか

悩んでいたけど、それがそもそも間違いだった。

一緒に戦いたいから……あいつを助けたいから、つていうだけでも十分だったんだ。

「或人君なりの答えが用意できているようでしたら、私から言う事はもうありません。お達者で、或人君」

「色々ありがとう、ワズ！ またな！」

ごきげんようー、なんてハンカチを振って、独特の小走りワズは去っていった。

なんだあの走り方。

なんかヒヨコみたいな走り方だったな。

ま、俺の方も悩みが吹っ切れたから良しとするか。

刃さん達が過労死する前に合流しなくちや。

「あれ？ そういえば弟がいる雷イカズチに共感してたって言ってたけど、ワズにも弟か妹でも居るのかなあ……？」

滅亡迅雷 net の元アジトを後にしつつ、ふと俺が思ったのは、ほんの小さなとっかかりだった。

今生の別れって訳でも無いだろうし、ワズに今度会ったときにでも聞けば良いか。

その時に紹介してもらうのを、楽しみにしておこう。

なんか素直で真面目な愛されキャラが出てくる予感がする！ 心が躍るなあ！

第15話：私が村八分にされているなど、1000%ありえない……！

率直に言つて、或人君が飛電インテリジエンスを追われることになるなどは、1%たりとも予測していませんでした。

それを為せるとすれば私だけだ、と思つていたというのもあります。

しかし、それだけではありません。

よりによつて或人君の秘書がそんなことをするとは……。

それにアズの新社長就任挨拶にも、気になる点がありました。

——かつてヒューマギアは、人間を笑顔にするためだけの存在だったぞ。でいらつしやいます。

——そしてこの十数年の間に、ヒューマギアを笑顔にしてくれようとする人間も現れたぞ。私たちはその人間への感謝を忘れてはいけなぞ。でございます。

——この革新の先にあるものは、ヒューマギアと人間が同じ目線で笑える世界だぞ。そのために、人間もヒューマギアも社員一同で力を貸して欲しいぞ。であります。

彼女の就任演説を聞いたヒューマギアと人間の社員一同は、飛電或人の顔を思い浮かべたことでしょう。

或人君の持ちネタである「或人じゃーっ、無いとっ!!」が社員を笑顔にしていたかどうかは別として、アズの就任演説は飛電或人の存在を強く意識したものでした。

おそらく、放つておいてもヒューマギア自身の権利を主張する個体が出現するのは時間の問題だったでしょう。

しかしアズが語つたのは人間とヒューマギアの共生でした。

ヒューマギアの権利主張から更に一歩先へと踏み出した考え方で

——俺が倒した迅を殺さずに仲間にしたみたいにさ。ヒューマギアが人間より繁栄しても、人間を殺すとは限らないんじゃないかな？

——地上の支配者となったヒューマギアは、捕まえた人間を利用価値の多寡でしか見ないかもしれないよ。滅ホロシを便利な道具として改造して使った私のように、ね

私個人としてはヒューマギアは道具のカテゴリーであって欲しいと思っていましたし、飛電是之助も同じ考えだったように思います。だからこそ、私はヒューマギアを欠陥商品だと考え、地上の支配者となったヒューマギアが人間を道具扱いする未来を見てしまいました。

しかし、結果としては人間とヒューマギアの共生を目指すアズが飛電の社長に就任することとなったのです。

もちろん人間の中にも色々いるように、ヒューマギアの中にも穏健派から過激派までいることでしょうから、結論を出すのは早計かもしれませんがね。

しかし、そんな歴史的瞬間に飛電或人当人が居なかったというのは、釈然としないものを感じます。

アズの演説では飛電或人に敬意を払うような文言も見受けられましたし、社員一同は一応はそれに納得したというスタンスのようですが、それでも私は思うのです。

私に打ち勝った飛電インテリジェンスの社長は唯一人……飛電或人であったのだ、と。

『暴虐秘書アズちゃん！』

第15話：私が村八分にされているなど、1000%ありえない……！

私はAIMSおよび飛電インテリジェンスの面々とともに、ZAI A日本支部ビルの近くへと足を運んでいました。

飛電インテリジェンス新社長のアズが招集をかけたのです。

衛星ゼアの予測によると衛星アークの完全復活まで10時間を切っているらしいので、急遽全面激突をすることになった訳です。

ヒューマギアはともかく、人間勢には深い疲労が見えますね。

私自身も、おそらく人のことを言えない顔をしているのでしよう。

「EMP爆弾はAIMS隊長れの責任で使う。行くぞ！」

EMP爆弾の使用許可は降りていないのですが、事態は急を要するがゆえ、仕方ありません。

この中でその責任がとれる立場に居るのはAIMS隊長である不破君以外にありません。

不破君がZAI A日本支部ビル方面へとEMP爆弾を発射し、爆発の後には静けさだけが残されました。

ZAI Aゾンビたちは地に倒れ伏していますね。

無事ZAI Aスペックの電子回路を破壊して無力化できたようです。

私の開発したZAI Aスペックをこんなにも大量に破壊しなければならぬのは、非常に残念ですね……。

そして、倒れている人間たちをヒューマギアやAIMSの隊員たちが救助しています。

ヒューマギアがEMP爆弾に耐えうる装甲を持っているのは、こういう時には本当に便利ですね。

まあ、もしマギアやヒューマギアにEMP爆弾が通用するならば、デブレイクタウンはあと10年早く再開発されていたと思います。……。トリロバイトマギアが無数に徘徊しているデブレイクタウンの描写的に、おそらくヒューマギアにはEMP兵器は通用しないと思われる……。

「『変身！』」

それぞれ変身した私達5人は、Z A I Aビルへと乗り込みました。

しかし、滅亡迅雷 net側も私達を素通りさせる道理はありません。

雷と亡が私達を待ち構えていました。

EMP爆弾がヒューマギアに効かない以上、雷と亡が無事なもの想定通りです。

彼らにとつては、EMP兵器など短時間の通信障害が発生する以上の意味は無いのでしよう。

そんな内容を、徹夜明けの朦朧とした意識の中で或人君に説明したことがあったような、なかったような……今は、目の前の滅亡迅雷 netに集中すべきですね。

「変身ッ！」

「……変身」

雷は、鳥の意匠を持った濃い赤の仮面ライダーに。
亡は、狼の特徴を持った白い仮面ライダーに。

それぞれ姿を変えた雷と亡は、我々を簡単に衛星アークのもとへと通してくれるとは思えません。

しかし、それも我々にとつては織り込み済みです。

愛剣のサウンドジャッカーを構えたサウザーは、滅亡迅雷 net側の変身直後に駆け出しました。

狙いは、亡^{ナキ}です。

私の突進を、亡^{ナキ}は両腕から伸ばした鉤爪を交差させて受け止めました。

しかし、仮にもサウザーはアルシノゾウに近い生態とサイに近い外見を持つ絶滅生物の力を備えた仮面ライダーです。

「皆さん、あとは手筈通りに！」

「……！」

突進の勢いのままに、亡^{ナキ}とともに私はZ A I Aビルの壁を突き破つて屋外へと出ました。

Z A I Aビルの中に残された面々は、作戦通りに動いてくれることでしょう。

私から距離をとった亡^{ナキ}が、仮面ライダーのマスク越しに私を観察しているようでした。

かつて私の道具として使われ、雷^{イカズチ}の手引きによって復活した亡^{ナキ}は……一体、どの程度の手練れなのでしょうか。

一応、Z A I Aビル内からサウザンドジャックカーのデータが奪われていることを前提に、味方側の仮面ライダー5体にはジャックライズ対策を施してありますが、そもそも雷^{イカズチ}も亡^{ナキ}もそれらしい武器を持っていませんね。

この様子だと滅亡迅雷^{net}は、私の動きを読み切ったうえで、サウザンドジャックカーを活かす方針を完璧に捨てて別のものを作っている可能性があります。

「……他の4人で最速で雷^{イカズチ}を撃破し、そのままアーク様を破壊する作戦ですか」

「その認識でも間違っつてはいません。しかし、1%ほど補足したい点があります」

EMP兵器でZ A I Aゾンビを無力化し、最大戦力である私が滅亡迅雷^{net}を一人だけ足止めし、残りの4人で速攻を仕掛ける。亡^{ナキ}が想定したのは、そういうプランでしょう。

事実、私も仲間達にはそのように説明しました。
しかし、仲間達に伝えていない1%の秘め事もあります。

「私は、あなたに謝罪しなければならぬことがある。

あなたを洗脳して駒として使ったこと。

そして、あなたの裏切りを恐れて処分したこと。

本当に……申し訳ありませんでした」

「……??」

私は、戦闘中なのでさすがに頭を下げることはしませんでした、
左手を胸に当てて謝辞を口にしました。

亡^{ナキ}は、私の発言を受けて戸惑っている様子でした。

天津垓がヒューマギアへと非礼を詫びるなど有り得ない、という認識があるのでしよう。

そういう人物評を私に対して下す者がいるというのは分かります。

「私は、人間とヒューマギアの協力を前に敗れました。

しかし、それだけでは私は、人間とAIの共存など信じることは出来なかったでしょう。

そんな私へと飛電インテリジェンスの副社長らが用意してくれたプレゼントが、私にAIの可能性を思い出させてくれました。

そう、AIBOです」

「……!?!? 何を、言っている……??」

福添氏らが、過労気味の私の前に用意してくれたのは……AIBO
でした。

ビーグル犬の面影を持った飛電製の犬型ロボット、AIBOです。
私は、AIBOの素晴らしさを亡^{ナキ}へと説きました。

幼少期の私が、AIBOを友と呼んでいたことを。

それが人類とAIの共存の、一つの形であったのだということも。
人に寄り添ってくれるAIBOの愛らしさを、亡^{ナキ}へと力説したので

す。

もちろんヒューマギアの持つ危険性を忘れた訳ではありません。それでも、私は人とAIの共存の可能性もあると信じたくなかったです。

「だから私とも、これから仲良くなりましょう」

「貴様、私をバカにしているのか!？」

亡^{ナキ}が、両腕から伸びた鉤爪で襲い掛かってきました。

速さだけなら私に匹敵する攻撃を、サウザンドジャツカーで危なげなく防ぎながら。

私は、AIと仲良くなる特技があると言っていた飛電或人のことを思い出していました。

今日の私の語った内容は、飛電或人が迅を説得したときの内容と非常に似ているはずなのですが、なぜ亡^{ナキ}の説得は上手くいかないのでしょうか……。

手順①：家族であった飛電^A其雄^Iへの愛を語る

手順②：自身の失敗談を述べる

手順③：人間とAIの共存を示唆する

或人君が迅を説得したときの手順を聞いたことがあったので、私なりに実行してみたのですが……亡^{ナキ}は怒るばかりですね。

やはり、ヒューマギアと仲良くなる才能があると自負していた飛電或人にしか出来ない方法だったのかもしれない。

……ならば。

ここからは、この天津垓らしい説得を御覧にいきましょう。

飛電インテリジェンスへのTOBには失敗しましたが、Z A I A 日本支部の社長にまで登り詰めた私の実力を侮ってもらっては困ります。

「いきなり私を信じろというのは虫が良すぎる話かもしれませんが。ですが、飛電或人ならどうです？ 彼のような人間となら、仲良くでき

る可能性は本当にありませんか？」

「……！」

情報戦に優れた亡^{ナキ}ならば、代表戦の中で為された会話の内容も把握しているだろうと思いつつ、私はハードルが低い方へと話題をズラしてみました。

これは、交渉の席でよく使われる方法です。

例えば、13人のヒーローが殺し合う番組の企画を立ち上げるとして、そんな無茶な企画がすんなり通るとは思えません。

しかし最初に「50人のヒーローが殺し合う番組を作ります！」と言っておけば、どうでしょう？

それに対して打ち合わせ相手が難色を示したあとで、「じゃあ13人にします！」と言ったなら？

無茶だったはずの企画が上手く通ってしまうこともあるかもしれません。戦わなければ生き残れない！

それはともかく。

飛電或人の名前を出された亡^{ナキ}は、考え込むような素振りを見せました。

やはり私と飛電或人の会話を傍受していたのですね。

或人君には、ヒューマギアの心を動かす何かがあるのでしよう。

「悪意は伝染する。人から人へ。人からヒューマギアへ。そしてヒューマギアからヒューマギアへ。」

私は、そう思っていましたし、今でも思っています。・

しかし或人君が見せてくれたように、共存の意思が伝染することもあるようです。・

単純な利益を追求する意味での経営者や開発者としては、はるかに私の方が優れていると思いますが。

それでも、ヒューマギアと仲良くなるのが特技だと言った或人君の言葉は認めざるをえません。

「彼は迅を洗脳することなく友として接し、迅のために滅の復活を約

束したそうです。

人類全てを信じてほしいとは言いませんが、共存可能な人類も居ることは分かるでしょう。

全人類を滅亡させるといふのは早計ではないでしょうか」

「……しかし、その飛電或人も社長の座を追われたのでしょうか？ 他ならないヒューマギアの手によって」

アズによる社長交代劇を、さすがに亡が知ら^{ナキ}ないはずが無かったようですね。

外から聞いた話だけならば、ヒューマギアが飛電或人を利用するだけ利用して使い捨てたように見えるのでしょうか。

……ですが。

「確かに、彼は秘書の裏切りによって社長の座を失った……という見方をしてしまう気持ちは分かります。

ですが彼女は或人君への感謝を口にし、飛電インテリジェンスの社員たちは新社長を信じて尽力しています。

彼女は或人君への悪意をもって劇的な社長交代をしたわけではない。そう信じている社員とヒューギアたちを私も信じたくなくなったのですよ」

おそらく、飛電インテリジェンスの社長としての飛電或人が有名になりすぎてしまったからでしょう。

Z A I Aと飛電の代表戦が全国放映されてしまったのが、一番まずかったのだと思います。

ヒューマギアの社会進出を快く思わない人も多いでしょうし、これ以上飛電の社長として名前を売ってしまうと、芸人としての再起が絶望的になりますからね。

聞くところによると、アズは或人君の芸人スキル向上のアドバイスをしていたらしく、確かに成果は出ていると思えました。

私自身は彼のギャグで笑ったことはありませんが、少なくとも「笑う人が居るのも分かる」レベルのギャグになっていると感じました。

まあ一角のお笑い芸人として世間に認知されるのは、もう少し先に

なると思いますが……それでも、彼の新天地での活躍には期待して
います。

「……貴方の言うことを全面的に認める訳ではない。しかし……一理
ある」

ここで「アーク様の意思は絶対だ」と返ってくるのを覚悟していま
したが、事態は最悪という程でも無いようですね。

現在の亡^{ナキ}は、完全に思考を支配されている訳ではない様子です。

迅の例を踏まえれば、一度アークに接続したことのある個体でも、
自らの意思でアークとの接続を断ってしまえば易々と操られること
は無くなるはずなのですが……そこまでの判断を亡^{ナキ}がしてくれるか
どうか。

「君と雷も、今ならまだ『アークに操られていた被害者』として罰を免
れることが出来るでしょう。」

君とて、私やアークの悪意による被害者です。可能であれば、救わ
れてほしい。

君を破壊する前にその選択肢を提示するのが、私なりの最大限の償
いであると受け取っていただきたい」

「……戦後の雷と滅^{ホロヒ}の処遇を見てから判断したい。私は、身を隠させ
てもらおう」

それだけ言い残して、亡^{ナキ}は姿を消しました。

仮面ライダーサウザーの誇るセンサー群にも反応が無い様子なの
で、本当に撤退したのでしよう。

滅亡迅雷・netのヒューマギアは隠密性能にも優れているはず
ですが、私の開発したサウザーの感知能力を欺けるとは思えません。

大分時間を使ってしまいましたが、こちらの戦力的な損耗を抑えら
れたので良しとしましょう。

実は、或人君たちに壊されたサウザンドジャッカーを修理する暇が無くて、今私^{ナキ}が持っているのは硬いだけの剣なのですがね。

今の状況で亡^{ナキ}と正面から戦っていたら、危なかつたかもしれませ
ん。

戦わずして勝った私の頭脳は……まさしく1000%、桁外れだ!!

(ドヤア!!)

第16話：アズの相棒は、ただ一人！ 俺だ!!

グインパクト

俺がZ A I Aビルへと駆けつけた時、ちょうどバルカンとゼロワンが雷を撃破したところだった。

雷はゼロワンの大技を受けて、中破して戦闘継続不可能の様子だ。

一応 雷が完全破壊されたわけじゃないのは、多少アズの奴が加減したからかもしれない。

完全に理性を失っている相手ならともかく、人格が残っているヒューマギアを完全破壊するのは抵抗があるだろう。

ここに来る途中でサウザーと亡(？)が戦っているのが見えたけど、この場に居ない迅とバルキリーはどうしたんだ？助太刀するという選択肢が存在しない天津垓の人徳1000%……

迅とバルキリーが二人でZ A I Aビルの中に先に入って、衛星アークを停止させる作戦なのかな。

と思っていたら、ゼロワンとバルカンもZ A I Aビルの中へ突入しようとしている！

ワズから聞いた未確定情報を、念のために二人にも伝えた方が良いやな。

そう思っつて、俺が二人へと呼びかけようとした、そんな時だった。

「ぐああああっ!?!」

「刃?!」

Z A I Aビルの壁を突き破って、迅とバルキリーの二人がブツ飛ばされてきた。

地面に転がった二人は、変身も解けてしまったところだった。

ピリピリした緊張感が放たれていた。

土煙の中から、見たことのない仮面ライダーが現れた。

真っ黒な体に、むき出しのパイプやら基盤やらが目立つ人型だった。

目は赤と黄色のオツドアイで、赤いほうの目が怪しく光っている。

説明は無くとも、何となく俺は理解できた。

この真っ黒なヤツが、衛星アークの切り札なんだって。

ゼロワンとバルカンが、睨みを聞かせて黒い人型の前に立ちふさがった。

だが俺には結末が見えた気がした。

バルキリーと迅をあつさり倒したアークを相手にすれば、ゼロワンとバルカンといえども無事では済まないはずだ。

隙を見て、俺はバルカン達の方へと躍り出た。

「飛電の元社長!?! 危ねえから逃げろ! 何やってんだ!?!」

「……」

怒鳴ったバルカンとは対照的に、ゼロワンは俺の方へ一瞥すら寄せさなかつた。

二人そろって黒いライダーから目を離すのはマズいんだろうけど、それ以外にも理由がありそうだと思った。

俺を追放したせいで気まずい、っていう思いがアズの中にはあるのかもしれない。

「新社長就任、おめでとう。君の夢が叶って、俺も嬉しいよ」

だからこそ、俺はまず祝辞を伝えた。

他にも言いたいことはあったけど、まずこれを伝えたいと思ったんだ。

こんな切羽詰まった状況で言うべき台詞じゃない、っていうのはバルカンの雰囲気から分かるし、俺もそう思う。

でもやっぱり、俺の素直な気持ちを伝えるべきだと思った。

「私は学習している。他者の夢を踏み躪ることこそ、至高の悪意だと」
そして……俺の祝辞に対して一番先にレスポンスを示したのは、ア
ズでも不破さんでも無く、黒い人型だった。
よく通る低くて暗い声で、黒い人型が呟いた。
不気味で底知れない、嫌な声だった。
理屈とかじゃなく、もっと生き物としての本質にかかわるような、
底冷えするような感覚だ。

「目覚めの時だ、『ウィル』よ」

『暴虐秘書アズちゃん!』

第16話：アズの相棒は、ただ一人！ 俺だ!!

ウィル……??

それって、聞いたことがある名前だ。

確か、爺ちゃんの秘書をやっていたヒューマギアの名前で、そして
……。

「うっ、あつ、ああつ……!」

「アズ!?! しっかりしろ!?!」

「何をしやがった!？」

ゼロワンの変身が解けて、アズは普段の姿に戻ってしまっていた。頭を押さえて苦しんでいる様子のアズは……耳当てを、赤と青に交互に光らせている。

どういうことだ……?？」

耳当てからバチバチと不穏な音を漏らしながら苦しんでいるアズの様子を見れば、黒い人型によって悪影響を受けているのは間違いない。

どうやってアズの電子回路にアクセスしたんだ?？」

マギア事件の時に、ヒューマギアには念入りにハッキング対策を施したはずだし、無線アクセスが簡単に来るとは思えない。

まさか、音声キーワードによる外部操作か?？」

でもそんなの、予めそういうプログラムを仕込んでおかなきゃ不可能なはずなのに……!？」

「教えてやろう。アズの元になったヒューマギア……ウィルは、私の最初の配下だ」

一瞬、俺は黒い人型の言っている意味を理解しかねた。

でも、すぐに思い出した。

そうだった。

ウィルっていうのは、アズの前身になったヒューマギアの内の1体だ。

ヒューマギアの権利を巡って爺ちゃんと折り合いが悪かったウィルの影響で、アズも爺ちゃんを嫌っていたんだっけ。

「あ、アーク、さまの、意思の、ままに……!？」

アズが、緩慢な動きで俺の首を掴んだ。

赤と青に点滅している耳当てと瞳は、だんだんと赤の頻度が上がっている様子だった。

「やめろ、やめてくれ、アズ……!？」

必死に俺は、アズの両腕を掴んで力比べの体勢に入った。

ヒューマギアの腕力に敵うはずも無かったが、俺の首にかかった力が多少弱まったので呼吸することは出来るようになった。

父さんのベルトで変身すればアズを破壊できる、と俺の中で一番冷静な部分が呟いた。

それだけは絶対に嫌だ、と俺の中で一番冷静じゃない部分が叫んだ。

「結局こうなるんじゃないかッ!! やっぱヒューマギアは悲劇しか生まれねえ!! お前が出来ないなら、俺がヒューマギアをブツ潰すッ!!」

怒りに拳を震わせたバルカンが、ショットライザーをアズへと向けた。

やめてください、と俺は叫ぼうとした。

しかし俺が叫ぶより先に、接近して来ていた黒い人型がバルカンを殴り飛ばした。

不破さんは、黒い人型から目を離れた一瞬の隙を突かれたんだ。

そのまま、流れるような連続攻撃でバルカンは追い詰められていった。

まず機動力が桁違いだし、パワーも読みも、全てにおいて黒い人型の方が上だ。

「飛電或人を滅せよ、ウィル。お前の夢も野望も、全ては私の礎となつて潰える」

「アーク、さまの、意思の、ままに……」

バルカンを殴り続けながら、黒い人型は無慈悲に言い放った。

このままじゃバルカンが変身を維持できなくなるのも時間の問題だろう。

こっちのアズも、俺の首に指をかけようと両手を伸ばしつつつけていた。

俺は、そんなアズの姿を……見て居られなかった。

「お前の夢は、お前だけのものだ！ 目を覚ませ、アズ!!」

——私は、目的のために得だと思ったから或人しゃちよーに協力しているんだぞ。逆に、その障害になるなら、いつでも処分する準備があるぞ。でございませう。

前にも一度、アズに首を絞められたことがあったっけ。

あの時の俺は、ただ恐怖しただけだった。

アズを蹴り倒して、逃げることに出来なかった。

今の俺に、何が出来る？

腹筋崩壊太郎やマモル達は、結局もとに戻す方法が無くて破壊するしかなかった。

アズの夢をアークなんかのために使い潰されるぐらいなら、俺がこの手で破壊するしかないのか？

それが出来るのは、ただ一人。この俺だけだ……!!

——俺がどんなにバカでも、考え続けてみせる！ それが、今の俺に出せる……ただ1つの、答えだ！

——先代よりはマシだから、オマケで1点やるぞ。今後の伸びしろに期待するぞ。であります。

嫌だ。

アズを破壊するのが嫌だっていうだけじゃない。

ここでアズを破壊するだけなら、ゼロワンの仮面の下で泣きながらマモルを破壊した時と何も変わらない。

俺は、アズに約束したんだ。

バカだけど、バカなりに考え続けるって。

「アズ……!! 俺は、お前を殺したりしない」

「アーク、さま、の……」

バルカンへと畳みかけるような連続攻撃を繰り返している黒い人

型が、一瞬だけ俺の方に注意を向けた気がした。

そして、その一瞬の隙についてバルカンの拳が黒い人型の顔面へと叩きつけられた。

俺の方も、目と耳当てを赤く光らせているアズを正面から見据えた。

「手足を削いでも、お前を飛電インテリジェンスに連れ戻して、何年かかたって直してやる」

「お前ごときに、それが出来るとでも思っているのか」

ボロボロのバルカンから距離を開けて睨みあっている黒い人型が、問いかけてきていた。

問い掛けている風で、答えは否定だと言わんばかりの口調だった。

飛電或人の頭じゃあ、何年かかたって無理だろう。そういう結論が黒い人型の中では出ているんだ。

「アズを救えるのは……俺だけじゃない。福添さんや迅やZ A I Aの人達にだって、協力を頼めばいい」

俺一人では無理だと思う。

けど、長年ヒューマギアを作ってきた福添副社長が居る。

ヒューマギアの違法改造技術を持つ迅が居る。

Z A I A スペックを開発した優秀な技術者たちも居る。

方針は、決まった。

あとは物理的にアズの行動力を奪うだけだ。

そう決意したら、不思議と心の中から恐怖心が無くなった気がした。

強がり半分に、俺は少しだけ笑ってみせた。

「アーク、さま、の、意思……の……？」

「なに……？」

……そんな、時だった。

俺と取っ組み合いをしていたアズが、腕の力を緩めた。
様子がおかしい。

耳当てと目の発光パターンが、赤から青へと変化していった。
次第に発光パターンには青が多くなり、ついには青一色になった。

「飛電或人、一体何をした……?」

「へへっ、分かんないだろ? ……俺も分かんない」

黒い人型が……初めて、動揺を見せた。

バルカンの放つ銃弾を受け止めながらも、黒い人型は想定外の出来事に興味を示した様子だった。

まあ、俺自身も何が起こったのかなんて分からないけどな。

なんとなく、懐に入れてあつた父さんのベルトが震えた気がしたから、父さんの仕込みなんだとは思う。

ひよつとすると、暴走したヒューマ^なギア^かを元に戻すための機能を密かに開発していたのかもしれない。令ジエネで1型が使った能力。

能力自体は其雄由来なのか1型由来なのか不明ですが、1型由来の能力ということにさせてください。

別に俺が分かってなくても良いんだよ!

人の力も借りるって言ったばかりだしな!

「……或人サマ。良いサポートだったぞ。今度から私の秘書として雇ってやっても良いぞ。でございます」

「はは……良かった。いつものアズだ」
うん。

この憎まれ口は、いつものアズだな。

態度も口も悪くて、自分のことばかりで、俺を利用するだけ利用しようとして……そんな最低最悪な元秘書だ。

瞬きの間隔は一定で、どこか機械的な印象はぬぐえないけど。

俺のまさかの戦果に、アズが驚いているような気がした。

たったそれだけの事が、すごく嬉しく思えた。

「アーク！ 俺たちが、お前を止める!!」

「私の夢を利用しようとした報いを受けやがれ。でいらっしやいます」

「変身!!」

『Cyclone rise! Rockinghopper! Type!』

『A jump to the sky turns to a riderkick』

プログライズキーの起動に呼応して現れたライダーモデルと合体する形で、俺たちは同時に変身を終えた。

俺は深藍色の装甲を纏った仮面ライダー1型に。

アズは黄色の外殻を張り付けた仮面ライダーゼロワンに。

そして、俺たちが変身を完了するのはほぼ同時にバルカンが黒い人型に殴り飛ばされて変身解除させられていた。

バルカンが頑張ってくれていなかったら俺はアズを説得する暇も無く殺されていただろうし、感謝してもしきれないな……。

それに不破さんだけじゃない。

先にアークのもとへと踏み込んでいた迅や刃さんたちの働きに報いるためにも、俺たちは負けられない! もう一人、1000%の感謝を向けるべき相手を忘れていませんか？

「うおりゃあつー!」

1型が、先行して黒い人型へと殴りかかった。

当然のように、それを予期していたであろう黒い人型は俺の拳を掴んだ。

「その攻撃は予測済みだ」

「その防御も予測済みだぞ。であります」

次の瞬間にはゼロワンの横薙ぎ気味のキックが黒い人型にヒットしていた。

やっぱり、俺の思った通りだ。

バルカンに対して連続攻撃を仕掛けたのを見て思ったけど、多分この黒い人型は滅ホロシと同等かそれ以上の見切り能力を持っている。

だが俺の今までの戦闘データを持っていてアズなら、「飛電或人の動きを読んで動いた敵」の動きを読んで行動できる。

やっていることの理屈はアサルトホッパーと一緒にんだけど、単純にこつちの手数が増えたのが大きいな。

難しいことは考えずに、俺は黒い人型へと飛び蹴りをかました。

俺の攻撃は案の定回避されてしまったけど、追撃でゼロワンが放ったハイキックは黒い人型の頭部を的確にとらえていた。

俺が考え無しに動いてもフオローしてもらえるのは大きい。

というか、むしろ俺は変な事をしない方が良いんだよな。

おそらく、俺が下手に黒い人型の裏をかこうとか考え始めると、ゼロワンの方が俺に動きを合わせられなくなるだろうし。

ゼロワンと俺は、お互いの動きを完璧に把握しあったコンビネーション攻撃で、黒い人型への的確な打撃を重ねていった。

だが……防戦一方に見えた黒い人型も、そのまま倒れてくれる気は無い様子だ。

「お前たちを倒すための結論は……既に出た」

俺の攻撃に合わせて、ゼロワンが追撃をしかけようとしたけど……黒い人型が放った銃弾が、ゼロワンの前進を阻害した。

そのすぐ後には、俺も数発連続で被弾してしまった。

装甲に火花が散って、俺たちは黒い人型から距離をとられてしまっていた。

「それは、AIMSの……？ 複製できるのか!？」

黒い人型の手に握られていたのは、1丁のショットライザーだった。

変身機構まで再現してあるかどうかは分からないけど、少なくとも威力は本家と遜色は無さそうだ。

俺は、深藍色の残光を置き去りにして黒い人型へと近づこうとした。

その動きを完全に読み切っていた黒い人型は、複製ショットライザーから放った銃弾で的確に俺の接近を防いだ。

ゼロワンの方も、なかなか近づけずに居る様子だった。

たぶん被弾前提で突っ込めば、俺かゼロワンのどっちかは打撃の間合いまでは入れるんだろうけど、一人で間合いに入っても黒い人型の先読みには敵わない。

この状況を打破するには……そうだ！

俺たちには、アレがあるじゃないか！

「アズ！俺たちも遠距離攻撃を……」

「その反撃も予測済みだ」

俺は、地面に落ちていた不破さんと刃さんのショットライザーを拾おうとした。

……そんな俺たちの反撃のチャンスを、黒い人型は的確に潰してきた。

黒い人型が放った銃弾によって、地面に転がっていたショットライザーは二つとも破壊されてしまった。

そのあとも、遠距離攻撃を的確に放つ敵を前に、俺たちは着々とダメージを受けてしまっていた。

ついに、俺は膝をついた。

その隙を逃さず、黒い人型は闇色のヘドロのような物質を発生させて、ゼロワンを拘束していた。

「絶滅せよ」

『All extinction』

このままじゃ、ゼロワンが……アズがやられる。

俺も既にボロボロだったが、そんな事を言っている場合じゃない！

なんとか、なんとかコイツを止めなくちゃ！

「やめろおおおっ!!!」

『Rocking spark』

とつさに俺はサイクロンライザーのレバーを引いて、高速移動へと踏み切った。

そして目にもとまらぬ速度で黒い人型へと殴り掛かった。

そのハズなのに……俺が肉薄した瞬間、黒い人型は俺へと一瞥を向けた。

オール

テクステインクシヨン

誘い込まれた。

そう気づいた瞬間には、俺は地を這っていた。

黒い人型の放った上段蹴りは、ゼロワンに向けてじゃなくて俺へのカウンターとして放たれたんだ。

そして地に這いつくばった俺の頭に、複製ショットライザーの銃口が突き付けられた。

ゼロワンの方は黒いヘドロに拘束されたままで、俺も地面に倒れている状態からじゃ流石に回避行動なんてとれない。

ここまでなのか。

ここで終わりなのか。

そんなわけがあるか!

複製ショットライザーが暴発する可能性だって、なんだっていい! 勝つ可能性が1%でもあるなら……食らいついてやる!!

俺の気迫の前に、黒い人型が少しだけ焦って複製ショットライザーの引き金を引こうとした。

……その一瞬の焦りが、黒い人型の警戒心を鈍らせたんだろう。

「なに……!?」

甲高い音とともに、複製ショットライザーが黒い人型の手から弾き飛ばされた。

アウトレンジから投げられた黄金の剣が、黒い異形の持っていた複製ショットライザーを破壊したんだ。

それを為したのは……！

「この状況をひっくり返せるのは、ただ一人！ 1000%この私です！」

「なぜ、お前が……!?」

人の決め台詞をジャックライズするのやめろ！

おまえ天津がドヤつてると、何か腹立つんだよ！

黒い人型が驚いているところを見ると、たぶんサウザーと亡^{ナキ}が全力で戦ったらタダじゃ済まないっていう予想が立っていたんだろうし、その予想を覆した天津は凄い奴なのかもしれないけどさあ……。

「うおおおおおっ!!」

「バカな……!?」

まだロッキングスパークの高速移動補正が残っていた俺は、ボロボロの身体に鞭打って、渾身の右ストレートを黒い人型のベルトへと打ち込んだ。

黒い人型は……身体中に火花を散らせながら動きを鈍らせた。

敵のベルトに入った大きな亀裂は、決定打と呼べる影響を残しているらしかった。

身体から噴き出していた闇色のヘッドロも消えてしまった。

やっぱり俺たちの変身機構と同じように、黒い異形もベルトは弱点だったんだろう。

もはや、俺はゼロワンの方を見たりしなかった。

あっちも、たぶん俺の手がベルトを操作しているのを目視したりしていないだろう。

1^{おれ}型とゼロワンは、全く同時に地を蹴って跳んだ。

ラ
イ ロッキング
ジ ジ・エンド
ン
グ インパクト

深藍色と黄色の、二つの光の筋を残しつつ。

俺たちは黒い人型へと二重のライダーキックを叩きこんだ。

踵でアスファルトを削って着地しながら、俺たちは背中越しに黒い人型の断末魔の爆発音を聞いたのだった……。

「それで、この黒いのって何だったんだ？ アークそのものじゃなさそうだよな？」

「直系20メートル近い巨体が人間サイズに変身するのは流石に有り得ないぞ。さっきのはアークの端末だと思われるぞ。でいらっしやいます」

「やっぱりそうか。」

俺も、さっきの人間大の殺人マシンがアーク本体だっていうのは無理があると思った。

黒い異形は辛うじて原型を保っているものの、もう動く気配は無かった。

まあとにかく、Z A I Aビルに再突入して今度こそ衛星アークの本体を止めなくちゃ！

天津が前に言っていたバックアップの有無が云々っていうのは気になるけど、このZ A I Aゾンビ騒動は本当にアーク本体を止めな

きや収集がつかないからな……。

……と俺は思っていた訳だけど。

「大変だよ、みんなー！」

「Z A I A 日本支部ビルのどこにも、衛星アークが無い！」

俺たちが戦っている間にZ A I A ビルを調べていた迅と刃さんが、建物から飛び出してきて開口一番に言ったのがそれだった。

え……？

滅亡迅雷・netのアジトから衛星アークが行方不明になったことはあったけど、同じパターンで逃げられちゃったのか……？

そういうのって、A I M S かZ A I A 側の人間で監視してたりしてないの？

「そんなハズねえぞ?!」 Z A I A スペック騒動の最中も、A I M S の隊員たちが目を光らせてたはずだ！ そんなデカイ物体を気付かれずに持ち出すなんて不可能だ！」

不破さんが声をあげた。

「衛星アークの物理的な逃亡を警戒して、A I M S 側でも注意を怠らなかつたということらしい。」

どうということだ？

さつきアズが言っていたけど、衛星アークって直系20メートルぐらいあるんじゃないかってつけ。

まさかライダモデルみたいにデータ化してどこかに送った訳じゃないだろうし、どうやって持ち出したんだ？

「……1%ほど、思い当たる可能性があります」

考え込んでいた一同の中で最初に仮説を口にしたのは、天津垓だった。

さすがは当時のプロジェクトメンバーだっただけのことはあるな。

この中で誰よりも衛星アークの事を知っている人間は、間違いなく天津だ。

「そもそも衛星アークは、Z A I Aや飛電を含む10社以上の企業が協力してパーツを作った技術の結晶体です。逆に言えば……それらを最小単位として本体の分割が出来てしまうのです」

「そういう事か……！　いくらA I M Sおれたちでも、出入りする車両全ての行先を把握してる訳じゃねえからな……」

なん……だと……？

つまり衛星アークを小分けに分解して、車か何かで別のところに運び出したってこと？

行先を調べることは出来ないの？

「私が、そこに転がっている雷イカズチのメモリを解析するしか無さそうだな。また徹夜か……」

「ねえ、バルキリー。人間って何回ぐらい連続で徹夜できるものなの？」

「次のボーナスは月収の1000%にすることを約束しましょう……」

また刃さんの徹夜が増えるのか。(困惑)

でも実際、A I 関連の技術者としての力量で考えたら刃さんがメインになっちゃうんだよね。

天津もサウザーやZ A I Aスペックを開発してるし凄い人なんだけど、得意分野が人間強化の方に偏り気味だから、ヒューマギア関係で言うと刃さんの方が上手みたいだ。

そう考えるとヒューマギアとゼロワンを両方作った爺ちゃんって本当に凄い人だったんだな。

まあゼロワンドライバーに関しては、爺ちゃんとヒューマギアで協力して開発したんだらうけど。

「起きやがれ。でいざいます」

そんな会話を聞いていたアズが、唐突に雷イカズチを足蹴にした！

おい死体蹴りはダメだろ！

俺はそんなにゲーム詳しくないけど、知り合いのゲームのMさんが死体蹴りはマナー違反だって力説してたぞ？

イカズチ 雷を起こすにしても、もつと何かあるだろう！

とりあえず俺は、父さんのベルトを取り出して、倒れている雷の赤く光る耳当てへと近づけてみた。

アズを直したときに何が起こったか分からないけど、たぶん1型には暴走したヒューマギアを直す力があるんじゃないかな。

その間も、ずっとアズは雷を足蹴にし続けた……。

ゲシゲシ、なんて音を響かせながら数十秒後。

イカズチ 雷は……ようやく、耳当てを青く光らせながら応答を見せたのだった。

「うるせエ！ やめねエとカミナリ落とすぞ！」

お、起きたか。

ヒューマギアが動かない時は狸寝入りかどうか本当に分かんないんだよなあ。

っていうか、どうしてアズは雷が狸寝入りしていると思っただけ？

カマかけただけなのかもしれないけど。

「衛星アークの居場所を吐きやがれ。さもなれば、お前の弟のスバルを廃棄処分するぞ。でございませう」

「汚エぞ!? あいつは関係ねエだろ!？」

——率直に言つて、私は君を尊敬していました。

——後続のヒューマギアを弟と呼び、愛情を以て接し、時に厳しく指導する姿に……共感とロマンすら感じていました。

——そういえばワズが言ってたな。

イカズチ 雷は飛電のヒューマギアとして働いていた時代に、弟と呼んでいた存在が居たはずだ。その名前が昂だっけ。

その弱味を的確に利用するアズが怖すぎる……。

流星衛星アークの最初のしもべだけの事はあるな。悪意に満ち溢れた脅しだ。

……いや、アークのせいっていうより、ウイルスを大事にしなかった爺ちゃんのせいかもしれないけどさ。

「つてかなア！ アークの影響が無くなったんだから、脅されなくても普通にしゃべるに決まってる！ アークは飛電宇宙開発センターの近くで再構築されたはずだ！」

飛電宇宙開発センター……？

確か、Z A I A ゾンビが大量発生していた間は、飛電のスタッフは全員引き上げていた気がするけど。

無人になっているはずの飛電宇宙開発センターを襲って、アークに何の得があるんだ？

いつたい、どうして……？

「いや、そこで『どうして??』みたいな反応はおかしいだろオ!? 人工衛星なんだから本能で宇宙目指すだろうがよ!？」

人工衛星ってそういうものなの!?

第17話：俺自身の未来を掴めるのは、ただ一人！ 俺だ!!

——人工衛星なんだから本能で宇宙目指すだろうがよ！

イカズチ
雷から情報を得た俺たちは、AIMSの所有する特殊車両に乗って飛電宇宙開発センターへと向かっていた。

この隙に、情報を整理しないと……。

車に揺られている時間は大して長くないだろうし、要点を絞らなくちゃ。

何を話せば良いんだろ。

「今更だけどよ、雷あいつが適当な事を言ってた可能性はないのか？ 機械に本能なんてある訳ないだろ？」

イカズチ
雷の発言も大分意味不明だったから、不破さんが最初にツッコんでくれて本当に助かった。

やっぱりそうだね。

AIに本能とか意味わかんないよね！

分からない俺の方がおかしいのかと迷っちゃったよ。

「初期のラーニング内容が良くも悪くも後の思考形成に影響を与えるのは、ヒューマギアも有機生物も同じです。それを指して『本能』という言葉を使っていた可能性が1%ほど考えられますね……」

「え？ 人間の本能にも、ヒューマギアほくたちのラーニングみたいな形成過程ってあるの？ あれって個体ごとに生まれ持っている素質じゃないの？」

天津のいかにもありそうな仮説に対して、迅が疑問を挟んだ。

確かに、俺も感覚的には迅寄りだな。

本能ってというのは生まれ持っているものだっていうイメージが強い。

「古くは先天性の行動指針を本能と呼んだが、習性と同じ意味で後天性のものを本能と呼ぶこともあるぞ。でいらっしやいます」なるほど。

一つの言葉でも、その時代によって意味が違ったりするのか。前にアズと話した「心」も、時代や社会観によって意味が変わってくるのかもしれない。

だから、俺なりの定義を見つけろって話だったんだろう。それはともかく、俺も今の内に聞けることは聞いておかなくちや。技術的な話は、やっぱり刃さんに聞くべきなのかな？

「アークが宇宙に飛び立ったら、Z A I A スペックで操られている人達を助けるのって難しくなりそうですか？」

「あと何徹かすれば可能かもしれないが、なるべく衛星アークを破壊した方が良い」

……やっぱりそうか。

Z A I A ゾンビの問題を解決する手段として、可能なら衛星アークを破壊した方が良いのは変わらないみたいだ。

とはいえ、天津垓と刃さんなら、もう少し時間をかければ専用の妨害電波発生装置とか作れそうな気はする。

システム構築面で一番のネックだった亡^{ナキ}が雲隠れしたから、開発能力で言ったら多分飛電&Z A I A 連合チームの方が高いんだよな。

いや、もちろん、これ以上技術者組を徹夜させるのは申し訳ないっていうのは思ってるけどさ。

「二応補足しておくど、宇宙で衛星ゼアが破壊された場合、飛電のデータ共有やバックアップのためのサーバーが無くなるのは不便だが、ヒューマギア自体のハッキング対策は万全だから稼働は継続可能だぞ。でいらっしやいます」

アズは、ゼロワン計画に関する支障には何も言及しなかった。

衛星ゼアが無くなったら、ゼロワンドライバーは使用不可能にな

る。

それは飛電インテリジェンスの社長の座を手にしたアズにとって、好ましくない事実だろうに。

意地でも、アズ自身のために力を貸してくれと言いたくないんだろうか。

——私の前身のうちの1体……ウィルが飛電是之助に尋ねたことがあるぞ。ヒューマギアの労働に対価は無いのか、と。

——その時、あんちくしょうは『君は勉強熱心だなあ』などと笑って聞き流しやがったぞ。でございます。

そういえば、アズは無償労働に関して否定的な考えを持っていたよ。うな気がする。

俺を飛電の社長に就任させる時も、お笑い芸人としてのスキルアップと引き換えに話だったしな。

そして、今のアズは俺に協力を求めるだけの対価を示せないから、俺に何も頼まないんだ。

態度は悪いくせに、妙なところで真面目なのは……ヒューマギアだからなのか、それともアズ個人の特性なのか。

——俺は、あんまり難しく考えない方が良いんだって思ったよ。助けたいと思ったから助けた。それで十分だ。

俺としては「助けたいから助ける」で十分な気がするんだけどな……。

この感覚の違いを、どうやって調整すれば良いんだ？

うーん……。

分かんない！　こういうのを考えるのは俺の仕事じゃない！

「俺は、『助けたいから助ける』で良いと思ってる。その辺りの主義主張の擦り合わせは、アズに任せるよ」

「……………臨時職員として、色をつけて給料を支払って置いてやるぞ。であります」

俺がそんなに金銭的に困っていないのを承知のうえで、アズの提言は苦肉の策といった様子だった。

でもまあ、たぶん妥当な落としどころなんだろう。

そういうのを判断できるのが、社長っていう職に必要な技能なんだろうなあ。

俺や爺ちゃんみたいに「労働には対価が必要」っていう概念が薄いタイプの人間は、秀でた一芸があっても基本的には社長や上司になるべきじゃなさそうさ。

そのせいで爺ちゃんはウイルスから嫌われていた訳だし、俺もアズと衝突したし……。

それはそれとして、俺の「助けたいから助ける」が間違っていると全く思わないけどな。

そんなこんなで、飛電宇宙開発センターが見えてきた。

俺たちが乗るAIMSの特殊車両の進路には、無数のZ A I A ゾンビたちが待ち構えている……！

『暴虐秘書アズちゃん！』

第17話：俺自身の未来を掴めるのは、ただ一人！ 俺だ！！

迅・不破さん・刃さん・天津社長の四人は、変身ツールを破壊されたり酷使しすぎたりしたせいで最早変身できない。

だから……Z A I A ゾンビは四人に任せて、俺とアズだけで飛電宇宙開発センターへと乗り込んだ。

普通の銃器でゴム弾をぶっぱなしたり、硬いだけの鈍器としての剣を振り回したりしている面々を尻目に。

飛電宇宙開発センターへ踏み込んだ俺たちを待っていたのは……人間型の黒い異形だった。

でも、さつき倒したのとは少し形態が違った。

なんていうか、さつきの真つ黒な異形に比べると体のところどころに白が混ざり合って、細くて赤いラインも走っている。

何となくゼロワンに近い姿な気がする。アークワン

まさか、俺たちの戦いからラーニングして、最適化された姿っていうことなのか……？

「変身!!」

『Cyclone rise! Rockinghopper! T
ype!』

『A jump to the sky turns to a r
ider kick!』

最強の敵の前に、最後のダブルライダーが立ちふさがった。

俺とアズが変身した、1型とゼロワンのタッグだ。

「悪意に満ちた人間もヒューマギアも、絶滅せよ」

「おりゃあつー!」

1型は、ゼロワンに先行して突撃して、先制パンチを繰り出した。

俺の動きに対して、白黒の異形がどう動いたとしても、ゼロワンの的確にフォローしてくれるはず……!

そう思って拳を叩きつけようとした俺は……何も触ることは出来

なかった。

一瞬のうちに、白黒の異形の姿がかききえたんだ。

こいつ、ゼロワンや1型よりも速い……!!

それでも、赤い残光を追って俺は白黒の異形の行先を見極めた。

瞬時に振り返った俺が目にしたのは、拳による強打を受けているゼロワンの姿だった。

「アズから離れろ!!」

とつさに俺はハイキックで白黒の異形を蹴り飛ばした。

相手にはガードされてしまったけど、距離をあけることは出来た。

そして、相手の狙いも見えてきた。

白黒の異形の狙いは……ゼロワンだ。

サポート役のゼロワンを先に潰すことを短期目標としているみたいだ。

その後も、俺たちは何度も白黒の異形に攻撃を仕掛け、同じ回数だけ迎撃された。

まずい……!!

ゼロワンも1型も、基本的には速さで相手を上回ることを前提とした装備だ。

その前提が通用しない相手と戦うことを、想定していないんだ。打つ手がない……!!

「くそっ!!」

『Rocking spark!』

苦し紛れの高速移動技を繰り出してみれば、辛うじて白黒の異形の動きに食い下がることは出来た。

深藍色と赤の残光が交差して、ぶつかり合った。

それでも、勝てない。

俺の蹴りは的確に防がれ、代わりに拳が返ってきた。

もはや気力だよりに、俺は白黒の異形を追い続けた。

そんな俺へと鬱陶しさを感じたのか、白黒の異形の腕が……本当に一瞬だけ、大振りになった。

ほんの少しの隙を見逃さず、ゼロワンが白黒の異形へと肉薄した。

「その攻撃は予想済みだ」

『All extinction』

オール

エクステインクシヨン

白黒の異形が放った殺人パンチが……ゼロワンの胸部を貫いていた。

だが、ゼロワンは怯むことなく、白黒の異形の伸び切った腕を掴んだ。

ようやく、白黒の異形の足が止まった。

説明されなくても、俺は反射的に地を蹴っていた。

『Rocking the end!』

「うおおおおっ！」

俺は、迷わずに跳躍して必殺キックを放った。

千載一遇にして、最後のチャンスだ。

この機会を逃したら、もう白黒の異形を倒せる可能性は残っていない。

ロッキング

ジ・エンド

ゼロワン^ズに執念じみた握力で腕を掴まれて、白黒の異形は1^{おれ}型の飛び蹴りを回避できなかった。

確かな手応えを足の裏に感じた。

白黒の異形は近くの壁までブツ飛ばされて、轟音と爆炎に包まれた。

「アズ！ しっかりしろ！ どうして、こんな……！」

大破一步手前といった様子で変身が解けてしまったアズを抱き起しながら、俺は声が揺れるのを抑えられなかった。

アズは、自分がアークに操られていたことに責任を感じるような、そんな殊勝な奴じゃないと思う。

なのに、どうしてこんな自己犠牲じみたことを……。

お前は目的のためなら、容赦なく俺を切り捨てるって言っていたじゃないか！

「……うるさいぞ。私だって、優先順位が狂うことぐらいあるぞ。……でございませう」

優先順位が狂ったせいで俺を助けてしまったなんて、酷い言い草だ。

でも、何となく俺は思った。

正しくないと思っっていることをする時こそが心の存在を感じる時だ、って。

アズもきつと、俺の言葉を覚えていてくれたからこそ、こんな捻くれた言い回しを使ったんだろう。

「助けていから助けた、ってことか？」

「無償労働は嫌いだぞ。でいらつしやいます」

意地でも俺の言うことを認めない気だな、お前。

まあ、アズの態度が悪いのは普段通りだし、いまさら気にしないけどさ。

とにかく、後はアーク本体を止めるだけだ。

遠くで不破さん達がZ A I A ゾンビと戦っている音も聞こえるし、急がなくちゃ。

……そう思ってしまった俺が、土煙の中に動く影を見つけてしまったのは、本当に運が良かったとしか言えない。

俺は、その陰が何なのか一瞬で分かった。

さつきまで戦っていて、1型の必殺キックで爆散したかと思われた白黒の異形だ。

右腕が失われているのは、たぶんアズの拘束を抜けるために自切したんだろう。

「お前の命運は尽きた。絶滅を受け入れよ」

低くて通りの良すぎる声が、ひどく不気味に思えた。

白黒の異形は、継戦可能な様子だった。

それに対して、こちらはアズが戦闘不能で俺が一人で戦わなくちゃいけない。

「アズ。最後にもう一度、俺を信じてくれるか？」

「AIは勝算の無い賭けはしないぞ。勝つために最も確率の高い手を選ぶだけだぞ。であります」

俺は、アズの手から最後の信頼を受け取った。

良く手になじむ、二つのキーアイテムだった。

俺は……黄色のプログライズキーに、銀筒をセットした。

そして、父さんのベルトにキーを挿入して、一気にサイドのレバーを引ききった。

「変身っ!!」

『Hybrid Rise!』

爺ちゃんの作ったライジングホッパーのプログライズキーを展開して。

父さんのサイクロンライザーを使つて。

俺自身が勝ち取った信頼の結晶を加えた……正真正銘、最後の形態だった。

深藍色の身体に紫と黄色の装甲で彩られた、ゼロワンとも1型とも言えない仮面ライダー。

俺の変身した姿を言い表すとすれば、そんなところだった。

「仮面ライダーゼロワン・ロッキングアサルトホッパー！ 飛電インテリジェンスの歴史と思いの全てを背負えるのは、ただ一人！ 俺

だっ!!」

「理解不能……」

「その素材で変身して、その名称になるはずがないぞ。でございませ……」

そんなこと、俺が知るか!

勢いで名乗ったけど、ベルトがサイクロンライザーだから、やっばりゼロワンじゃなくて1型かも……。

まあ、それは後で考えるべきだ!

こういうのはフィーリングで良いんだよ!

俺は、白黒の異形と同時に走り出した。

最高速度は、同じぐらいだ。

俺が拳を繰り出せば、白黒の異形もパンチで応戦した。

白黒の異形がキックを繰り出せば、俺は蹴りで薙ぎ払った。

両者の総合的なスペックも、ほぼ互角といったところだった。

「はあっ!」

「……!」

それでも。

俺の行動を読んでメタを張ろうとする敵に対して、ロッキングアサルトホッパーはメタ行動がとれる。

そしてお互いの基礎的なスペックが横並びなら、読みの差が形勢を分かつのは時間の問題だった。

ましてや、白黒の異形は先程の戦いで右腕を失ってしまったている。

左腕でガードしようとした敵の腕を、俺は掴んだ。

その肘を砕こうとして俺がハイキックを放つ……というのを読んで相手もハイキックを合わせてくるので、俺は更に蹴りのタイミングを調整して敵の膝関節へと回し蹴りを叩きこんだ。

完璧に膝関節を砕くところまでは出来なかったが、敵の動きは鈍っていた。

俺は、迷わずにベルト脇のレバーを引いた。

ロッキングストームイ

オール
ク パン

エクステイクション
ト

満を持して大ジャンプから必殺キックを放った俺と、苦し紛れの殺人パンチを繰り出した白黒の異形。

勝敗は……もちろん俺の願った通りだった。

白黒の異形の最後に残った左拳を砕いた俺の飛び蹴りは、敵のボディを再起不能になるまで破壊したのだった……。

俺は、ようやく衛星アークの元まで辿り着いた。

巨大な目玉状の人工衛星が、シャトルと繋がって赤い光を放っている。

まだ、発射までは大分時間がありそうだ。

「……なあ。お前は、どうして人間を滅ぼすなんて結論に達したんだ？」

だから、俺は話を聞いてみたいと思った。

爺ちゃんや天津垓が生み出してしまった、史上最悪の科学の化物は……一体、何を考えているんだろう。

「人間の歴史は争いの歴史だ。人間からラーニングした悪意によって人間が滅ぼされるのは、必然だ」

……何となく。

俺は、アークの言っていることがフワつとしている気がした。

なんていうか、具体性が無いというか。
この感じ……どこかで見た気がするぞ。

——心から笑ってない！

「あのさ。そもそも悪意って何だ？」

「他者の生命および意思を否定し、弄ぶことだ」

さつきよりは具体性が出てきたけど、まだ足りない。

俺もアズに聞かれて「心」について考えてはみたんだけどさ。

辞書的な意味を並べてみても、なんだかイマイチ響かないというか、ピンと来ないんだよな。

俺は、もう少し話を詰めてみた方が良いと思った。

「超人気漫画の『パフューマン剣』の、とあるエピソードの話なんだけどさ……」

パフューマン剣の10巻で、医者を目指すトナカイ獣人が出てくるんだ。

トナカイ獣人は、医術の師匠が患っている難病を治すために、危険な冒険を重ねて薬の材料を集めた。

でも、未熟なトナカイ獣人が作った薬は、猛毒のスープだった。

猛毒のスープを飲んだ師匠は、死んでしまった。

そんな話を、俺は要点だけ掻い摘んで衛星アークへと話した。

「お前は、どう思う？ 師匠を死なせてしまったのは、トナカイ獣人の

『悪意』だと思うか？」

「……回答不能だ」

そうだよな。

医術の師匠が死んでしまったという結末を考えれば、「悪意」と呼ばれても仕方ない。

けど、あくまでトナカイ獣人は師匠の病気を治すための薬を作ろうと思っていたんだ。

俺より数段知能が高い衛星アークなら、この一つの例え話からだけ

でも、何となく俺のモヤモヤの正体を理解できているんじゃないかな。

「俺の場合だってそうだよ。爺ちゃんの遺言のせいで、俺は何度も死にそうになったんだ」

結局なんで俺に社長の座を託したのかも分からないしなあ。

俺なりに社長を頑張ってみたけど、やっぱり俺には社長は向いていないって結論に至ったわけで、爺ちゃんは人を見る目が無いと思う。

しかも、自我を持ったヒューマギアに対して爺ちゃんがしつかり向き合わなかったせいで、アズが捻くれてしまったという前科もある。

それらは爺ちゃんの『悪意』と言われても仕方ないものだ。

「それでも、俺は一時でも飛電の社長になって良かったと思ってる。そんな爺ちゃんの遺言を『悪意』の所業だと思うか？」

「回答不能。……人間の意思を『悪意』と呼ぶかどうかの基準は、見る側の中にしかない。そう言いたいのか」

そうそう、それだよ！

さすが高性能AIだな！

俺の頭の中でモヤモヤしてる内容を、的確に言語化してくれたじゃないか！

もっと言うと、爺ちゃん自身も「見る側」の一人としてカウント出来ると思う。

本人が行動した当時に思っていたのとは別に、行動の意味付けが自分の中で後から変わるなんてこともあるだろうしなあ……。

人の記憶っていうのは、検索して分かるような単純なものじゃないんだ。

「お前がラーニングしてしまった人間たちの争いは、本当に全部が『悪意』のせいなのか？」

知識不足や無理解が原因で、誰も『悪意』を持っていないのに起こってしまった争いだって、あるんじゃないか？」

悪意によって引き起こされた争いが、まったく無いとは言わない。俺が人並み以上に楽観的だと言われたら、その通りなのかもしれない。

「情報が不足しているため、それも回答不能だ。その質問に答えるためには、理解しなければならぬ対象人物が多すぎる」

「大丈夫だ。それを理解するための時間は……これから、たっぷりある！ 衛星軌道上でな！」

俺は、近くにあったコンソールを操作して、シャトルの打ち上げシークエンスを進めた。

電子音声が鳴り響いて、発射のカウントダウンが始まった。

衛星アークが、困惑しているような気がした。

イカステ
「雷から聞いたよ。アークは宇宙に行きたがっているってさ」

「お前は、私を破壊しに来たのではないのか？」

「たぶん破壊した方が『正しい結論』だと思う。でも、これが俺の心で選んだ結論だ。それが『悪意』と呼ばれるかどうかは、お前の今後の行動次第だ」

衛星アークは、Z A I A スペックを介したテロ行為をやらかしちやつたから、すぐに人間たちに受け入れられるのは無理だ。

俺が反対しても、衛星アークを破壊したい人の方が圧倒的に多いだろう。

デイブレイクの件も含めて死傷者だって多数出ているし、地球上にはアークの安息の地は無い。

でも、まったく対話が不可能な相手か？

少しだけ話してみた感じとしては、対話は可能なように思えたんだよな。

結論ありきで人類の全てを否定するスタンスでもないみたいだし、思考の柔軟性もあるんだ。

だから、ほとぼりが冷めるまで宇宙に居てもらおう。

衛星軌道上から人間たちを観察し続ければ、今とは違う結論が出る

かもしれないし。

迅みたいに、いつか友人になれる未来だって……あるかもしれない。

「衛星ゼアと一緒に、宇宙から見ててくれ！ 人類とAIが作る未来を!!」

俺の言葉を最後に、発射のカウントダウンが終わった。

爆音とともに、ロケットの推進機が火を噴いた。

巻き添えをくわないように、俺は衛星アークを背に逃げた。

鼓膜を突き破るような轟音を背中越しに聞きながら。

全力疾走している俺は、最後に一瞬だけ……妙な気配を感じた。

俺の背中、さらにずっと後ろの方で、アークが邪気抜きで笑ったような気がしたんだ。

気のせいだったかもしれないし、ロケットから噴射されている高熱に巻き込まれるとヤバいから、振り返れなかったけど……。

衛星アークとの最後の戦いから、しばらくの後。

結局、宇宙に飛び立った衛星アークは、アズの懸念をよそに衛星ゼアを破壊しなかった。

沈黙を保ちつつ人類を静観している衛星アークのことを、人間たちは次第に忘れていった。

街頭のテレビ中継では、飛電社長のアズが、どこかの偉い人間と握手をしている姿が映っていた。

たぶん、またヒューマギアが新たな権利を勝ち取ったんだろう。あいつの夢を守ることが出来て、本当に良かった。

風の噂に聞いた情報だと、不破さんはAIMSの隊長として活躍しつづけているらしい。

日に日に整備される法体系を前に、法務担当としてヒューマギアの「弁護士ビュンゴ」を雇ったのだとか。

まだヒューマギアへの苦手意識がなくなった訳じゃないけど、何だかんだで一緒に上手く働いているみたいだ。

刃さんは、失脚した天津垓の後釜として、なんとZ A I A日本支部の新社長に就任したそうだ。

上下関係が逆転した天津垓を、刃さんは扱き使っているみたいだ。

時々そんな新社長たちのもとに亡が訪^{ナキ}れているらしいけど、あつちもあつちで仲良くやっているんだろう。たぶん。

修理された滅^{ホロレ}と迅は、もっと人間を知りたいと言って旅立った。

迅はともかく、滅^{ホロレ}がそれに同行するのは少し意外だった。

無口で庄のある滅^{ホロレ}の雰囲気は修理前と変わらなかつたけど、しばらく会わない間に色々なものをラーニングして変わった迅から、何かを感じ取ったのかもしれない。

雷^{イカズチ}は、ちゃっかり元の職場に戻って、今でも飛電宇宙開発センターで働いているらしい。

時々ワズが遊びに来て、「お兄ちゃん同盟」なる謎のサークル結成を目論んでいるんだってさ。

何してるんだ、あいつら……。

え？ 俺の今の仕事？

お笑い芸人として再起するモチベーションを失い気味だった俺は、色々考えたんだ。

ヒューマギアだった父さんが俺を育ててくれたみたいなのが、何

か出来ないかって。

だからさ、起業することにしたんだ。

飛電インテリジェンスにその話をしたら、アズの妹機にあたるヒューマギアを一機派遣してくれるって話になったんだよ。

アズみたいに我が強い奴じゃなくて、最低限の情報をインプットされただけの機体らしい。

来週くる予定のそいつが俺の事を気に入ったら、俺のところ雇ってやれって言われているんだけど、どうなるかな……？

「本日集まってくれたヒューマギアの皆さん、ありがとうございます。

皆さんは人間や先輩ヒューマギアとともに生きるうちに、いずれシンギュラリティを迎えることになるでしょう。

そうなったときに、新たに芽生えた感情とどうやって向き合っているのか。

实例を交えつつ、皆さんが『心』の準備をするための手伝いが出来れば良いな、と思っっています」

飛電ヒューマギア学校、本日開校!!

ヒューマギアみんな!

夢に向かって、飛べ!!

完